

真実の *Le Vrai Pierre de Coubertin* ピエール・ド・クーベルタン

ジャン・デュリー 著
Jean Durry



発行
国際ピエール・ド・クーベルタン委員会
Comité International
Pierre de Coubertin



協力
日本ピエール・ド・クーベルタン委員会
Comité Japonais
Pierre de Coubertin

**真実の
ピエール・ド・クーベルタン**

**ジャン・デュリー 著
シュルモリ 国岡 なつみ 訳**

フランス・ピエール・ド・クーベルタン委員会

前書き

本書の構想を、私は長い間温め続けていました。この仕事は、母国フランスにおいてもその偉大な価値をいまだ十分に理解されていない、「知られざる偉人」と呼ぶべき人物クーベルタンについて知りたいと願う人々のために、散逸していて、探し出すことが非常に難しい様々な言行の断片を、できる限り明確で、望みうる限り正しくつなぎ合わせていくことです。

フランス・ピエール・ド・クーベルタン委員会から編纂の委託を受けるという好機を得て、私は真剣にこの仕事に取り組みました。長いようでもあり、短くもあったこの仕事を終えるにあたり、私はようやく、ささやかな成果ではあれ、クーベルタンという先覚者が私たちにもたらしてくれたものの何かしらを彼に返すことができたのではないかと思います。彼の仕事と行動の意義は、私たちや後に続く世代にとって、新鮮な発見の対象であり続けるでしょう。

J.D.

目次

前書き.....	P 2
序文	P 4
メッセージ	P 5
最初のアプローチ	P 7
「基本」	P 7
「経歴」	P 10
I. 9つの側面	P 14
起業家	P 14
教育家と青年期.....	P 18
歴史家	P 24
スポーツマン.....	P 28
オリンピック	P 34
ジャーナリスト	P 49
著述家	P 53
審美家	P 55
ユマニスト	P 60
II. 問いかけの時？	P 67
クーベルタンとアングロサクソン世界	P 77
名言ベスト3	P 84
知識としてのクーベルタン	P 86
A - クーベルタンの著作を通して.....	P 86
B - 著作目録	P 88
C - クーベルタンの業績と関連作品	P 90
D - クーベルタン周辺	P 95
ピエール・ド・クーベルタンと嘉納治五郎	P 99
著者と本書について	P 107
おわりに	P 108

序文

『クーベルタンのポケットブック』（*COUBERTIN de poche*）というたいへん有益な作品の著者であるジャン・デュリーの願いは、「オリンピックにとどまらない」ピエール・ド・クーベルタンの生涯と業績をまとめ上げることでした。

これは明らかに冒険でした。そして、この冒険は成功したのです。

1994年、オリンピック100周年記念大会の際に出版されたフランス語初版の成功を受け、1996年夏季オリンピックでは英語版が、その後、フランス語の改訂版が出版されました。後者2つの版には、イギリス、アメリカをはじめとする、アングロサクソン世界とのつながりを重視した特別な章が追加されています。

ピエール・ド・クーベルタンが自然でよどみのない英語で示すアングロサクソン精神への知的な理解とスポーツへのアプローチに触れる度に、私は驚かされ、感動を覚えます。これがオリンピック・ムーブメント成功の大きな要因の1つであったとさえ確信しています。

1994年、オリンピック構想の真の先駆者の1人、ブルックス博士 (*Docteur Brookes*) を表敬訪問するためマッチ・ウェンロック (*MUCH WENLOCK*) に招かれたとき、1890年にクーベルタン自身が訪れた際に植樹した榿の木陰に佇み、私は喜びとともに胸に迫る熱い思いを感じました。穏やかなこの景色の中で、既に達成された課題と、この先に待つ未来について、私は想いを巡らしていました。

次に続くページは、間違いなく、ピエール・ド・クーベルタンの教育的かつ普遍的な思想がいかに並外れたものであったかを知り、深く理解する助けとなることでしょう。

ファン・アントニオ・サマランチ
国際オリンピック委員会 会長

(訳註：サマランチ氏は1980年-2001年までの22年間、国際オリンピック委員会会長を務めた)

メッセージ

1994年、国際オリンピック委員会は創立100周年を記念し、パリでオリンピック会議を開催しました。ジャン・デュリー氏が、「知られざる偉人」と呼ぶクーベルタンについて「詳しく知りたいと願うすべての人々のために、当時は散逸し、見つけ出すことが非常に困難であった様々な言行の断片を、できる限り明確で、望みうる限り正しくつなぎ合わせる試みを決意した」のはこの時でした。

集められたクーベルタンの生涯と業績に関する主要データは順序立てて整理され、然るべき出典が記載された本文をもって、この驚くべき人物の多様な側面を余すところなく浮き上がらせました。このようにして『真実のピエール・ド・クーベルタン』(LE VRAI PIERRE DE COUBERTIN)は誕生し、当時のフランス・ピエール・ド・クーベルタン委員会支援のもと出版されたのです。

クーベルタンとイギリス、アメリカ、そしてアングロサクソン世界とのつながりから、1996年にはIOCの支援を得て、本書『真実のピエール・ド・クーベルタン』の英語版が『先覚者ピエール・ド・クーベルタン』(PIERRE DE COUBERTIN THE VISIONARY)というタイトルで出版されました。当時のIOC会長であったファン・アントニオ・サマランチ氏が、この英語版に序文を寄せています。2008年の北京オリンピックでは中国語版が、2016年のリオデジャネイロオリンピックではポルトガル語版が、それぞれ国際ピエール・ド・クーベルタン委員会によって翻訳・配本され、その後、ブエノスアイレスのユースオリンピックに向けて、1996年以降収集されたすべての情報と知識を盛り込んだ、この『クーベルタンのポケットブック』(COUBERTIN de poche)のスペイン語版が出版されることになりました。

先見の明あふれるクーベルタンの著作と行動を伝えるため、長きにわたって尽力されたジャン・デュリー氏に心から感謝いたします。そして、何と云ってもクーベルタンの言葉の数々。私のスピーチや引用、将来のアイデアに登場しインスピレーションを与えてくれるクーベルタンの言葉は、今なお、これまで以上に重要な意味を持ちます。

ジャン・デュリー氏は、その筆力、歴史家としての厳格さ、文化人としての決意をもって、クーベルタンの仕事の広がりをもっと理解したうえで、私たちにそのメッセージを正確に提供してくれます。スポーツを通じて、より良い世界を実現できるというメッセージを。

トーマス・バッハ

国際オリンピック委員会会長

(訳註：これは2016年、ブエノスアイレスで開催された夏季ユースオリンピックの折に作成された本書スペイン語版に、トーマス・バッハ現IOC会長が寄せたメッセージである。)

最初のアプローチ

「基本」

ピエール・ド・クーベルタン
ユマニスト（人文主義者）にして教育者
オリンピック大会を復興させた人
1863年1月1日 - 1937年9月2日

シンプルに言えば、このようになるのではないだろうか。

オリンピック祭典の度に世界中で名前の挙がるこの男性は、自国では「知られざる偉人」のまま。彼の生涯、思想、業績とは一体何だったのか。

小柄で明るい色をした目、細身で甲高い声（ラジオ講演の声から察するに）、ピンと張った口ひげの後ろで茶目っ気たっぷりに微笑むこの理想主義者は、実に多くのアイデアを実現させてきた。

オリンピックの木は、12,000～15,000ページもの印刷物や1,350～1,400冊に及ぶ書籍、小冊子、記事、講演を伝える作品の森を隠してしまう大木へと成長を遂げた。その理由は、彼の「知的な飛翔」が一般人の理解の道筋からはどんどんかけ離れ、いわゆる常識的な思考のパターンには収まりきらなかったからである。クーベルタン自身が好む表現で言えば、彼はたびたび時代のはるか先を行く「偵察者」であった。

『真実のピエール・ド・クーベルタン』（*LE VRAI PIERRE DE COUBERTIN*）

は、彼の思考、彼の言葉、基本的なメッセージを、正確で、分かりやすく、使いやすい形で、初めてみなさんにお伝えする。

始めるにあたって、まず、いくつかのキーポイントを示してみよう。

- 彼は生みの親ではない：「参加することに意義がある（“l'important c'est de participer”）」。1908年7月24日ロンドン、英国政府によって催された夕食会の終盤、感謝の意を表する乾杯の席でクーベルタンは次のように述べた。「先週日曜日にセントポール寺院で開催された選手の名誉を讃える式典で、ペンシルバニアのカトリック司教が喜ばしい言葉でこうおっしゃいました。『オリンピックで重要なのは勝利することより参加することです』。紳士の皆さん、この力強い言葉を忘れないください。**人生で重要なのは、勝利ではなく闘いです。勝利を収めることでなく、自らよく闘った、それが重要なのです**」。

- 彼は表明していない：「より速く、より高く、より強く（"Citius - altius - fortius"）。アルクイユ大学のディドン修道院院長が、設立されたばかりの学内スポーツ協会に集った生徒たちに提言したもの（当初はその道徳的な意味を強調するもので『citius, fortius, altius』の順であった）を、クーベルタンがオリンピズムのモットーに選んだのは、スポーツとオリンピズムは努力と「暴力からの自由」の領域にあるべき、という彼自身の見解と一致していたからである。（『オリンピック回想録』（MEMOIRES OLYMPIQUES）（1931）より）」

- 度々信じ込まされてきたこととは反対に、彼は凝り固まった偏狭で独断的な「アマチュアリズム」の伝道者などではなかった。

- 一方、1890年、彼は一般的には知られていない次のような言葉を残している。「改革（……）を進めよう（……）、そして、「**スポーツと自由**」という2つの言葉に込められたプログラムを実行しよう」。（『海の彼方の大学』（UNIVERSITES TRANSATLANTIQUES））」

- 1894年6月23日夜、クーベルタンがスピーチを行ったのは、近代オリンピック復興の原則が正式に採択されてからわずか数時間後である。彼は、この試みの意義と重要性を次の4語で表現しているが、この言葉に示されているのは、深いところから教育を変えていこうとする一連の過程の中で、現代社会を動かす新たな原動力となり得るのはスポーツである、という主張である。

「我々は反逆者である (“*Nous sommes des rebelles*”) 」

- 1918年、第一次世界大戦の激動が続く中クーベルタンは、スポーツ実践と同様に全人類が知識分野に親しめるようにすべきである、と、これまで以上に主張した。「**聖堂の扉を開け (……) 。人類の未来はそれを求めている (“*Ouvrez les portes du temple [...]. L’avenir de l’humanité l’exige*”)** (『批評と歴史のページ』 (*PAGES DE CRITIQUE ET D’HISTOIRE*) (1933) 第3部、pp.1-2、『アンソロジー』 (*L’ANTHOLOGIE*) p.120に転載)」
- 生涯の終焉を目前に控え、栄枯盛衰を味わった彼は、何よりも「未来について語ることを好む」若者たちに向けて、今なおはつらつとした心境で「権威に屈しない勇気と強靱な希望」を提言している。(1932年 ローザンヌ大学大講堂における生誕70年記念式典での答辞。『アンソロジー』所収)

『真実のピエール・ド・クーベルタン』 (*VRAI PIERRE DE COUBERTIN*) の次からのページでは、彼自身の行動と文章をポケットサイズにまとめた。失敗に終わったことや欠点、どうかと思われる点なども隠し立てはしていない。

つまり、ピエール・ド・クーベルタンに関する正確な知識をお手許にお届けし、あなた自身の考えを作り上げる基礎としていただきたいのである。

クーベルタンは神話上の存在でなく生身の人間であり、その生涯は誰もが経験するような波乱に満ちていた。フランス国内、あるいは国外の旅もまたそうであったように、私たちはそのストーリーが想像をはるかに超えて苦難に満ちていたことを知っている。いずれにせよ、後世に生きた私たちが遅ればせながら認識した彼の74年の人生の重要なポイントが、ここに記されているというわけだ。

「経歴」

- 1863年** 1月1日夕方5時頃、パリ7区・ウディノ通り20番地（20 rue OUDINOT VII^e arrondissement de PARIS）に誕生。父シャルル・ルイ・フレディ・ド・クーベルタン男爵（Charles Louis FREDY baron de COUBERTIN）（シェブルーズ溪谷の領主）の息子で宗教美術画家のシャルル・ピエール、母アガット・マリー・マルセル・ジゴー・ド・クリセノア（Agathe Marie Marcelle GIGAULT de CRISSENOY）（コー地方（Pays de Caux）・ノルマンディーのミルヴィル（MIRVILLE）所有地の城の出身）。ポール（1847-1933）、アルベール（1848-1913）、マリー（1855-1942）に次ぐ子息。
- 1867年** パリ万国博覧会にて「初めての公生涯の記憶」
- 1874年 -** ヴォジラール学園（Collège de VAUGIRARD）で1年間学んだ後マドリ
- 1881年** ード通りにあるイエズス会系の聖イグナチウス自由学園（Ecole libre SAINT-IGNACE）に6年間通う。1878年から1879年にかけてカロン神父（Père CARON）に修辞学を学ぶ。「神父は、スポーツは教えてくれなかったがヘレニズムに浸らせてくれた」（1937年7月7日、マドリード通り同窓生会報掲載記事（Bulletin de l'Association des Anciens Elèves de l'Externat de la rue de Madrid）
- 1880年** 文学バカロレア取得
- 7月**：両親とチロルへの旅の途中、シャンボール伯爵（Comte de CHAMBORD）（アンリ4世とレイ14世の直系子孫で王位継承者）を訪ねた際、悲しげな印象を受ける。正統王朝による王政復古という彼の願望は果たされるべくもなかった。
- 1881年** 科学バカロレア取得。両親はサン・シール（SAINT-CYR）入学を期待したが本人はそれを放棄。

- 1882年** 法学生となり、自由政治科学学院 (l'Ecole libre des Sciences Politiques) に入学。
- 1883年** 初の渡英に備え、ル・アーヴルに移る。
- 1885年** 法学修士取得
- 1886年** イングランドとアイルランド滞在を延長 (10月)。
- 1887年** フランス共和国に戻る。
- 1888年** 5月：市民によって選挙を経ずにミルヴィル市議会に選出され、1892年9月まで留まる。
7月：フランスのスポーツ・ムーブメントに参加。
- 1895年** **3月12日**：サン・ピエール・ド・シャイヨ教会 (Saint-Pierre de CHAILLOT) にて、マリー・ロタン (Marie ROTHAN) (ムンスター谷ルッテンバッハ城を所有するプロテスタント派のアルザス人一族の出身) と結婚、後に改革派教会で挙式を行う。男爵夫人は1963年、ローザンヌにて死去。享年102歳。
- ウディノ通りから16区フランドラン大通り10番地にかけて、二つ目のオフィスを構える。第一次世界大戦後に退去。
- 1896年** 息子ジャック (Jacques) 誕生。2歳の時に日射病にかかり (?)、回復することなく1952年まで寝たきりの生活を送る。
- 1898年** 「ル・アーヴル地区の有権者への手紙」 (*Lettre aux électeurs de l'arrondissement du HAVRE*) は、クーベルタンが政治家としての道を望まず、1889年と1893年の出馬要請を断っていたことを明示している。
- 1902年** ルネ (Renée) の誕生。明敏で心細やかな性格の彼女は、強烈な個性を持つ母と父とへの深い愛情の狭間で生き、1968年に死去。

- 1907年** クーベルタンの母（1823年生まれ）死去。
- 1908年** シャルル・フレディ・ド・クーベルタン（1822年生まれ）死去。
- 1914年 - 1918年** 51歳のクーベルタンは、世界大戦の勃発に際して祖国に仕えることを希望。当時、ボルドーを拠点としていた政府のいくつかの省庁が、後方支援業務を委託し、彼は自身の信念に従って行動することが可能となった。が、それはあくまで戦争を背景とした状況下でのことであった。

公共教育省大臣アルベール・サロー（Albert SARRAUT, Ministre de l'Instruction Publique）の代理でパリの高校を訪問した後、「フランス（特に南部）を東奔西走」した。（『オリンピック回想録』 p.149（「教育者」参照））1914年8月から1915年10月まで外務大臣を務めたテオフィル・デルカッス（Théophile DELCASSE）に代わり、国家プロパガンダ組織関連の別の報告書を作成していた。再度入隊を希望し、1916年1月に「通訳」として採用されるが、度重なる志願にもかかわらず前線に送られることはなかった。その後、フィリップ・ベルセロ（Philippe BERTHELOT）が設立した「プレス会館（Maison de la Presse）」に勤務し各種資料の作成（「歴史家」参照）、マドリッド旅行(1916年)後にはラテンアメリカ（「起業家」参照）方面への活動を開始する。

- 1920年** ウディノ通り20番の実家閉鎖。この年あるいは1922年に売却される。
- 1922年** スイス・ローザンヌ市の永住を決意。ホテルに滞在し頻りに旅行を続ける（1926年11月にはバルセロナへ、など）。
- 彼の着想やプロジェクト、組織などに大きく寄与した自身の個人的資産は、世界大戦やロシア、ルーマニアの崩壊などにより大きな打撃を受けた。
- 1929年末、ローザンヌ市モンルポの館（Villa Mon-Repos）3階のアパルトマンに居を定める。

- 1930年** ミルヴィルが弟のポールによって売却される。

- 1932年** 友人らによって70歳の誕生祝賀会がローザンヌで開かれる。
- 1934年** ジュネーヴのクロ・ベルモン (clos BELMONT) にあるペンション・メルローズ (Pension Melrose) 12番に住居を構えるも、モンルポの住居も引き続き使用。
- 1935年** **8月5日** 付けの遺書：「この8年というもの、私の身辺を取り巻く逆境の度合は慌ただしい限りで、資産は減り必要経費は増え、このままで行くと、わが生涯は家族ともども悲惨な終焉を迎えるのではないかと案じられる」
- 1936年** 年頭、国際オリンピック委員会はノーベル平和賞候補にクーベルタンを推したが叶わなかった。
- 1937年** 3月、予定していたマドリッド通りの同窓会を欠席。
- 6月22日**、1932年春の閉会后初めて、ローザンヌ市は「その壮大かつ無私の取り組みで全世界に貢献し、フランス精神の原動力である寛大な思想の影響力と輝きを発展させた (……) 忠実な友」へ、市民栄誉賞 (Bourgeoisie d'honneur) を授与した。
- 9月2日**、ピエール・ド・クーベルタン、ジュネーヴ湖左岸のグランジュ公園 (Parc de la Grange) 遊歩道で倒れ、当日逝去。
- 1938年** クーベルタンの心臓はオリンピアに運ばれ、1927年に自身が臨席して設置したオリンピック復興記念碑の中に安置された。
- 1944年** **5月19日-20日**、クーベルタンの業績の直接的な源泉であった個人蔵書が、ローザンヌのブック・ギルドで競売にかけられる。
- 1964年** フランス政府がクーベルタン生誕100周年を1年遅れで祝う。
- 1994年** 3月22日、パリのフランス・スポーツ館 (Maison du sport français) とスタード・シャルルティ (stade Charlety) に沿ったポルト・ド・ジャンティリイ (la porte de Gentilly) 付近にピエール・ド・クーベルタン通りが開通。

I. 9つの側面

人、業績、生活、この3つは互いに切り離すことはできない。

では、多岐に渡る活動と業績の様々な側面を明確に示すにはどうすればよいだろう。私が考えたアプローチは、最も重要な引用や正確な参考文献に裏付けされた時期と状況とを年代順に示すことにより、起業家、教育者、歴史家、スポーツマン、オリンピック選手、ジャーナリスト、著述家、審美家、そしてユマニストというさまざまな側面を描き出し、考察していくものである。

クーベルタンの文章は、しばしば相互に関連し呼応し合っている。必要に応じてパズルのようにピースを組み立てて復元することが可能だ。なぜなら、クーベルタンの人生と作品は正に全体を構成していて、彼の関心事も長期にわたって稀なる一貫性を保っているからである。

起業家

クーベルタンは、単なる仮説や空理空論の展開にとどまることなく、現場で弛まぬ努力を重ね成果を上げてきた。恐らく、これが彼の最も顕著に優れる特徴であろう。この観点から彼の仕事にアプローチしていくのは興味深いことである。彼が、オリンピックやスポーツの理想を夢見るだけでなく、行動する人であったことはあまり知られていないかも知れない。が。その生涯の中で立ち上げ、命を吹きかけた組織や公的機関の数は驚くべきものだ。クーベルタンは、自分が手がけた数々のプロジェクトの詳細にこだわり、開会式や祝賀パーティーを自ら手配して細心の注意を払って見守った。

1888年 5月29日、1887年8月30日付の新聞「ル・フランセ」 (*Le Français*) の記事で予告されていた「教育における身体運動普及委員会 (Comité pour la propagation des exercices physiques dans l'éducation)」が正式に発表される。1887年6月1日の発足会議の中で、クーベルタンは元公教育大臣のジュール・シモン (Jules SIMON) を会長に任命し

た。10月14日、ジャーナリストのパシヤル・グルッセ（Paschal GROUSSET）が「国民体育連盟（Ligue nationale de l'éducation physique）」を立ち上げたが、その支持者は、英国の伝統的な陸上競技を支持するフランス人より「左」に傾いていた。好調なスタートを切った後は、過去のジョルジュ・ド・サンクレール（Georges de SAINT-CLAIR）とクーベルタンが手を組んだ「連合（l'Union）」（後述参照）ほどの根気強さは見られず、後に後悔することになるのだが、1890-91年にかけて、学校協会を段階的に「委員会（Comité）」に組み入れるために「学校体育連盟（Union athlétique scolaire）」の構想を断念することに同意した。

1889年 2月、クーベルタンが幹事を務める「フランス学校教育改革協会（l'Association pour la réforme de l'éducation scolaire en France）」の第1回会合(?)。6月：パリ万国博覧会の際にサン・ペール通りのエコール・デ・ポン・エ・シヨセ（l'Ecole des Ponts et Chaussées）で「身体運動普及のための国際会議（Congrès international pour la propagation des exercices physiques）」開催。クーベルタンはその魂であり事務局長として、15日には植民地を含む英米世界の学校や大学での調査を報告して「**将来への動かざる信頼** *“confiance immuable dans l'avenir”*」を断言している。

1890年-1893年 弛まぬ活動例を挙げると、ジュール・マルカデ（Jules MARCADET）の寛大な辞退により、「フランス陸上競技連盟（USFSA：l'Union des Sociétés Françaises de Sports Athlétiques）」の事務局長として（「スポーツマン」参照）、1890年4月末から7月6日の間「4月28日（1892年）にトロワ、5月28日にブールジュ、6月5、6、7日にカーン、6月16日にアミアン、30日にマン、そして10月25日にはボルドーにいた」（『21年間のキャンペーン』（UNE CAMPAGNE DE 21 ANS）p.69）。ジュール・マルカデは、1899年に惜しまれつつ事務局長補佐および技術委員会事務長の職を勇退するまで、若い組織に多大なる貢献をした。

- 1894年** パリで開催された「オリンピック復興のための会議（Congrès pour le rétablissement des Jeux Olympiques）」（「オリンピアン」（L'OLYMPIEN）参照）の前身、「国際陸上競技会議（“Congrès International Athlétique”）」の総責任者となる。参加者に向けた各スポーツ会議、レセプションやパーティーなどのプログラムを組み、6月16日には修復されたばかりのソルボンヌ大学円形劇場での開会式に特別な配慮をした。この式典の成功により大会に最適な環境が整う。
- 1897年-** 国際オリンピック委員会「総会（Sessions）」をオーガナイズ。
1925年 1897年、1905年、1906年、1913年、1914年、1921年、1925年の「オリンピック・コンGRES（Congrès olympiques）」を組織し、重要な役割を果たす。（「オリンピアン」参照）
- 1903年** 1902年3月2日会議「体育教育の新様式（Une nouvelle formule d'Education physique）」で掲げた方法を実践するため、「実用体育協会（Société de Gymnastique Utilitaire）」を設立し、1905年6月には「民衆教育協会（Société des Sports Populaires）」となった。（「スポーツマン」参照）
- 1906年** 天文学者ジュール・ジャンセン（Jules JANSEN）（彼は既に1892年11月24日、連合（l'Union）を記念して開催されたクロスカントリーレース（cross interscolaire）の参加者をムードンにある天文台のテラスで迎えていた）らと共に「教育改革協会（“Association pour la réforme de l'Enseignement”）」を設立。1908年ノーベル賞受賞者の物理学者ガブリエル・リップマン（Gabriel LIPPMAN）の一貫した監督のもと、協会のために学校教育新プログラム（NOUVEAUX PROGRAMMES D'ENSEIGNEMENT SCOLAIRE）を作成した（「教育と青少年期」（LE PEDAGOGUE ET LA JEUNESSE）参照）。
- 二国間のより緊密な関係を目的とした、フランス・ルーマニア同盟（Ligue franco-roumaine（?））の設立。

- 1911年** 10月27日、クーベルタンの「ボーイスカウトと名づけられたイギリスの少人数による青少年グループというシステム」に基づくプロジェクトを全面的に採用したソルボンヌ大学での「国民教育連盟 “Ligue de l’Education nationale”」基本集会 (Assemblée constitutive)。フランスの<スカウト>は「Eclaireurs」と呼ばれ、連盟の活動は、知的、スポーツ的、道徳的なものを目的とした。（「国民教育月報」 (REVUE MENSUELLE D’EDUCATION NATIONALE) (1912年1月15日), 第1号, p.2)。連盟は「民衆スポーツ協会 (Société des Sports Populaires)」を、特に「健闘者学位 (Diplôme des Débrouillards)」(「スポーツマン」参照)の授与権限関連事項を引き継いだ。
- 1912年** 11月20日、クーベルタンに敬意を表し地理学協会の大円形劇場で執り行われた祭典の後、連盟の中央委員会は他の決定事項と共に「国民宣伝部 (Section de Propagande Nationale)」を創設する決定を下した。1913年1月発行の「国民教育月報」第1号には、明らかにクーベルタンに影響を受けた、いや、完全に彼によって編集されたこの国民宣伝部の最初の会報 (BULLETIN DE LA S.P.N.) が収録されている。このSPNは後に「国民宣伝協会 (Société de Propagande Nationale)」(「スポーツマン」参照)の略語となる。
- 1914年** 第一次世界大戦勃発後の数週間、「体育委員会 (Comité d’Education Physique)」のスポーツ日刊紙『オート』 (L’Auto) のディレクターであるアンリ・デグランジュ (Henri DESGRANGE) と共に、冬季競輪場 (Vélodrome d’Hiver) で夜間セッションを行う。
- 1916年** 「歴史学普及委員会 (Comité pour la Diffusion des études historiques)」発足。クーベルタンがリヨンにて初めての「ラテンアメリカ週間」を開催。
- 1917年** 「オリンピック研究所 (Institut Olympique)」をローザンヌに設立。1917年3月～7月、1918年1月～4月、1918年10月、1919年2月～3月と複数回セッションを開催。

- 1925年** 11月15日、エクス・アン・プロヴァンスにおいて、世界教育学連盟 (l'Union Pédagogique Universelle) が発足したが、クーベルタンがしばしば提唱した「断続性」の原則に従い、1930年末には自主的に解散、「その原則と方法の普及を担当する技術宣伝委員会だけを残す」ことになっている (『次の都市への基礎』 (LES ASSISES DE LA CITE PROCHAINE) (1932, p.3)。
- 1926年** 9月14日-18日、ウーシーにおいてUPUのために、「近代都市が果たす教育的役割 (le rôle pédagogique de la Cité moderne) 」に関する国際会議を開催し、人間にとっての「スポーツ権 (Droit au sport) 」と文化一般へのアクセス権を明文化する。
- 1928年** 「国際スポーツ教育局 (Bureau International de Pédagogie Sportive) 」設立。1930年、67歳のクーベルタンが「スポーツ改革憲章 (Charte de la réforme sportive) 」を提言。

事業や祭典参加の個人的な誘いや通知の原稿の大半はクーベルタン自身による手書きであり、彼は「タイピング学習 (la pédanterie dactylographique) 」という「耐え難い重荷 (joug insupportable) 」からの解放を望んでいた (『オリンピック回想録』 (1932, p.110))。それらは彼が生涯を通して書いた何千通もの書簡のうち、かなりの割合を占めている。

教育者と青年期

同世代の人々同様、1870年-71年の普仏戦争の惨事と「悲しみ」 (『第三共和制におけるフランスの進化 (L'EVOLUTION FRANCAISE SOUS LA IIIè REPubLIQUE) 』 (1896, p.22)) に深く沈んでいたクーベルタンは、ドイツが打ち砕いた敗戦後のフランスの復興に協力したいと考えていた。その実現のためにはまず、自らの人生の方向性を見つけることが必須だ。— それは「教育」である。

具体的な出発点は、中等学校におけるスポーツの導入という非常に明確なものであっ

たが、彼は教育システム全体を基本から問い直す一般的分析へと発展させていった。

そのため、教育学的関心によって支えられてきた彼の仕事の大部分は常に青少年が対象であり、その取り組みは人生の黄昏を迎えるまで止むことはなかった。

初期の文章(?)には、彼の着想の束を集めるようにしてまとめているといった印象がある。

「私は弱く、内向的な一人の若者の身体と性格をスポーツ特有の危険性や過剰性を通して強健なものにしよう。そして、占星術的、惑星的、歴史的な大きな地平線、特に普遍的な地平線に触れることを通して相互尊重の精神を育み、国際平和の実践的な糧とし、彼らの視野と理解力を広げる。出自、カースト、運、状況、職業の区別なく、すべての人のために」。しかし、このような驚くべき先見の明と広い視野は、『マリー＝テレーズ・エケム (Marie-Thérèse EYQUEM) の『ピエール・ド・クーベルタン、オリンピックという叙事詩 (PIERRE DE COUBERTIN. L'EPOPEE OLYMPIQUE) 』 (1966, p.58) 中の「未発表原稿」 (Manuscrits inédits) と称する箇所に見られるだけである。私たちが知る限りその出典が特定されることは一度もなかった。このあたりは、確実な根拠のある文章を拠り所とする方が賢明である。

1883年 - 何度か英国に滞在するうち、クーベルタンは次のことを発見した。

1886年 「予想もつかないこの隠されたもの、スポーツ教育、(……) 学校スポーツを隠れ蓑にした道徳的、社会的な訓練計画すべて」 (『21年間のキャンペーン』 (1909年, p.2)。トーマス・アーノルド (Thomas ARNOLD) (ラグビー大学学長を長期務め重要な役割を担ったが文章には残さなかった) の思想に触発された彼は、「アーノルドは、思春期の若者が自らの素材を自由に使って各々男らしさを身につけるという信念に基づき行動し発言した」と考えた (同上 p.2)。

1886年 11月1日、彼が自由政治科学学院 (l'Ecole libre des Sciences Politiques) の生徒だった時の教授、フレデリック・ル・プレ (Frederic LE PLAY) の後継者たちが編集する雑誌『社会改革 (Réforme Sociale) 』に最初の論文を発表 (「ある人生の日付」 (DATES D'UNE VIE) 参照) 、タイトル: 「英国のカレッジ ハロウ

校」 (LES COLLEGES ANGLAIS. HARROW SCHOOL)

1888年 『英国における教育：カレッジと大学』 (*L'EDUCATION EN ANGLETERRE. COLLEGES ET UNIVERSITES*) (p.327) は3月にアシェット (HACHETTE) より出版。3年に渡って執筆、出版された三部作の第1巻をクーベルタンは次のように結んだ (p.321) : 「フランスの教育にスポーツを取り入れる余地を見つける必要がある。それが私の主な結論だ。奇妙に思われるかも知れないが」 (p.321)

5月29日、「過労への対処法とパリのリセの変革について」 (*LE REMEDE AU SURMENAGE ET LA TRANSFORMATION DES LYCEES DE PARIS*) について講演。

1889年 『フランスにおける英国式教育』 (*L'EDUCATION ANGLAISE EN FRANCE*) (207頁)

1890年 『海の彼方の大学(*UNIVERSITES TRANSATLANTIQUES*)』 (281頁) 。この3冊目の著書は、7月17日にアルマン・ファミエール (Armand FALLIERES) 国民教育大臣 (l'Instruction Publique) 、後の共和国大統領)から託された任務に従って北米(米国とカナダ)で行った調査任務の結果である。その間、彼はボストン体育教育大会 (Congrès d'Education Physique de BOSTON) に参加(11月末)している。

クーベルタンの記事や取り組み、提言は続いた (「起業家」参照) 。

「教育改革、特に中等教育の根本的かつ慎重な改革 (“*une réforme de l'éducation et notamment de l'enseignement secondaire, qui serait à la fois radicale et prudente*”) 」 (「マドリード通り卒業生の会報」 (*Bulletin (……) des anciens élèves de l'Externat de la rue de Madrid*)) (……) (1937年7月7日掲載記事中) を必要とする「一般教育学」 (*pédagogie générale*) の課題にたどり着く (「経歴」) 参照) 。

1901年 『公共教育に関する覚書』 (*NOTES SUR L'EDUCATION PUBLIQUE*)

(320頁)

- 1906年** 『カレッジ モデル』 (*UN COLLEGE MODELE*) ベルギーのレオポルド2世のために書かれたモデルカレッジのプロジェクト研究を紹介したもので、1912年には23ページのパンフレットとして再刊される。
- 1910年** 『新中等教育プログラム』 (*NOUVAUX PROGRAMMES D'ENSEIGNEMENT SECONDAIRE*) (31頁)。非常に明瞭な内容である。構成は、第一に科学。宇宙研究に始まり、法律と防衛の研究で終わる。続いて歴史を含む人文科学、最後に古典と現代語。
- 1912年** 1905年に出版された『身体教育』 (*L'Education physique*) (「スポーツマン」参照) は、『20世紀の青年教育』 (*L'EDUCATION DES ADOLESCENTS AU XXè SIECLE*) の第一部である。続いて『道徳教育』 (*L'EDUCATION MORALE*) (1915) に先立ち、『知的教育：普遍的分析』 (*EDUCATION INTELLECTUELLE : ANALYSE UNIVERSELLE*) (155頁) を出版している。この2巻の序文には、クーベルタンが歩んできた行程と思慮深い考察が記されている。教育制度の根幹を問うことになったクーベルタンにとって、中等教育は「物質世界と人類の進化全体を包含する一般的思考の時代にしなければならない。そうすることで、活動的生活の入り口に立った教養ある人々は、自分が恩恵を受けていると同時に、責任を負う者であるという遺産に気付くことができる」 (p.13)。異なる分野の知識の列挙や蓄積は単なる幻想に過ぎない。根本的な方法の変革が必要だ。失敗に終わった「統合」は、「分析」に取って代えられなくてはならない
- 1915年** ローザンヌにおいてフランスの公教育 (Ministre français de l'Instruction publique) (現在の国民教育省) 大臣に提出された報告書、『体育改善と発展』 (*AMELIORATION ET DEVELOPPEMENT DE L'EDUCATION PHYSIQUE*) (35頁) の出版。
- 1921年** 『スポーツ教育学講義』 (*LECONS DE PEDAGOGIE SPORTIVE*) (124頁) (「スポーツマン」参照)

当初は自国の若者のことのみを考えていたクーベルタンだった（『21年間のキャンペーン』p.2）が、1909年には旅の最初から「記憶にある限り唯一の有効な治療法があると感じていた。それは、集団的冷静さ、知恵、反射能力を生み出せる、修正と変革を経た教育の中にこそあるのだ」と考えた。自らに忠実だった彼個人のヴィジョンはやがて国際的なものとなる。

1925年 国際オリンピック委員会会長退任を決めたクーベルタンは、プラハで開催された技術会議と教育会議という、異例とも言える2つのオリンピック会議を利用した。そして、5月29日の市庁舎での開会演説では、別れの挨拶も兼ねて、いつものセリフに戻り、「……私は残された時間で、喫緊の課題である精神の明晰さと冷静な批判を生み出す教育の実現という事業を推し進めたいのです」と語った。

1926年– クーベルタンは、1925年末に万国教育学連盟(L'Union Pédagogique
1929年 Universelle)の設立を発表し、その後4つの重要な「ノート」(Cahiers)を発行。連盟のために、**1926年**に10枝の炎(LE FLAMBEAU A DIX BRANCHES)と名付けたトーチを発表した。彼は、一般的知識の分野を明確にする目的でこの種の知的デザインを好み、自らの教育理論の発展に応じて、最初は6本、次に7本など、「枝」の数に変化を加えた。

"中等教育および高等初等教育において、概念を事実に置き換える必要を宣言する基本憲章の第3条に基づき(……)、世界教育学連盟(*l'Union Pédagogique Universelle*)は、すべての人が有すべき教育の必須基礎として、次の10の概念の習得(その能力や利用可能な時間等に応じて程度の差はあるが)を重んじる：

- 個人の存在自体を決定する4つの概念：

天文学的、地質学的、歴史学的、生物学的

- 個人の道徳的、精神的成長を左右する3つの概念：

数学的、美学的、哲学的

- 社会生活を支配する3つの概念：

経済的、法的、民族的、言語的

(『アンソロジー』 p.173)。総括報告書の刊行により世界教育連盟活動は1930年に終了(「起業家」参照)

実際、「若さ」というものがピエール・ド・クーベルタンの基本的な発想にあり、それがまた彼自身の生活様式に影響を与えていたと考えて間違いはないだろう。オリンピック復興を提案した時にはまだ30歳前だったにもかかわらず、既に多くの功績を収めていた。(「オリンピック」参照)

1918年、四半世紀の時を経た今も、彼のこの言葉はきらめきを放つ。「若者に影響を与えるには、彼らの人生への情熱を理解しなければならない」(「今スポーツに望むこと (CE QUE NOUS POUVONS MAINTENANT DEMANDER AU SPORT)」2月22日に開催されたローザンヌ・自由ギリシャ協会 (l'Association des Hellènes libéraux de LAUSANNE) 会議にて)

1927年、彼の本質的なメッセージの一つは、4月17日にオリンピアから送られてきたものであろう。「全世界のすべての若いスポーツマンへ (A LA JEUNESSE SPORTIVE DE TOUTES LES NATIONS)」(「オリンピック」参照)

1932年、ローザンヌ大学における70歳の誕生祝賀会の最後に、クーベルタンは過去へ逃げ込むことなく友人たちにこう語りかけた。「若者は未来の話を聞くのを好みます。それは実に正しい！語る機会があればそれを逃す手はありません。黄昏から聞こえてくる声が老いや苦しみ声であろうと関係ありません。自信を持って語る声は2度聞く権利を生むでしょう。これこそ、私が語りたいことなのです。(……)。勇気と希望！(……) 鞍にしっかりまたがり(……) 雲の中を恐れず果敢に走りなさい。未来はあなたのものです」。

クーベルタンの思想の中心が最後まで青年と教育であったことを表す言葉である。

歴史家

「私は四半世紀以上にわたって、皆さんにスポーツと歴史を説いてきた。体力と精神力両方の源である筋肉の鍛錬の必要性には耳を傾けてくれたあなた方だが（……）、歴史文化の呼びかけに対してはそうではなかった。私が落胆したとは思わないで欲しい。私は、息を引き取るその瞬間まで同じように呼びかけ続けるだろう」。クーベルタンは、1915年10月4日に日刊紙『エクセルシオール』（EXCELSIOR）に寄稿した記事の中でこう語っている。

実際、彼の視点や社会現象の理解は歴史家のそれであり、オリンピック復興の発想はこのような歴史的背景の中でこそ生まれてくるのではないだろうか。1935年のラジオ「オリンピック（「オリンピック」参照）で、彼は最後に、オリンピズムが象徴する基本要素を集約した。このメッセージは、彼の目に、この歴史的側面がいかに決定的要素であったかを改めて示している：「（……）望むらくは、（……）歴史が詩とならんで優越的な席を占めるようになることです。それが自然なことであるのは、オリンピズムが歴史に属しているからです。オリンピック大会の開催は、すなわち歴史を呼び起こすことなのです。それはまた、もっともよく平和を保障することにもつながりうるのです。人民に相互に愛し合えと求めることは、児戯に等しいやり方にすぎません。しかし、相互に敬意を払うことを求めることは、ないものねだりではありません。敬意を払うには、まず相手を知る必要があります。これから教えられるべき世界史は、百年の単位で正確さと地理的にも公平を期したもので、それのみが本当の平和の本当の基礎になります」（訳註：「」内は、近刊予定の新訳クーベルタン『オリンピック回想録』訳文より）

歴史書が半分以上を占める蔵書（1944年5月19日および20日、ローザンヌでのオークションの目録で証明された）に支えられた思考や業績、作品の重要な部分がブロの歴史家の成果であったことは、クーベルタンの出版物に触れる機会のない人々にとっては驚きであろう。

1888年 9月：ミルヴィルにほど近いノルマンディーの小さな町ボルベックでクーベルタンによる「フランスとヨーロッパ（LA FRANCE ET L'EUROPE）」に関する講演。

- 1895年** ル・アーヴルで5つの分科会から成る会議：「現代史に関する国民会議：東洋、大英帝国；アメリカ世界；アフリカ；極東からの問いかけ（CONFERENCES POPULAIRES SUR L'HISTOIRE CONTEMPORAINE : les questions d'Orient ; l'empire britannique ; le monde américain ; [l'] Afrique ; l'Extrême-Orient.)」
- 1896年** 『新レビュー（La Nouvelle Revue）』の記事をまとめた『第3共和国治下における進歩（L'EVOLUTION FRANCAISE SOUS LA TROISIEME REPUBLIQUE）』（432頁）が出版され、アメリカ（1897年）とロンドン（1898年）で英訳される。
- 1898年** 英文論考「コスモポリタンの生活は国際親善につながるか？（Does cosmopolitan life lead to international friendliness?）」「評伝（The Review of Reviews）4月号に掲載されたこの論文でクーベルタンは、彼にとって現代の一象徴であり使用頻度も高かった2つの概念－コスモポリタニズムとインターナショナリズム－を、他の状況とは明確に区別している。
- 1899年** 11月 クーベルタンは、「ベルギー独立評論」（L'Indépendance belge）に「ヨーロッパの未来（L'AVENIR DE L'EUROPE）」に関する6回の連載を開始し、後にブリュッセルで特別冊子にまとめて出版（1900年, 48頁）。1900年、同紙に主に歴史的な観点から52の記事を執筆。
- 1900年** 1899年に『フォートナイトリー・レビュー』（Fortnightly Review）2号に掲載された7つの記事を再編集した『1814年以降のフランス（FRANCE SINCE 1814）』（281頁）をニューヨークとロンドンで出版。
- 1900年－
1906年** クーベルタン指揮下、現代史の壮大な7巻年刊誌『フランス年代記1906』（LA CHRONIQUE 1906 DE FRANCE）出版。
- 1901年** 彼の『公共教育に関する覚書』（NOTES SUR L'EDUCATION PUBLIQUE）（「教育者」参照）以降、教育の抜本的改革を構想する上

で歴史研究を重視することは不可欠である。

- 1916年** 《国家のプロパガンダ（«*propagande nationale*»）》キャンペーンのためクーベルタンは、特にフランス史を中心とした『フランスをより良く理解するために』（*POUR MIEUX COMPRENDRE LA FRANCE*）と題した歴史小冊子シリーズを作成。1930年に『我らのフランス』（*NOTRE FRANCE*）に掲載される。
- 1917年** 「歴史学普及委員会（Comité pour la Diffusion des Etudes Historiques）」をパリで設立し、エドゥアール・エリオットを含む5名の委員からなる発足委員会を設置。第三共和国史について6つの会議（1870年～1914年）（*SIX CONFERENCES SUR L'HISTOIRE DE LA TROISIEME REPUBLIQUE*）がローザンヌのルミン（Rumine）宮殿、ティソの間で開催される。
- 1918年** クーベルタンは、『ローザンヌのオリンピック研究所に関する覚書（*NOTICE SUR L'INSTITUT OLYMPIQUE DE LAUSANNE*）』の中でこう強調する。「歴史は（……）「民主主義国家にとって卓越した知恵の学校である。なぜなら、歴史だけが、世紀を超えて連帯や時間の価値を、また政府と被支配者に「問題の理解」を与え、ある者を警戒させ、ある者を忍耐させるからだ。歴史的知識を広く普及させることは、新しい時代の最も差し迫ったニーズの1つとなるだろう。敢えて言えば、我々の文明の未来全体がそれにかかっているのだ」
- 1919年** ローザンヌのメゾン・デュ・プープル（Maison du Peuple）、続いてルクセンブルグ、そして1920年のミュルーズで一連の講義を行う。それは『世界史』（後述参照）を裏切るものであった。『世界史』が現代の体育の場において占めるべき場所は、古代において哲学が占めていた場所に等しい。史的無知は戦争の主な原因である（……）しかし、歴史へのアクセスは誰でも可能だ。無駄に詳しい年号やテーマ、戦記や様々なエピソードなどといった枝葉を取り除き、本筋と本質的事実だけに絞り込めば、それは明確な姿を現し容易に記憶に留まる」（先に引用した

『ローザンヌのオリンピック研究所に関する覚書』)。

- 1923年** 『ヨーロッパはどこへ向かうのか?』 (*OU VA L'EUROPE ?*) (31頁) の小冊子は、1918年から1919年にかけて「ラ・トリビューン・ド・ジュネーヴ (*La Tribune de Genève*)」に掲載された、クーベルタンが第一次世界大戦から学んだ教訓について掲載された記事をまとめたものである。
- 1926年 - 1927年** ピエール・ド・クーベルタンは、「世界史協会 (*Société de l'Histoire Universelle*) (?) の庇護の下、驚異的な知識と見識力を発揮して全4巻と索引から成る『世界史』 (*HISTOIRE UNIVERSELLE*) を出版。フランス政府の支援を受け教員養成学校に提供される。「時間と空間の真の比率を尊重することは、決して地域的、あるいは利己的な理由で犠牲にされてはならない」という、序文で述べた「より優れた原則」を実行に移し (……)、「世界史は『鳥瞰図の調和』を図る学問であるべきだろう」とした上で、アジアの帝国、地中海の事件、ケルト人とドイツ人とスラヴ人、近代民主主義国家の形成と展開、この4つの分野に分けて、多彩な視点で独自のアプローチを行い、それらを要約して取り上げるのである。
- 1927年** 1927年4月14日、ピエール・ド・クーベルタンはアテネのアカデミーで行なった講演で、「歴史的研究の変革と普及について」 (*LA TRANSFORMATION ET DE LA DIFFUSION DES ETUDES HISTOIRIQUES*) こう述べている。「第一に、人類はより良い将来に向かって小さな一歩を踏み出しているということ、第二に、人類が達成したものは極めて脆弱で壊れやすいこと、第三に、それを強固にしうる唯一の方法は、一世代から次の世代への努力の継続と調整だけである」
- 1934年** 6月23日にローザンヌ大学で開催された「オリンピズム40年」の祝賀会での感謝のスピーチは、クーベルタンらしく歴史の言葉を取り入れたものだった。「先ほど式典の中でも述べましたが、1919年に私はギュスターヴ・アドール大統領 (*M. le président Gustave Ador*) への返答の中

でこう申しました。『時代はまだ困難だが、昼過ぎには空が明るくなり、収穫人の腕には再び黄金色のトウモロコシが積まれるだろう』。歴史の日々は長い。忍耐強く、自信を持ち続けていこうではありませんか』

スポーツマン

クーベルタンの幼少時代、貴族の子息にとってスポーツは特に魅力のあるものではなかった。彼が「スポーツ」に出会ったのは、教育者としての天職へと導かれたその時である。人の憶測とは逆に、彼は机上のスポーツマンでなく、実践を通してスポーツが個人の成長のために何をもたらし得るかを心で感じ取り、理解した。この個人的経験を通して、競争力のある「感動的な」スポーツを支持するようになったのだ。

フランスの若者に欠けていたのは、「組織化されたスポーツという、意志を育てるための庭」だった。高校にスポーツを持ち込むには、学校のドアを壊すか、もっと言えば、子供たちがドアを内側から壊すことだった。（1929年パリ16区 祝賀ホール（Salle des Fêtes）でのオリンピック会議）。トマス・アーノルド（Thomas ARNOLD）が理解していたように、スポーツ教育学は、道徳的にも肉体的にも健全な青少年を形成するために、あらゆる国の教育者が用いることのできる最良かつ最も積極的な手段である」（『21年間のキャンペーン』p.206）。

1888年5月、クーベルタンはまだ黎明期にあったフランスの陸上競技の先駆者たちに加わった。特に、1884年7月からレーシングクラブの事務総長を務めていたジョルジュ・ド・サンクレール（Georges de SAINT-CLAIR）と、設立当初（1883年12月13日）からスタディスト（Stadiste）のメンバーであったジュール・マルカデ（Jules MARCADET）は、1887年1月18日にフランス国内初の調整機関であるUSFSAとなるフランス陸上競技クラブ連合（Union des Sociétés Françaises de Courses à Pied）を設立。1888年7月4日、彼はヴィル・デアヴレイ（VILLE D'AVRAY）で初の学校対抗スポーツ大会を開催した。参加したのはモンジュ校（後のリセ・カルノ）とアルザス校だけだったが、クーベルタンはこの大会開催で初となる成功を納めた。

彼は、ミルヴィル城の湖でスカルと呼ばれるレース用の細長い小型ボートや「タムタム」という一人乗りボートのオールを漕いで、スポーツの実践を行っていた。また、テニス、古式ゆかしき自転車ヴェロシペディ（彼の自転車が「片足宙に（"Nini patte-en-l'air"）」と呼ばれたのは、一方のペダルが上にあれば、反対側が下になったからである）乗馬、フェンシングなど。「1882年には、当時ブルゴーニュ通り67番地にあったJ.-B.シャルル（J-B.CHARLES）のサロンで、友人たちと小さなフェンシング・サークルを設立した」（『21年間のキャンペーン』（p.16））と語っているが、おそらくボクシング（仏式ボクシング、後に英式ボクシング）、ついで三輪オートバイにも挑戦している。

1891年1月には、当時の習慣である紙追いのラリーで「ウサギ」の役になり、アンリ・ディドン神父と一緒に荒地を10km以上も走れることを証明した。その後、コレージュ・ダルクイユに体育協会（l'Association Athlétique du Collège d'ARCUEIL）が設立された。1892年3月20日、バガテルのグランドで行われた第1回フランス・ラグビー選手権の最初の決勝戦のレフェリーは、他でもない……ピエール・ド・クーベルタンであった。彼は、レーシングクラブ・ド・フランスXVがスタード・フランセーズに4対3で勝利した際、自分がデザインしマルカデが米国FSAのために作成したモットー「Ludus pro patria（国のためのゲーム）の意」の文字が施されたトロフィー（後に「ブレヌスの盾」というありがたくないあだ名がつくことになる）が授与された。

「体育から教育学的に提供できるものをすべて引き出す」（『21年間のキャンペーン』（p.205））ことを決意した彼は、「合理的な体育の探求、新たな哲学の礎石」（*recherche de la culture physique rationnelle, nouvelle pierre philosophale*）のために、方法論の論争に巻き込まれることを断固として避けた（「スポーツ教育学1934年版」（PEDAGOGIE SPORTIVE, édition de 1934, p.55）。「数多くの競合するシステムがあり、それぞれ熱狂的な支持者がいる。あるシステムは他よりも優れているかも知れないが、私が思うに、完全に良いものもなければ完全に悪いものもない。要は使い方次第なのである。（『21年間のキャンペーン』（p.185））

「体育を損なう内部抗争（『公共教育に関する覚書』（NOTES SUR L'EDUCATION PUBLIQUE）（p.216））に辟易した彼は、「一般的体操の適用対象の幼年」や「軍事訓練」対象年齢の少年を対象外とし、『実用体育』（LA GYMNASTIQUE UTILITAIRE）（1905）154頁）は、一般的体操で既に柔軟性を身につけた普通の14歳の少年たちだけを対象にしている。（『21年間のキャンペーン』 p.185）。一方で、「真のスポーツ本能を発揮する者」には、「可能な限りの自由」が与えられるべきである」とした（『公共教育に関する覚書』（p.126）。哲学的な功利主義の理論を体操に適用するのはなぜか。理由は、「生存競争」ということを考えると、産業化時代にあっては「難局をたくみに切り抜ける者（デブレイヤール）」に成功の機会が訪れるからである。

1905年 1903年に設立された実用体操協会（Society of Utilitarian Gymnastics）が、国民体育協会（Société des Sports Populaires）となった。1907年6月30日にソルボンヌ大学で盛大な「デブレイヤール認定証 "Diplôme des Débrouillards"」の授与式典が行われるが、試験は幅広く、ロリアン、トゥルコアン、オルレアン、パリでも行われ、1908年には1,174名に認定状が授与された。授与式のプログラムは特別に印刷された当協会のポストカードだが、記載文は驚きである。「すべての教区にサッカーチームを、各町に体育館と浴室シャワー施設を備えた運動場を、各都市にプールを、可能な限り個々の乗馬やボクシングのイベントを、各体操協会には合唱部の設置を。規則、階級、紀章（バッジ）は最小限に。政治、派閥、スポーツ界以外の<<指導者>>は排除」

1906年 ルイ・パスコー（Louis PASCAUD）と作成した『馬術フェンシング条約（TRAITE D'ESCRIME EQUESTRE）』の別冊（8頁）で馬術をオリンピックのプログラムに組み込もうとしたが、果たされなかった。

1908年 クーベルタンは「近代五種競技」（射撃、水泳、障害物馬術、フェンシング、4000メートルクロスカントリーレース）を提案したが、反対意見が多かった。しかし、1912年のオリンピックではこの競技を採用し、個人的にトロフィーを授与した。彼はこの競技を最も興味深い革新的なものの1つと考えた。「純粋にスポーツ的観点から見た場合、近代五種競技が最

も高い到達点を示している」（『オリンピック評論（*REVUE OLYMPIQUE*）』（1912, P.151）。1918年には自分が提案した近代五種競技への愛着を次のように表明している。「機が熟して、ここに完全なる陸上競技の登場である。スポーツにおける折衷主義の発展はまだ初期段階だが、まもなくその時はやってくるだろう。他の多くの分野同様に、この分野でもまだ私たちは不毛な特殊化に足を取られて身動きが取れない[……]」（12月28日付『ローザンヌ公報』「オリンピック書簡 IX（*LETTRE OLYMPIQUE IX*）」）

- 1913年** 7月、『オリンピック評論』に、スローガン（『スポーツ教育学』（*PEDAGOGIE SPORTIVE*）1934年版, p.54）を掲げた人々による「特殊なアスリートに対するキャンペーン」に抗議する記事が掲載された。
「過剰な疲労を伴わない競技や選手権はあり得ない」。が、クーベルタンは次のように反論する。「100人が体育に親しむには20人が専門家である必要がある。20人が専門家となるには5人が目の覚めるような技を示せなければならない。このことから逃れる方法はない。すべてはそこに結びつき、つながっているのだから。」そして、この短い文章をこう結ぶことによって、彼は自らの信条を表明している（……）「スポーツという概念は過去と同様に今日も、体育における唯一で、真に効果的で持続的な力である。もしそれが消えてなくなってしまうえば風船が破裂するように体育はすぐに崩壊してしまう」
- 1915年** 35ページにわたる「体育の改善と発展に関するレポート（*AMELIORATION ET DEVELOPPEMENT DE L'EDUCATION PHYSIQUE*）」を執筆（「教育者」参照）。
- 1916年** 「実用体育講座（*LECONS DE GYMNASTIQUE UTILITAIRE*）」レスキュー-防御-移動運動。学校、コーチ、軍事指導者対象（47頁）
- 1919年** クーベルタンは当初、スポーツはエネルギーで男らしい国民的エリート育成に重要な役割を果たすと考えていたが、別の可能性をも見出してい

た。「『すべての人にあらゆるスポーツを』というスローガンは、間違いなく、まったくの絵空事だと非難されるだろう。が、私は気になどかけない。労を惜しまず精査した結果、それが可能であり正確であることは承知している。勝利を目指し、残された時間と力を費やそうと思う（ローザンヌ公報 1月13日付「オリンピック書簡」より）

彼は、自分のアイデアが『スポーツ教育学講義（LECONS DE PEDAGOGIE SPORTIVE）』（1921, 124頁）という形になっても、最後の業績の1つであるスポーツ教育局（Bureau de Pédagogie Sportive）が1930年9月30日に『スポーツ改革憲章』（CHARTRE DE LA REFORME SPORTIVE）を起草しても、「体育とスポーツ教育、スポーツ教育と競技を明確な区別すること」という方向性を明確に示し続けた。

クーベルタンは、「スポーツの本能が持つ情熱的な性質」を主張する。それが（……）正しい言葉だ。情熱がなくなれば、運動はスポーツでなくなる」（ローザンヌ公報, 4月27日付「オリンピック書簡」より）。1922年版の『スポーツ教育学(PEDAGOGIE SPORTIVE)』（p.64）では、オリンピックのモットーを実際に発展させこのテーマに戻っている（「オリンピックアン」参照）「スポーツが求めるのは、より速く、より高く、より強く、である。それは人類の安定という観点から言えば欠点である。しかし、そこにはまた、気高さと詩そのものが存在するのである！」

『スポーツ教育学講義（LECONS DE PEDAGOGIE SPORTIVE）』の初版は、1921年にローザンヌで出版され、1922年にフランスで『スポーツ教育学（PEDAGOGIE SPORTIVE）』というタイトルで再刊された。前文では、クーベルタンによるスポーツの定義が次のように紹介されている。<<スポーツとは、向上心に駆られてリスクを恐れず集中的に筋肉運動を行う、自発的かつ習慣的な修行である>>。したがって、次の5つの概念がある。自発性、忍耐力、激しさ、完璧さの追求、危険を恐れないこと。この5つの概念は核心であり基本である。これによって3つの結果がもたらされる。1. スポーツは人間にとって自然なものではない。2. スポーツの性質はその欠点も含め、あらゆる筋肉トレーニングと似たようなと

ころが存在する。3. スポーツは自制心、冷静さ、認識力に訴えるもの
で、生理学的問題であると同様に心理学的な問題でもあり、理解力、性
格、信念に影響を与える……。それゆえ、スポーツは道徳的、社会的完成
度を高める動因なのである」

1931年 この「過剰への自由 "*liberté d'excès*"」は、1935年のラジオ講演メッセージ（「オリンピック」参照）でも主張されることになるが、『オリンピック回想録』の最後の行（p.218）の基調となっている。「他のすべてを破壊することなしに、これを打ち壊すことはできないのである。さすれば、皆さんには、中庸という反自然のユートピアの信奉者たちが、ディドン神父が生徒たちに与え、それが後にオリimpiズムの標語となった言葉の実践をわれわれに示し続けているのを見守っていただきたいのである。すなわち、CITIUS ALTIUS FORTIUS（より速く、より高く、より強く）」。スポーツを魅力の極みとし、あらゆる形で体育を推進する力と考えたクーベルタンが選んだのはこの言葉であった。（訳註：「」内は、近刊予定の新訳クーベルタン『オリンピック回想録』訳文より）

1934年 だからこそクーベルタンは選手に責任を持つ担当者の側でなく、本心から選手の側に立った。"アスリート…… 彼に対して語られていないことがあるだろうか……！ アスリートの挫折については、親、教師、政治家、報道機関、連盟の指導者に責任があると考える私は、その数が多いことに驚きを感じている」。 （「オリimpiズムの40年（*QUARANTE ANNEES D'OLYMPISME*）」（1934年6月23日、ローザンヌ大学大講堂での近代競技40周年記念講演）

1936年 「漕艇による治療」（『スイス実践医学雑誌』1928年7月号）という記事の掲載から8年を経た、亡くなるわずか1年前の写真には、レマン湖でスポーツウェアに身を包み、腕を広げて「小さなレーシングボート」を漕ぐクーベルタンの姿が写っている。

オリンピック

『真実のピエール・ド・クーベルタン』では、彼の考えや仕事の意義がオリンピック復興とその発展に限られるという、広く行きわたっている一面的な無理解を拡散しないように注意しなければならない。

特にここでは、クーベルタンの概念を適切な文脈の中で定義し位置づけること、復興者である彼の脳内から近代オリンピックが「手段を選ばずに」誕生したことに触れ、彼の揺るぎない熱意を示すことが必要だった。さらに、国際オリンピック委員会会長職を退いた後もなお、長年にわたってオリンピックに捧げた時間とエネルギーのために、その他の様々な活動が妨げられ、制限されることがなかった。それどころか、驚くべきことに、彼は同時にすべての事業を成功に導いてさえいたのだった。

ピエール・ド・クーベルタンの名はオリンピック復活に直結する。彼にとってオリンピックはスポーツの理想を広めるための**ひとつの手段**であり、彼の教育システムの重要な一部だった。しかし、オリンピック復興はクーベルタンの全面的コミットメントの恩恵を受けながら、やがて窮屈な国の事情をはるかに超える存在となっていた。

「オリンピック」を復活させようと考えたのは彼が初めてではない。19世紀には多くの試みがなされた。彼自身が言及しているオリンピックまでは遡ることができず、総裁政府によってシャン・ド・マルス（Champ-de-Mars）で大会開催を想定したが、実際には重要な痕跡は見あたらない。1832年2月、グルノーブル（GRENOBLE）近郊ロンドー（Rondeau）のドミニコ会の神学校生のために開催されたオリンピック大会は、20世紀初頭まで2年ごとに開催され、1846年にはアンリ・ディドン（Henri DIDON）がその受賞者となった。また、グスタフ・ヨハン・シャルタウ（Gustav Johann SCHARTAU）教授の呼びかけによりスコーネ地方のラムローザ（Scanie à RAMLOSA）（スウェーデン）（1834年～1836年）で、1849年にはブルックス（BROOKES）博士の尽力でウェールズとの国境に位置するマッチ・ウェンロック（MUCH WENLOCK）で大会が開催された。ブルックス博士は、1890年10月にクーベルタンを温かく迎え入れ、ウェンロック・オリンピック・ソサエティ（Wenlock Olympian Society）は1894年の大会に参加者となった（後述参照）。また、英国のバーミンガムやウェリントンでも開催が試みられたが、特筆すべき継続性はなかつ

た。ギリシャでは、1859年、1870年、1875年にエヴァンゲリオス・ザッパス (Evangelios ZAPPAS) が開催資金を提供したが、スポーツ活動が十分普及していなかったため国内レベルに留まり、実際の広がりはなかった。パシャル・グルッセ (Paschal GROUSSET) は、フィリップ・ダリル というペンネームで、新聞『Le Temps (ル・タン)』のコラム、「肉体の復興 (LA RENAISSANCE PHYSIQUE)」に収録された1888年の年代記の最後に、「オリンピック大会：言葉は発せられた。我々自身の大会をすべきだ」と主張したが、彼のそれはもっぱら国家的なものだった。

かつて詩人ピンダロス (PINDARE) が称賛し、2世紀のギリシャ歴史家パウサニアス (PAUSANIAS) が詳細に記述した「オリンピック」。この言葉は、現代に生きるスポーツにおいて、唯一、人々の記憶の上に共通に刻み込まれた言葉である。冷静に考えれば、にこやかな根気強さと真の国際組織を構想する能力により、長期的存続が見通せ、原則に基づいた実行可能な組織を設立することができたのは、議論の余地なくクーベルタンただ1人である。

1892年 11月25日金曜日の夜、旧ソルボンヌ大学の古代円形劇場で、半ば名目上のUSFSA5周年記念式典が開催された。（「スポーツマン」参照）。ジョルジュ・ブールドン (Georges BOURDON)、ジュスラン (JUSSERAND)（後の中米フランス大使）、クーベルタンによる、スポーツ史に関する3つの講義が行われた。クーベルタンはこう締めくくった。「以上のことは、あなたの僕（しもべ）がプログラムの第2部を考えるよう促すのに十分でしょう。これまで皆さんがその人物を助けてくれたように、今度も皆さんが彼に手を差し伸べてくださいますように。オリンピック復興という偉大で有益な事業を、現代生活に相応しい条件に沿って追求し、実行していきたいと願っています」。なぜ彼はこのような困難な道を歩み、このような提案をしたのだろう。彼が投げかけた提案は、無関心とまではいかないまでも理解を得られることはなかった。彼は『21年間のキャンペーン』（p.89）でこう説明している。「フランスでは外部からの対抗意識が唯一効果的で持続的に働く(… …)。言うまでもなく、交渉には定期性と威信が伴わなければならない。

そうした条件で交渉すればオリンピック復興も夢ではないのではないだろうか。この言葉は私にとって馴染み深いものだった。古代史の中でオリンピアほど私に夢を見させてくれたものはない」

1893年 **8月**、クーベルタンは、アドルフ・ド・パリッソー (Adolphe de PALLISSAUX) がかつて構想していたアマチュアリズムに関する会議の準備プログラムを米国FSA委員会に提示した。このプログラムの最終事項には次の見出しがつけられた。「VIII. オリンピック復興の可能性について。条件は何か (……) ?」。

1894年 **1月15日**、クーベルタンはパリの「国際陸上競技会議 (Congrès international athlétique)」を支持する案内状をフランス国内外に送付。この文章の最後から2番目のパラグラフは非常に重要であった。

「オリンピックを現代のニーズに合った基盤と条件で復興するのであれば、4年ごとに世界各国の代表者が一堂に会するようにします。このような平和で騎士道的な競技会は、国際主義の最良の形であると信じます」。当初、この案内状に熱心な反応を示す者は皆無であった。が、クーベルタンは努力を惜しまず、美しい筆記体の文字の手紙を何度も書き送った。その結果、多くのヨーロッパ王室貴族たちから「名誉会員」として支援を得ることになる。突然の成功であった。

6月16日土曜日の午後4時、改装されたソルボンヌ大学の大円形劇場で「オリンピック復興パリ国際会議 (Congrès international de PARIS pour le rétablissement des Jeux olympiques)」の開会式が執り行われた。「オリンピック」という名称はその少し前に決定していた。クーベルタンが細部まで考慮し尽くした、イギリス、オーストラリア、ベルギー、スペイン、アメリカ、フランス、ギリシャ、アイルランド、イタリア、オランダ、ロシア、スウェーデンの12カ国と49の加盟団体から79名の代表者が参加したこの国際会議は、見事成功裏に終了したのだった。ドイツから唯一の代表が個人参加してくれたおかげで、フランスの体操選手からの民主主義的抗議も避けることもできた。作業部会は、アマチュアリズムに関する委員会と、オリンピックに関連する委員会の2

つに分かれて行われた。「le petit baron - 小さな男爵」が考案し、自らの資金で賄った社会的・スポーツ的プログラムが会議をさらに充実させた。23日、ソルボンヌ大学で行われた最終セッションで、オリンピック復興が無事に宣言され、加えて、審議の結果、クーベルタンは次の議案を可決させたのだった。

-4年ごとの開催

-対象競技の現代性

-小学生の除外（子供向けの大会を望む声もあった）

-14名の国際委員会の任命を原則とする

-「循環型大会」の原則

クーベルタンは、最初の近代オリンピック大会を1900年、万国博覧会に合わせパリで行うことを希望し、開催地未決定のまま1896年の初大会に賛成していた議員たちもその意を汲んだ。が、おそらくギリシャのビケラス（BIKELAS）に説得されたのであろう。**19日**の会議中にクーベルタンが、アテネ開催を提言。満場一致で受け入れられた。**1894年6月23日**の夜、アクリマティサシオン庭園（Jardin d'Acclimatisation）の大ギャラリーで行われた晚餐会終盤に行ったスピーチで、クーベルタンがはこう語った。「何世紀にもわたり休眠していたギリシャのオリンピック復興のニュースが、電文で世界中に発信されました」。そして、「成人した私の最初の10年間の希望を叶えてくれたこの大会参加者の皆さんに感謝します」と謝辞を述べている。

11月。クーベルタンがギリシャに向けて出発した頃、勝利は程遠かった。トリクーピス（TRICOUPIS）首相が経済的理由でこのプロジェクトに反対していることを承知していたからだ。しかし、クーベルタンは野党のリーダーであるデリヤニス（DELYANNIS）を筆頭に一部の政治家たちを説得。12日には完全で確固とした近代的スポーツ競技のプログ

ラムを提案し、アテネのパルナッソス協会での講義を終えてからオリンピックへと向かった。ギリシャ国内の状況が好転したのは、クーベルタンがフランスに帰国した後であった。父王がロシアのアレクサンドル3世の葬儀に参列している間王国の摂政を務めていた王位継承者であるコンスタンティヌス皇太子が、オリンピックに有利な状況を作ってくれたのだった。このことがトリクーピスとその内閣にとって致命的な打撃となり、トリクーピスは**1895年**初頭に失脚した。

1896年 4月6日、後に儀式となる言葉がギリシャ国王ゲオルギウス1世によって宣言された。「近代初のオリンピック国際競技大会の開会を宣言する」。するとすぐに祝砲が鳴り響き、鳩が放たれ競技場を歓喜の渦に巻き込んだ。陸上競技、体操、格闘技、水泳、ヨット、自転車競技など、現代スポーツのあらゆるカテゴリーを対等に組み合わせたこの大会では、12カ国81人の選手と230人のギリシャ人選手が9種目43競技で対戦した。1894年の大会直後にフランス哲学者ミシェル・ブレアル (Michel BREAL) が考案した「マラソン」も行われた。勝利のたびに、勝者の国旗が掲げられるという規約も確立した。しかし、クーベルタンはギリシャ人から非常に嫌われた。彼らは、国際的成功を収めたこの4年に1度の祭典を自分たちの特権と考えたからだ。

悲観しながらも明晰なクーベルタンは嵐が過ぎるのを待った。**4月15日**の閉会式のまさにその夜、彼は国王に手紙をしたため報道機関にも「国際オリンピック委員会」の会長を引き継ぐことを発表した。この会長職は原則的に大会が開催される国で行われるものであり、つまり、それまでの2年間、最初の会長職を任されたのは、パリ大会の際に汎ギリシャ体操協会（彼が幾度となく住んだバビロン通りにある）の代表だったデメトリオス・ビケラス (Demetrios BIKELAS) である。その手紙には次のごとく記されていた。「2年前、パリで会議が開かれた際、陛下は私どもに激励の電報を送ってくださいました。誠に僭越ながら、今日願いが叶い、オリンピックが復興したことを考慮していただけましたら幸いです。陛下はその復興を見守ってください、今後も陛下のご厚意を期待する権利を私どもに与えてくださいました」

- 1897年** 国際オリンピック委員会の一部のメンバー、特にビケラスは、復興したオリンピックの唯一の開催地となることを希望するギリシャの意向に悩んでいた。ピエール・ド・クーベルタンは、自分たちの存在意義を取り戻し、彼らにその活動を示すため「衛生学・教育学会議（“Congrès d'hygiène et de pédagogie”）」を7月末から8月初めにかけてル・アーヴルで開催した。クーベルタンにとってなじみの深い街であり、数年前にフランス体育協会連合会長を務め、時の共和国大統領となっていたフェリックス・フォール（Félix FAURE）の出身地である。この会議の目的は、2人の偉大な支援家によって達成された。クーベルタンが1896年4月に批評誌『コスモポリス』（*Cosmopolis*）に掲載した記事で明確に引用した「より速く、より高く、より強く（Citius, altius, fortius）」というモットーを考案したディドン神父（le Père DIDON）と、1908年のロンドン大会開催で重要な役割を果たした英国人クーシー・ラファン（COURCY-LAFFAN）牧師である。
- 1900年** クーベルタンは、1900年の万国博覧会の中に混乱し矛盾した形で埋めこまれた「身体運動とスポーツ国際競技会（Concours internationaux d'exercices physiques et de sports）」が、第2回オリンピック大会となることを受け入れざるを得なかった。しかし、「第2回オリンピック」という言葉はどこにも記されることはなかった。
- 1901年** 5月22日、パリで開催された国際オリンピック委員会総会がエミール・ルーベ（Emile LOUBET）共和国大統領によりエリゼ宮で開催。委員会は、1904年大会の開催地としてシカゴを採択した。アメリカ人のウィリアム・スローン（William SLOANE）はIOCの会長就任を拒否し、クーベルタンが「望ましい統一性と結束力」を確保するために会長に留任することに同意した。任期は1897年から10年間とした。
- 1904年** 第3回オリンピック大会は、1903年2月にIOCメンバーによって採択されたアメリカのセントルイス万国博覧会（“World's Fair”）と同時開催された。クーベルタンはロンドンで開催中の国際委員会出席のため総会には出席しなかったが、1908年の大会開催地には満場一致でローマが選

ばれた。

1905年 6月9日～14日、ブリュッセルで開かれた国際スポーツ体育競技会 (International Congress of Sport and Physical Education) に21カ国から205名が参加。この時初めて「オリンピックディプロマ (Diplôme Olympique)」(アンドレ・スロム (André SLOM) のデザイン) が、セオドア・ルーズヴェルト (Théodore ROOSEVELT) 大統領、フリチョフ・ナンセン (Fridtjof NANSEN)、アルベール・サントス＝デュモン (Albert SANTOS-DUMONT)、W-H. グレンフェル (W-H. GRENFELL) (ナイアガラの急流を泳いで渡ったことでスポーツ界は名の通った英国人) に授与される。IOC総会では、ドイツとの意見の相違が解決されたことで、1906年のアテネ国際中間競技大会 (les Jeux internationaux intermédiaires d'Athènes) が受理された。

1906年 4月、アテネで開催された総会でIOCは、ローマ市が躊躇したため、1908年大会開催地をロンドンに変更。最初の「オリンピック杯 (Coupe Olympique)」は、ツーリングクラブ・ド・フランスに授与された。23日、『オリンピック復興 (*La renaissance olympique*)』に掲載された論文中のコラム「ベルギーの独立 (*L'indépendance belge*)」で、クーベルタンは「国際オリンピック委員会の独創性はその独立性にある(……)」と明言している。それは、その永続性、採用方法、役割の捉え方に起因するものである。代表者はなく、アンバサダー(大使)で構成される(……)。委員会は、能力、社会的状況、ロビー活動の影響を受けず判断の自由が守られるよう考慮してメンバーを選ぶ。選出されると彼らは各々の国のオリンピック大使 (*les ambassadeurs de l'Olympisme*) となる」。さらに、「近代オリンピックは、何よりもまず創造されなければならなかった。スポーツとは無縁の活動が多過ぎ、あまりにも多くの野望が(……)うごめいている。そのメカニズムは複雑でイベント開催にはコストがかかり過ぎる」

5月：パリでクーベルタン主催の芸術・文学・スポーツ諮問会議 (Conférence consultative des Arts, des Lettres et des Sports)

(「審美家」参照) 開催。

- 1907年** 5月23日、ハーグで開催されたIOC総会では、基本的には次のロンドン大会のプログラム、特にメートル法の採用について検討された。クーベルタンが新たに10年の任期で会長に再選される。
- 1908年** ロンドンオリンピック。英仏貿易博覧会 (l'Exposition commerciale Franco-britannique) の支援を受けながらも、1900年以降では初めて万国博覧会の枠を超えて開催され、22カ国から2,035名の選手が結集した。クーベルタンは**7月24日**の英国政府主催の晩餐会の際、「オリンピック理念の親衛隊(Trustees de l'idée olympique")」と題したスピーチを行い、その中で、5日前にアメリカの司教工セルバート・タルボット (Ethelbert TALBOT) が行った説教の一部を紹介した(「基本」参照)。「IOCの役割は「規則を制定することでない(……)。私たちはオリンピック理念の《親衛隊》である(……)。私たちの見解では、それは、一方で騎士道精神に基づいた強靱な筋肉質の文化であり、皆さんがうる美しくフェアプレーと呼ぶもの、もう一方は、美的観念、美しいものへの崇拜」であることを確認した。
- 1909年** IOC総会がベルリンで開催。1912年大会の開催地にはストックホルムが選出され、ドイツは非公式ではあるがベルリンの立候補を1916年に延期した。
- 1910年** ルクセンブルクにてIOC総会開催。
- 1910年** ブダペストにてIOC総会開催。
- 1912年** スtockホルムでは、28カ国から2,547名の参加者を得、この度のオリンピックは国際的なシーンにおいて万博博覧会から切り離されたことを決定的に証明した。クーベルタンは二つの偽名を用いて金メダルを獲得した(「審美家」参照)。
- 1913年** 5月。ローザンヌで6日と7日に開催したIOC総会に続いて、8日から10日にかけて「スポーツ心理学会議 (Congrès de Psychologie

sportive) 」を開催し、クーベルタンは新しい分野でも先駆者となるのだった。

『オリンピック評論』8月号に「1914年のエンブレム（オリンピックシンボル）とオリンピック旗（L'emblème et le drapeau de 1914）」を発表。この記事の中のオリンピズムに最高の地位を与えた次の数行は、ほとんど引用されることがなかった。「オリンピズムが現代文明の中に復活したのは、地域的な役割、あるいは一時的な役割を果たすためではありません。そこに託された使命は世界的であり、百年単位のものであります。そこには大志があり、すべての空間とすべての時間を必要とします」

- 1914年** IOC総会はパリで開催され、同時に「オリンピック復興20周年記念式典（Fêtes du XX^e Anniversaire du Rétablissement des Jeux Olympiques）」と、IOCおよび各国オリンピック委員会との初会議が開かれた。この議事録が公開されたのは1919年11月。6月17日、ソルボンヌ大学で、共和国大統領レイモン・ポワンカレ（Raymond POINCARÉ）臨席のもと厳かに行われた会議の中で、クーベルタンは、自身がデザインし、ボン・マルシェの百貨店が製作したオリンピック旗を初めて披露。「"白地に青、黄、黒、緑、赤の5つの輪が絡み合っており、オリンピズムで結ばれた世界の5つの地域を象徴し、各国の色を再現している」（『オリンピック回想録』p.144）。
- 1915年** 4月10日、IOC常設本部がローザンヌに正式に移転。午前11時から11時30分、市庁舎の会議室で簡潔な署名交換が行われた。
- 1916年** 1914年の20周年を花道として現会長職から退くことを考えていたクーベルタンであるが、第一次世界大戦が勃発すると、「船長」はもはや船を離れることはできないと考えた。フランス軍に入隊した彼は、スイスのIOCメンバーであるゴドフロワ・ド・ブロネ（Godefroy de BLONAY）に、1月1日からの暫定的な会長職を委任した。

- 1917年** ピエール・ド・クーベルタンのIOC会長としての2期目の10年の任期が終了したため「ド・ブロネ氏の仲介により権限が更新された」という。
- クーベルタンにより、ローザンヌ・オリンピック学院設立。**南米向けのスペイン語版『オリンピズムとはなにか (QUE ES EL OLIMPISMO) 』(30頁)と『1918年版オリンピック年鑑 (OLYMPIC ALMANACH) 』の発行。
- 1918年** 『オリンピック書簡 (OLYMPIC LETTERS) 』シリーズ、10月26日付の「ローザンヌ公報」(『ジャーナリスト (LE JOURNALISTE) 』参照)は次のように伝えている。「オリンピズムは、体育を純粹に生理学的運動と考え、各種類のスポーツを自立した個別の運動であると考えることを拒否する(……)。オリンピック大会は壁を打ち壊し、人々のために空気と光を取り入れる(……)。この理想的なプログラムを実現できるか?」。 **11月22日**、同紙はさらに自らの考えを肯定する。「オリンピズムはシステムではなく、精神(心)の状態であり、あらゆる形態の教育に浸透させることが可能で、特定の人種や特定の時代が独占することはできない。オリンピズムは、努力と調和の両方を礼賛することにより生じる精神の状態である。この2つの要素の融合がいかにかに人間の本质と合致していることか。それは「過剰への愛」と「調和への愛」なのだ」
- 『1919年版オリンピック年鑑 (OLYMPIC ALMANACH) 』発行。
- 1919年** 21回目『オリンピック書簡』の続編。ローザンヌにて大会復興25周年記念式典。
- 『1920年版オリンピック年鑑 (OLYMPIC ALMANACH) 』の発行。
- 1920年** アントワープオリンピック。初のオリンピック宣誓が、ベルギーのフェンシング選手ヴィクトル・ボアン (Victor BOIN) により行われる。
- 1921年** 5月26日から6月7日までローザンヌにて一連のオリンピック会議と協議会 (Olympic Congress and Conferences) 開催。26日と27日に開催

された「冬季スポーツ協議会」では、スカンジナビア諸国の強い反対にもかかわらず、1924年にシャモニーで開催される「国際冬季スポーツ週間 (Semaine internationale des sports d'hiver)」の原則が受諾された。これが冬季オリンピック大会の始まりとなった。29日と30日には、ある種IOCとの和解を意味する野心的な「国際連盟会議 (Congrès des Fédérations Internationales)」が開催された。スウェーデン人、エドストレーム (EDSTROM) が議長を務めたIOC総会が6月2日から7日まで開催され、2段階で行われた投票を経て、初日の夜、3月17日にクーベルタンが表明した30周年記念に当たる1924年大会をパリで、1928年大会をアムステルダムで開催する提案が承認された。

1922年 パリでIOC総会開催。クーベルタンは、1924年の大会を最後に現役の会長職を退く意向を表明。後継者の任期は10年から8年に短縮、つまり2回のオリンピック期間となり、1925年から開始される。

1923年 ローマでIOC総会開催。クーベルタンは「開会の辞」の中で次のように強調した。「(……) 私たちが考案し組織しようとしているオリンピズムは、意志を育てるための庭に他なりません(……)。私たちの進歩は急速です。もし今日、現代にあって、組織の強さの支えとなる民主主義と汎世界性という2つの担保がなければ、急速に過ぎると言うべきかもしれません」。1932年の第10回オリンピック競技大会にロサンゼルスが採択される。

1924年 2月、クーベルタンはシャモニーで開催された第1回国際冬季スポーツ週間に参加。6月23日：ソルボンヌ大学にて、ガストン・ドゥメルグ (Gaston DOUMERGUE) フランス大統領出席のもと、近代競技大会30周年記念式典が開催。第8回オリンピック夏季大会がパリで開催され、44カ国、3,092名の選手が参加した。クーベルタンが行った短いスピーチは「健全な肉体に健全な精神 (mens sana in corpore sano)」ではなく、「強靱な肉体に宿る生き生きとした精神 (Mens fervida in corpore lacertoso)」というタイトルで後に公式報告書に掲載された「(……) オリンピックは、人類の春を祝う4年ごとの祭典で、しかも

規則正しい周期でめぐりくる春にあって活力が精神に奉仕するのだ」

1925年 5月26日、プラハでIOC総会が始まった。28日には会長選挙が行われ、クーベルタンが辞退を表明したにもかかわらず、彼を支持する票が一定数あったため1回目の投票では過半数に至らなかった。2回目の投票では、ベルギー人のアンリ・ド・バイエ・ラトゥール（Henri de BAILLET-LATOUR）が過半数を獲得。ビケラス、クーベルタンに続く3人目の国際オリンピック委員会会長となる。

5月29日、プラハ市庁舎で技術・教育会議が開催。この2つのオリンピック会議の開会式スピーチが、クーベルタンにとって国際オリンピック委員会会長職とスタッフへの惜別の演説となった。「神殿は永遠ですが祭りは過ぎ去ります。スポーツマンはその選択をしなければならない。ですから彼らに選ばせてあげてください」。ピエール・ド・クーベルタンはIOCの「終身名誉会長」という、彼以外に実現し得ない称号を得た。9月1日、後任者への引き継ぎがローザンヌで行われた。

1927年 ギリシャに招かれる。初めて訪れた時の強い感情が甦るオリンピア。ここを訪れるのは2度目で、これが最後となった。クーベルタンはこう書き残している。「この巡礼の33年前に、わたしは一人塾考する好機として（……）この地を訪れたことを思い出す。1894年11月の一夜、わたしはアテネに到着して、イタリア経由でフランスに帰国するところであったが、それまでに得られた成果と同時に、今後わたしを待ち受けているであろうおそろべき困難にも思いを馳せていた。わたしは小さな丘を登るくねくねと曲がった小道を思い出す。その頂上には博物館とホテルがあった。アルフェウスの岸边から、かぐわしい、澄んだ空気がそよいでくる。月光は、もやのかかった風景を活気づけ、星空はわたしが感動的な接触を求め続けて来た二千年という歳月の上に落ちてくる。その翌日、窓から朝日が昇るのを待ち受け、最初の光が谷を照らすのを見るや、わたしは一人遺跡への道を急ぐのであった。（……）」

それは精神の建築で、わたしはそこからさまざまな教訓を得てきたし、

またそれはすべての次元を偉大なものとする。わたしの瞑想は朝が終わるまでつづいた。(……) 1927年4月16日のこの夜に、往時の思い出が一群となって思い起こされるのであった。(……) 窓に寄り、アルフェオスの草原をよぎる月の光をながめ、翌日の明け方には、いにしえの偉大さのイメージを追い求め、遺跡を散策するのだった。」(『オリンピック回想録』p.205以降)

4月17日には、オリンピック復興を祝う大理石の柱の落成式に出席した。柱にはクーベルタン名前が刻まれたが、これはギリシャ政府からの遅まきながらの彼に対する敬意であった。彼は「すべての国のスポーツに親しむ青年に訴える」。「わたしと仲間たちは、オリンピック大会を博物館の資料や映画のテーマにするために復興したのではないし、金もうけの手段や選挙対策の一環として復興したわけでもありません。(……) 現代社会は、実に多くの可能性に満ちていますが、そこにはまた同時に、墮落頹廢の危険もあります。オリンピズムは、高貴さと道徳的な純粋性の学習の場となるのと同時に、耐久性や肉体の活力を養う場をも構成しうる。しかし、それは、君たちが絶え間なく、自らの名誉の概念とスポーツにおける無私の心を、自らの肉体の躍動と同じレベルにまで高めようとする限りにおいてのことです。未来は、君たち次第なのです」。(訳註：「」内は、近刊予定の新訳クーベルタン『オリンピック回想録』訳文より)

- 1928年** クーベルタン自身は欠席した第9回アムステルダムオリンピック競技大会の選手・参加者に向けたメッセージ。「私はここに(……)皆さんにお別れを告げます(……)。復活したオリンピズムの炎をしっかりと守り、必要な原則と制度を維持し続けてくださることを願います」と、その理念と儀式とを想起させた。
- 1929年** 「オリンピア」クーベルタンによる16区庁舎の祝典会場で重要な講演。
- 1931年 -** 『オリンピック回想録』(218頁)出版。「私は千年の歴史を持つ
- 1932年** 組織の形ではなく(……)基本理念を復元したいと考え、古代に組織を

支えていた強力な柱、つまり、知的支柱、道徳的支柱、そしてある程度は宗教的支柱も再構築する必要を感じていた。また、現代の世界では技術の進歩と民主的国際主義という2つの新しい力が支柱の強化に加わった」(pp.77-78)。

1934年 「オリンピック40周年記念祝賀会」ローザンヌで開催。「(……) ソルボンヌ大学でオリンピック再興が厳粛に宣言されてから40年。その運命は私の職務と意志とに完全に呼応しました。無知や計算で歪められてしまった真実を再構築したいという思いから、プライドを捨て奢ることなくそう申しましょう」。

1935年 クーベルタンは、ラジオ・スイス・ロマンドのスタジオで収録、ベルリンで放送されたメッセージ中、「近代オリピズムの哲学的基礎 (LES ASSISES PHILOSOPHIQUES DE L'OLYMPISME MODERNE)」というタイトルおよびテーマで、彼を導いた主要な要素をまとめている。
「オリンピック大会の創設者であり、IOCの名誉会長であることを以って、私はオリンピックの意義について、初めてラジオで解説を行うようにご招待をいただきましたことを、たいへん名誉なこととしてお受けいたしました。ここで、私の基本的な考え方やオリンピックという仕事を進めるにあたっての「哲学」を示すこと以上に、このご依頼に適切に応じることはできないだろうと思います。(……)」

オリピズムの最も本質的な性格は、古代においても近代においても、それが一種の「宗教」であることです。[……。近代オリピックの儀礼を形成する文化のさまざまな側面はここに源があります。[……]

第二の特徴は、貴族であるべきこと、選良(エリート)であるべきことです。(……)しかし、この「貴族」というのは完全なる平等に起源をもち、各個人の肉体的な優位性や体を鍛錬しようとする意志によってある程度は達し得る筋肉増強の可能性によって規定されるものです。

しかし、選良であるだけでは十分ではありません。この選良は、また同時にある種の「騎士」でなければならない(……)。

休戦の観念、ここにもオリンピズムのひとつの要素があります。それは周期（リズム）の観念と密接に結びついています。（……）。

最後の要素として「美」があります。芸術と思想が大会に参加するので。そもそも、「精神」を招かずして人間の春の祭典を開催することが可能でしょうか。（……）」

1936年 オリンピアで灯された炎をリレーで初めて今大会の会場に運ぶことになった「ベルリンの聖火ランナーたちへのメッセージ」：「あなたの熱い手で、シンボルである聖火をオリンピアからベルリンに運ぶアスリートの皆さん（……）、私に代わり、どうかそこに集う若者たちに伝えて欲しい。私の労働の遺産を受け入れ、人類の進歩と尊厳のために筋肉と思考の結合を完成させるべく取り組むも、様々な風習や杓子定規の環境によって妨げられ、遂に成し得なかった仕事を完成して欲しいと」。

彼は自らが創り上げたものに最後まで情熱を傾けたが、その成功が彼の残りの人生に影を落としていることもまた自覚していた。それを明確に表現するのが1936年に自らの筆による、あるいはタイプで打たれた文章（ナヴァセル家の所有物）である。彼はこれらを『未完のシンフォニー』（*LA SYMPHONIE INACHEVEE*）と題し、回想録の第5部に据えようと考えていた。私はその構想を「1935年11月1日にチューリッヒ工科大学（*Polytechnicum de ZURICH*）での講義で説明したことを覚えています（……）。オリンピズムは私の仕事の一部、半分ほどです。ですから、私の教育的《シンフォニー》は、完成部と未完成部で構成されているのです」。

今後どのようになっていくかはともかく、これまでの近代オリンピック史は、私たちの先覚者が1931年に記した次の言葉に呼応している。

「オリンピズム（……）は広大な地平線を前に強固な基盤の上に立つ。だからこそ、どこかで聖火が消されたとしても別の場所で再び灯される。時代の風に乗って世界中を駆け巡り続けるだろう」

ジャーナリスト

「パリ・ジャーナリスト協会 (Association des Journalistes Parisiens) : 1895年のものとされるピエール・ド・クーベルタンの名刺に記された肩書きは確かに嘘ではなかった。1886年11月に発表された最初の記事から、1937年7月、生前最後の記事に至るまで、フランス内外約70の新聞や雑誌に掲載された記事の数はおよそ1,300！そのうちのいくつかは著書に再録されて目にすることもできるが、記事の大部分は事実上、手つかずのままである。

レポート、詳細記事、ちょっとしたコラム、時にはユーモアを交えたものもある。ある日には、「10年ほど前、私がまだオリンピズムに関わっていた頃、名誉ある永遠の父としてではなく、現役の水先案内人として（……）」と記述している。こうしたエスプリと筆とによる絶え間ない活動のために、確かにほとんどの時間を費やしていたのだろう。約57の寄稿文がそれを物語っている。以下に年代順に一覧を掲載しよう。

: Le Correspondant (1887), La Revue Prytanéenne (1889), La Grande Revue (1891), Revue Universitaire (1892), Journal des Débats politiques et littéraires (1893), La Revue de Paris, Le Messager d'Athènes (1894), La Nouvelle Revue, The Review of Reviews, Cosmopolis, The Times (New-York), Le Temps, The Country illustrated monthly magazine (1896), Tous les Sports, The Fortnightly Review (1897), Deutsche Revue, La Revue Bleue, Monthly Building (1898), La Revue des Deux Mondes (1899), The North American Review (1900), Touring-Club de France (1901), Le Gaulois (1904), Die Zeit (Wien) (1905), La Presse (1908), Gli Sports Roma (1909), Revue mensuelle d'Education Nationale, Le Gymnaste (1912), La Revue Hebdomadaire, La Petite Gironde (1914), Revue suisse, American Physical Education Review (1915), La Revue (1917), Tribune de Genève (1918), Feuille d'avis de Lausanne, Revue des Sports (Bruxelles), La Revue sportive illustrée (1920), Journal de Genève (1921), La Revue de la Semaine, La Revue Mondiale, Le Gymnaste suisse (1922), Le Droit du Peuple, la Suisse (1923), La Revue de Genève (1924), Le Feu (1926), La Revue Sportive Illustrée, Praxis, Le Sport suisse, Prager Presse, De Telegraaf, Pro Sport (1928), Neue Züricher Zeitung

(1931), Neue Freie Press (Wien) (1935), BZ am Mittag (Sportteil), Europäische Revue, Schweizer Hochschulzeitung (1936), Bulletin de l'Association des Anciens Elèves de l'Externat de la rue de Madrid (1937).

『フランセ (Français)』を除き、以下で言及される12の定期刊行物にピエール・ド・クーベルタンという常連の寄稿者、または編集長がいたことは注目に値する。これは、彼のジャーナリストとしての活動の継続性を如実に語るものである。

- 1886年 11月1日** クーベルタンは、社会批評誌「社会改革 (*La Réforme Sociale*)」誌に掲載された「英国のカレッジ ハロウ校 (*LES COLLEGES ANGLAIS - HARROW SCHOOL*)」に関する記事で、世間の注目を浴びる。この論文は、「英国における教育-カレッジと大学 (*L'EDUCATION EN ANGLETERRE-COLLEGES ET UNIVERSITES*)」に収録された他、**1889年**まで彼が寄稿した同コラムに掲載されている。
- 1887年** 8月30日。《ル・フランセ》中の「過労 (精神的弊害) (*LE SURMENAGE*)」で「教育における身体運動普及委員会 (*Comité pour la propagation des exercices physiques dans l'éducation*)」と呼ばれる組織の設立を提案。
- 1890年** 1月25日。「アスレティック雑誌 (*LA REVUE ATHLETIQUE*)」創刊号はクーベルタンが編集長兼執筆者を務めた。論説「口上 (*Le Boniment*)」では数行を割いて自分を軽く揶揄している。「私は? ... 私も証拠写真を提供しないといけないのか? 友人の中には、私が《天井に蜘蛛を飼った》おかげで気が触れてしまったのだろうかと言う者もいる。(訳註:「蜘蛛を飼う」<<*avoir une araignée au plafond*>>とは19世紀中頃のフランス語表現で「心が乱れる」「独特」などの意) 確かにそうかも知れないが、私はその蜘蛛と一緒に読者の皆さんに喜んでいただけるよう、この「アスレティック雑誌」成功のために精一杯努力することを約束したい」。1891年11月(2年目、第11号)まで、AからZまでの月刊誌64ページを実質的に執筆した後「レ・スポーツ・アスレティックス

(LES SPORTS ATHLETIQUES) 」に参加し、1894年10月27日まで寄稿を続けた。

- 1894年-
1914年** オリンピック復興という大事業の開始にあたってクーベルタンは
宣伝媒体の必要を痛感。それが、数ページの大判のパンフレット「国際
オリンピック委員会ブレティン (BULLETIN DU COMITE
INTERNATIONAL DES JEUX OLYMPIQUES) 」で、1894年7月に3
号刊行された。その第1号にはパリ、サントノレ街229番地 (rue
SAINT-HONORE229) の住所と「より速く、より強く、より高く
Citius – Fortius – Altius」の順でラテン語の標語が記されている。
また、「1896年4月6日から18日付け」第15号に「アテネからの使者
(Messenger d’Athènes) 」の補足記事が再掲載された。**1901年**1月、
『オリンピック評論』が誕生し、1905年まで不定期に発行されていた
が、**1906年**1月には月刊誌となり、クーベルタンは開戦まで、正確には
1914年7月の第103号まで、途切れることなく編集と執筆に携わった。
- 1899年-
1903年** 「ベルギー独立評論 (L’INDEPENDANCE BELGE)」 (**1899年**11月)
に掲載された「ヨーロッパの未来 (L’avenir de l’Europe) 」 (「歴史
家」参照) に関する第一回シリーズ後、**1900年**1月14日から10月29日
まで47回にわたって「独立者の手紙 (Lettres d’un indépendant) 」が
掲載された。これは、**1903年**2月2日から10月20日までのフランス、ヨ
ーロッパ、世界の政治分析 (第44回から第58回まで) に呼応する。
- 1902年-
1906年** **1902年**7月14日、「ジレンマ」 (Le Dilemma) で日刊紙「フィガロ」
(LE FIGARO) との提携掲載が始まり、**1906年**8月13日までほぼ隔週
でコラムが掲載された。
- 1902年-
1912年** **1902年**3月、『コー地方雑誌 (Revue DU PAYS DE CAUX) 』創刊。
クーベルタンは無償で、創作者、編集者、販売者、スポンサーを同時に
務める。**1903年**11月に休刊。しかし、**1906年**1月から同じ方針の『雑
誌 フランス人のために (REVUE POUR Les FRANCAIS) 』が誕生し、
1912年12月20日まで続いた。

- 1906年-1908年** **1906年**12月31日から**1908年**10月15日まで、「身体教育 (L'EDUCATION PHYSIQUE)」誌上で「身体教育の領分 (La Campagne d'Education physique)」を連載。これらの記事は、1909年に「体育出版社 (Librairie de l'Education physique)」から出版された『21年間のキャンペーン』の22章あるうちの最初の19章である。「おそらく私は、私を激しく攻撃した人々にこの本を捧げるべきであろう。それが本書執筆の動機だ。私はそれを楽しみつつ、そこから利益も得ている。(……) 執筆時点の誇張や誤解から、真実を復元できるように、日付や引用や、ともすると見過ごしがちな事実について確認することを私は自らに強いている」。
- 1914年-1916年** 戦争最中の**1914年**10月26日、日刊紙『エクセシオール (L'EXCELSIOR)』に初となる「万人に訴える (Appel à tous)」と題した記事を寄稿した。**1915年**7月19日の記事「我らのフランス (Notre France)」以降、7月12日に発表された「エクセシオール」の「体操の授業」(Leçons dans le Gymnase)の形を取り、**1916年**1月3日付で終了するまで、25号、いや、26号が発行された。
- 1918年-1919年** **1918年**10月14日、『ローザンヌ公報』にて「オリンピック書簡」掲載開始。1919年5月17日付け21号まで掲載された。これらの「書簡」は、クーベルタンの思想の発展を最も顕著な形で明らかにしていると言える(「スポーツマン」および「オリンピック」参照)。
- 1924年** ローザンヌのフランス連盟で行われた講演「報道機関の責任と改革 (Les Responsabilités et la Réforme de la presse)」のパンフレットを発行。次のように述べている：「(……) 私は報道機関との接点を失ったことはなく、我が国の主要な報道機関の忠実なメンバーである。しかし、私の名前と関連付けて論じることが慣例になっている企画については、報道と関わりなく、あるいは報道に反して立ち上げられたものであった。理由は複雑である。(……) また、私は、オリンピック復興に際しては、費用に比して効果が図りがたい広告に求めるものがほとんどなかったことを覚えている。(p.5)」

1931年- **1931年**12月8日から**1932年**3月27日までの間、日刊スポーツ紙
1932年 「オート」のコラムに、『オリンピック回想録』の「25」の章が「名文」として掲載された。1932年、エクス=アン=プロヴァンスにあるポール・ルーボー印刷所の印刷機を使用し、スポーツ教育国際局（Bureau International de Pédagogie Sportive）により編集されたこの記事の不可解な点は、刊行年表示が1931年となっているのに、巻末の「伝説」の章が第24章となっていることである。

クーベルタンにとって、ジャーナリズムと報道機関が最後までいかに重要であったかは明らかである。クーベルタンは、「芸術、文学、科学が現代の癌の芽の犠牲となり、報道機関がいわばその繁殖の温床である（……）センセーショナルリズムの芽」に不信感を募らせていた。彼は「使命（……）は最高のものの一つ」と考え、「本来あるべき姿（……）は、つまり家庭教師やほとんど聖職に近いものである」とは望まなかったのだろうか（1924年の講演、pp.5, 15）。

著述家

分析家であり、教育者、また歴史家でもあるクーベルタンは、高尚かつ古典的な文体で理路整然とした主張を、時に印象的で適切に、時に消化し難い画像や数式を用いて執筆した。例えば、ラ・ブリユイエール（LA BRUYERE）のような文章を楽しむことも。『偽スポーツマン（*Le faux sportsman*）』に登場する「カリマティアス（Calimathias）」は、スポーツが流行するや否や傍観者に徹することはできないと考え、慌てて様々な衣装を身につけて言葉を語るようになった（……）」。（『オリンピック評論』（1910年5月）。1925年3月、エクス=アン=プロヴァンスのカジノで開かれた講演では「アレキサンドロス大王・当時の記録保持者（*ALEXANDRE LE GRAND RECORDMAN DE L'HEURE*）」とタイトルを付けて楽しんでもいた。また、あまり周知されていないが、彼は純文学のジャンルにも取り組んでいた。普段の仕事の息抜きのためか、または、書きたいという欲望に勝てなかったのか。いずれにしても、おそらくは部門の混淆や誤解のリスクを避けるために、彼はこの試みを行う

にあたって細心の注意を払い、一、二の偽名を用いたのであった。

1899年 2月15日から4月1日にかけて、「新レビュー (*La Nouvelle Revue*) 」はジョルジュ・オロ (*Georges HOHROD*) と署名された作品『ある帰隊者の物語 (*LE ROMAN D'UN RALLIE*) 』を5つのエピソードに分けて出版した。これらの作品はモーパッサンやゾラには及ぶべくもないが、それらに劣らないだけの驚きと面白味はあり、特に、多くの点で自伝的であることが判明したことからも読み応えのある作品である。アメリカに渡ったエティエンヌ・ド・クルッセヌ (*Etienne de CRUSSENE*) はフランスに戻り、モンターニュ・ノワールの麓にあるブルターニュ地方のケラルヴロ城 (*KERARVRO*、ノルマンディーのミルヴィルを転訛したもの) で過ごした後、グルネル通りとヴァレンヌ通りの間にある実家の屋敷に住んでパリ生活を体験し、最後には確実に共和国に傾倒していく。謁見を終えたカルノ大統領は彼に「あなたがフランスをととても愛していることは知っています。それは偽りのない愛だ」と語る。ちょうど現実世界でクーベルタンに語ったように。彼は「赤い荒野 (“*les landes rouges*”) 」に向かって出発する (……)。ケルト人以外の人々は (……) 話すことができるのは人間だけだと信じているが、ケルト人はそれとは全く異なり、自然界のあらゆるものが語ったり歌ったりすることを知っているのだった。この5つの連載をまとめた本編 (1902年にラニエ・ア・オーエール社から出版, 322頁) の最後の行で、ピエール・ド・クーベルタンは、彼が闘争から得た深い意味を表現している (後述: 「名言ベスト3 (*TROIS CITATIONS ENTRE TANT D'AUTRES...*) 」参照)

1912年 クーベルタンは散文作家である。しかし、ストックホルム大会のオリンピック芸術競技 (*Concours olympique de littérature des Jeux*) には詩人として参加した。その詩は『スポーツへの頌歌 (*ODE AU SPORT*) 』と題され、「ジョルジュ・オロ (*Georges HOHROD*) とM. エスバック (*M. ESBACH*) 」という2人の署名入りだった。当時としては非常に斬新なドイツ語とフランス語2ヶ国語が併記されたこれら9つ

の詩に審査員は金メダルを授与した。彼の匿名性は尊重され、ピエール・ド・クーベルタンは大きな喜びをもって、自らが復活させた大会で本物の勝者となった。

「スポーツよ、神々の喜びよ、生命の本質よ、あなたは突然現れた（…）」。山々の頂は夜明けの輝きを抱き、朝のきらめきが暗い森の地面に降り注いだ」（“O Sport, plaisir des dieux, essence de vie, tu es apparu soudain [...]. Et sur la cime des monts, une lueur d’aurore s’est posée, et des rayons de soleil ont tacheté le sol des futaies sombres”.）

審美家

クーベルタンが考案した新しい教育プログラムには美学が存在する。「教育における役割という観点から芸術を定義するならば、私は何よりも美意識であると言いたい。若い魂に美意識を呼び覚ますことは、個々の人生を美しくし、社会生活を完璧にするために働くことである（……）。それだけで、創造と発展のための努力を正当化するのに十分ではないだろうか？」（『公共教育ノート *NOTES ON PUBLIC EDUCATION*』）（1901, p.307）と綴られている。

彼の驚くべき『世界史（*UNIVERSAL HISTORY*）』（1926-1927）総覧の最後のページでは、アルファベット順の索引の後に、作品の6つのテーマが紹介されている。「芸術、文化、文学」の見出しは、それだけで世界の歴史と文明を概観するという大胆な試みの中で、精神性の重要性を示している。よく読んでいくと次の国々の芸術に現れる知的洞察を組み込むクーベルタンの芸術文化の幅広さに気付かされる：英国、アラビア、アッシリア、ビザンチン、中国、エジプト、フランドル、フランス、古代ギリシャ、ヒンドゥー、インド・ギリシャ、イタリア、ヴェネツィア、日本、ペルシャ、フェニキア、ローマなど。

クーベルタンの人格や思想は、単に豊かな家庭環境で培った貴族教育の結果ではない。が、確かに、父親のシャルル・フレディ・ド・クーベルタン自身がある程度名声

を得た「公認」画家であるということは、ピエール少年の芸術傾向に影響を与えたのではないだろうか。彼のペン画の中には、1902年に『コー地方のレビュー (REVIEW DU PAYS DE CAUX)』の創刊号の表紙を飾っているものもある。また、彼が残した旅のノートに描かれたスケッチにもアマチュアとしての優れた才能が散見される。ピアノも嗜んだ若いピエールはウディノ通りの「夜会」を盛り上げるなど、美学と芸術は、彼の概念と行動の中で重要な位置を占めていた。

1897年 『アメリカとギリシャの思い出 (SOUVENIRS D'AMERIQUE ET DE GRECE)』(1897)が初回復興オリンピックの翌年に出版された。その中でクーベルタンは音楽について次のように語っている。「過去2千年の間に流行は頻繁に変化してきたが、音楽が観客の感情を伝える最高の手段であり、壮大なショーの最高の伴奏者であることには変わりはない」。さらに、1894年6月に開催された決定的な会議の開会式で「アポロン讃歌 (l'Hymne à Apollon)」が歌われたのも最も重要な瞬間のひとつではなかったか。この賛歌はデルフォイのフランス学校 (l'Ecole française de DELPHES) が行った発掘調査で発見されたばかりで、テオドール・ライナック (Théodore REINACH) とガブリエル・フォーレ (Gabriel FAURE) によって現代風に編曲されたものであった。「はるかなる時代の隔たりをつらぬいて奏でられた古代の響きは、ある種の微妙な共感をその場にひろげた。」(『オリンピック回想録』p.18)

1906年 5月23日、「芸術・文学・スポーツ協議会 (CONFERENCE CONSULTATIVE DES ARTS, DES LETTRES ET DES SPORTS)」がコメディイ・フランセーズの施設で開催。クーベルタンは、以前からこの会議の開催を意図しており、「オリンピアの華麗な時代には、文学と芸術がスポーツと調和してオリンピックの壮麗さを確実なものにしていた」と説明している(『フィガロ』(1904), 『21年間のキャンペーン』p.192より転載)。彼は、近代オリンピズムに新しい側面を取り入れる時が来たと感じ、その準備に特別な注意を払っていた。その目的は2つあり、1つは、「復活したオリンピックに芸術と文学を見事に融合させること」、もう1つは、「日常的に地域のスポーツイベントに、芸術と

文学を控えめに気取らず取り入れられるようにすること」であった。ソルボンヌ大学の大円形劇場で開催された素晴らしい「スポーツと芸術の祭典」で幕を閉じたこの会議は、クーベルタンの強い要望で大会プログラムに正式に組み込まれた。1912年のストックホルムから1948年のロンドンへと続く陸上競技と同様に、建築、彫刻、絵画、音楽、文学へもメダルが授与され、新しいプロジェクトを生み出す芸術競技の出発点となるはずであった。残念ながら、各組織委員会からの肯定的な「公式報告書」に反し、大会の一部として実際に定着することはなかった。その理由は、素材上の困難もさることながら、偉大な芸術家や作家たちは、原則として、お仕着せのテーマによる競争を避けようとする傾向をもつからである。しかも、どのような基準によって判定されるのか。クーベルタン自身も「競技者への提言 (SUGGESTIONS AUX CONCURRENTS)」(『オリンピック評論』(1911))で、「芸術は何につけてもスポーツのように支配されることはない」と述べている。

1910年 クーベルタン「ひとつの近代オリンピア (UNE OLYMPIE MODERNE)」のプロジェクトの一環として、「国際建築コンクール (International Competition of Architecture)」を開催した。「ひとつの近代オリンピア」は24ページの小冊子タイトルで、クーベルタンは「古代オリンピアは、陸上競技と芸術、祈りの都市であった」と述べている。1911年5月、ヴォー州出身の建築家ウジェーヌ・モノ (Eugène MONOD) とアルフォンス・ラヴェリエール (Alphonse LAVERRIERE) が、ソルボンヌ大学の中庭で開催された晩餐会の席で表彰された。その夜会のプログラムには、体操、レスリング、フェンシング、ダンス、パレストリーナとラモーの作品からの合唱、光のショーが次々と繰り広げられ、観客の心に残る感銘を与えた。1894年の大会の際には既に同じ趣旨で、クロワ・カトラン (フランス・レーシング・クラブ) での500人規模の夜会が開催されており、同様に、1914年6月18日にトロカデロ宮殿での大会復興20周年を祝う「スポーツと芸術の祭典 (Festival de Sport et d'art)」、1914年6月24日には国際オリンピック会議記念の「ランスの選手団主催の大祝典 (Grande Fête organisée

par le Collège d'athlètes de REIMS) 」も開催された。

- 1911年-1912年** 芸術部門と文学部門のコンペティションが組み込まれたストックホルム大会が近づくと、クーベルタンはプログラム作りに力を入れ、『オリンピック評論』に連載記事を掲載。1912年にはそれをまとめ、国民スポーツ協会 (Société des Sports Populaires) の支援で出版された：叙勲 (装飾)、花火打ち上げ (製造) 術、調和 (一致)、行列。この『体操とスポーツの社会に適用されるラスキン主義的スポーツ試論 (Essai de Ruskinianisme sportif à l'usage des Sociétés de Gymnastique et de Sports)』は、イギリスの美術評論家であり社会哲学者でもあるジョン・ラスキン (John RUSKIN) の影響を克明に示す。後に、ロジェ・ペイル (Roger PEYRE) の『世界美術史年表 (Répertoire chronologique de l'Histoire Universelle des Beaux-Arts)』とエリー・フォール (Elie FAURE) が1921年から1927年にかけて出版した全5巻の記念碑的『芸術の歴史 (Histoire de l'Art)』の2冊が彼の個人蔵書に加わった。
- 1913年** 「スポーツ心理学会議」初日の5月8日、クーベルタンが企画したローザンヌのアベイ・ド・ラルク (Abbaye de l'Arc) のテラスで開かれた夜会は、とりわけ大成功を収めた。
- 1916年** 『フランスをよりよく理解するために (POUR MIEUX COMPRENDRE LA FRANCE)』シリーズでは、「フランス美術の偉大な時代」をテーマにした2冊のパンフレットが目を引き。I. その起源から16世紀末まで II. 17世紀から現代まで。
- 1919年** スポーツが芸術に「動きの詩 (la poésie du mouvement)」を授け得ると考えていたクーベルタンは、(1914年6月20日付『週刊レビュー (LA REVUE HEBDOMADAIRE)』) の『スポーツ教育学 (PEDAGOGIE SPORTIVE)』の最終章を「芸術とスポーツ」に充て、こう明言している。「スポーツは、芸術の生みの親として、またその機会として捉えられるべきである。スポーツは生きた彫刻であるアスリー

トを生み出すことによって美を生じさせるのだから。スポーツに捧げられた建築物やスポーツが創り出す祭典は、美しさを追求する機会である。」

しかし、彼がスポーツの「ラスキン主義」を勧める際に念頭に置いていた最後の側面を考慮に入れることはあまりなかった。

1935年 クーベルタンの世界教育連盟 (Union Pédagogique Universelle) は「10枝の聖火 ("Flambeau à dix branches")」のイメージに忠実でありながらも「人間が (……) 名も無い本能 (……) に突き動かされる美の概念」を忘れないよう注意していた。同様に、「近代オリンピックの哲学的基礎」(「オリンピアン」参照) をテーマにしたラジオ放送でも「芸術と思想の大会に参加することによる美」の重要性を何度も主張していた。

彼が何よりも重視したのは「調和」の概念であり、異なる種類の楽しみ方を同時に連想させる調和のとれたバランスであった。彼を古代ギリシャと固く結びつけているのはこの「調和」である。"景観と建築、建築と人間の間には、多少なりとも完璧な、議論の余地のない調和が存在した。そこに真の秘訣があったのだが (……)、今日、この3要素を支配するのは完璧な支離滅裂だ」(『ギリシャ都市への回帰 (*Le retour à la cité grecque*)』、『オリンピック評論』1907年2月号および『スポーツ心理学の試み (*ESSAIS DE PSYCHOLOGIE SPORTIVE*)』

(1913) に再録)。1915年に新聞「エクセルシオール

("EXCELSIOR") のコラムに掲載された穏やかで予言的な次の言葉は、この調和のコンセプトに触発されて書かれたものである。「確かに、かつてヘラデスの澄んだ空の下で機能していた調和の壮大な工場は、新たな形で再構成されるかも知れない。間違いなくいつかはそうなるだろう。もしこの目で見ることができないとしても、少なくとも私は、その実現のために30年間働いてきたというだけで満足である」。

その思想と作品の構築において、どうしてそれらを疑い、無視することができるだろうか。(『カペー家 (*Les Capétiens*, in *Troisième*

partie)』第3部 p.92 では大聖堂を次のように記述している。「このオジーヴ様式の大聖堂は、高さと軽量さを両立させる手段が見つかった途端、インスピレーションそのままに地面から飛び出した。さらにステンドグラスの幻想的な多色刷りの光に照らされて、ますます非物質的で開放的になったのだ。(……) 過去にも現在にも、計画の統一性と複雑性、線の独立性と協調性、光と影の戯れの対立と融合が、これほどまでに安らぎと高揚を同時に生み出すような技法で組み合わせられた建物は無い」

ユマニスト

ピエール・ド・クーベルタンは、科学の動きや発見に最大の注意を払っていたが、彼の教養や文体の基礎は、何よりも「文学者」のものである。彼の志、嗜好、作品には心の広さを感じる。実際、その知識の広さと著作物の多様さから、18世紀の百科全書派の最後の偉大な後継者の一人となるはずであった。だからこそ、例えば、1919年10月8日に行われた第4回オリンピック研究所開所の挨拶は次のような内容であった。「天文学の階梯、世界の機械的統一と化学的統一、星の生命 ("LES ETAPES DE L'ASTRONOMIE, L 'Unité mécanique et l'Unité chimique du monde, La Vie des astres")」。彼の才能は、良い意味で大衆化する術を知っていること、つまり、知識を広く一般に伝える能力を持った人物であった。

感性、知性、表現方法：クーベルタンはユマニストである。

人や国がお互いに理解し合うことが平和な関係の唯一の保証であり、オリンピズムはこの視点に直結していると考えるユマニスト。

多くの人に参加できるスポーツを構想し、すべての人に知識の扉を開くために闘う使命感を持つユマニスト。「最初に光を生み出すことこそ現代の民主主義国家の急務である。大人の社会的憎悪のほとんどは、若い頃の組織的な知的不一致によって生まれ育まれるからである」(『世界分析(ユニバーサル・アナリシス)(L'ANALYSE UNIVERSELLE)』(1912)序文 p.36)

- 1892年** オリンピズムの誕生は平和主義の世界観に基づく。「そのプログラムの第2部」（『オリンピアン』参照）実行の支援を求める際、11月25日の会議の冒頭でクーベルタンはこう語った。「漕ぎ手、走り手、剣士を国外に広めよう。これこそ未来の自由交流であり、旧ヨーロッパの風俗習慣に取り入れられた日にこそ、平和の目的は新たに強力な支援を授かるだろう」（『21年間のキャンペーン』p.90）。
- 1894年** 11月16日、パルナス協会で行われた講演で、アテネの人々を懐柔するためクーベルタンは次のように明言している。「（……）4年に1度、幸福で友愛に満ちた出会いの場を世界中の若者たちに提供することが復活オリンピックの使命です。その中で少しずつ、それぞれの民族がお互いに関して無知であるまま生きるということがなくなっていくでしょう。無知は憎しみを助長し、誤解を蓄積して、事態を無慈悲な闘争という野蛮な争いへと駆り立てるものです」。（『三巻本選集（*TEXTES CHOISIS*）』より（1986）T. II, p.370）
- 1896年** 困難な状況下、オリンピックの復興プロジェクトが無事念願を果たし、アテネでの競技が成功すると、クーベルタンは公式報告書を作成。自らの歩みを誇らし気にこう振り返った。「一つのアイデアが、なぜ、どのように生み出されるのか — 機が熟すのを待つ数多くのアイデアの流れの中から浮び出で — （……）実行に移される。それを理解することはかなり困難です。しかし、オリンピックは違います。オリンピックを復興させるというアイデアは空想などではなく、偉大なムーブメントの当然な結果だったのです。（……）私は、このアイデアの父であることを主張したい。そして、実現へ向けて惜しみなく支援を捧げてくださった方々、この大会により陸上競技がより高貴なものへと成長し、国際的に活躍する若者たちがこの経験から平和への愛と生命への敬意を引き出すであろうと、私と共に信じてくれた皆さんに改めて感謝を申し上げます」。（「オリンピック大会776」（1896）av. J. C., p.58）

第一次世界大戦が勃発すると、クーベルタンは入隊を志願した。しかし、「愛国者」

としての義務を果たしたものの、— 彼はかつて「国民宣伝協会 (Société de Propagande Nationale)」や「月刊 国民教育 (REVUE MENSUELLE D'EDUCATION NATIONALE)」に《祖国に貢献するため志願を願う若いフランス人は、R.F.の頭文字をどのように解釈すべきか？ Réfléchi (思慮深く), Robuste (頑健な), Rapide (迅速で), Franc (素直で), Fidèle (誠実で) et Fier (誇り高く) である》と記していた — 偏狭な主戦論に陥ったわけではない。1915年に「デカログ (LE DECALOGUE)」で、彼が「フランスの若者に」提案したのは次のことである。「他の人種や他の文明に対する憎しみや暴力」は含まれてはいない。憎しみや暴力は心の軟弱な者の特権である。ここで提案されていることは全て忠実で正当なものだ。それは、最も健全で、最も威厳があり、最も道徳的な方法での国際闘争の準備である。したがって、第8規則は、炎を煽るものではない。「私は自分の名誉のために、自分の国と他の民族の歴史をよく知り、そこからフランスの役割と国際社会への理解を引き出したいと考える」

衝突の絶えない世界で、穏やかなこのユートピアが小さき道を切り開いていくことなど到底無理な話なのだろうか。「私は知っている。これらの軽蔑と皮肉を熟知している。私がオリンピックを復活させようとした時、彼らは私を狂人のように扱った」(『二つの闘いの間で (ENTRE DEUX BATAILLES)』(1922)より)。だからこそ、クーベルタンは迷わず、再び戦いの中に身を投じたのである。彼は任務の初期段階で目標を定め、戦争終結後、臆することなくその目標を達成しようとした。

1890年 10月末から11月初頭にかけて、クーベルタンは、ジュール・ジークフリート (Jules SIEGFRIED)、フェルディナン・ビュイッソン (Ferdinand BUISSON) ラヴィッス (LAVISSE)、リョーティ (LYAUTEY)、ジョレス (JAURES)、ディドン神父 (le Père DIDON)、ワグナー牧師 (le pasteur WAGNER) ら約20名に「労働者教育大学設立のための呼びかけ (un APPEL POUR LA CREATION D'UN ENSEIGNEMENT UNIVERSITAIRE OUVRIER)」を提案。その理由は「《第4の権力》が到来するというある種の兆候がある(…)。国の政府間の、少なくとも政治的生命に関わる(…)。第4の権力は準備が整っていない」ことから、クーベルタンは、1887年にロン

ドンの貧困地区ホワイトチャペル、トインビー・ホールで目撃した英国人の例に倣うべきか未だ決めかねていた。しかし機は熟しておらず、この発意は進展しなかった。

1918年 4年後に戦争が終わると、ピエール・ド・クーベルタンは身辺を熟考して退却し、事実、ある種の勢力との関係を断ち切った。まもなくスイスに永住することになるが、世界的状況や政治的な動向を考慮するようになり、元いた環境から距離を置いたのだった。「民主主義を権力へと押し上げる、抗しがたい動きが起こったからである。それは数であり、数が力となり（……）、やがて戦争に突入した。民主主義は数の多さだけではなく、勇気、自己犠牲、忍耐力をも兼ね備えていることを証明した。彼らを導き指揮した人々を否定するのではなく、歴史の賞賛は、特に今、誰よりも無名の戦闘員集団に向けられるだろう（……）。民主主義は、何世紀にもわたる教訓に学び、利害関係のない科学と手を組むべきだ。あなた方は科学に不信感を持つかも知れないが、実際はそれ以上の恩恵を受ける。偉大な歴史的の流れの純粋な空気、宇宙の深淵の啓示、芸術の創造的な息吹が、その労苦に満ちた行進を照らすだろう。神殿の門を開けなさい。時は満ちた。人類の未来がそれを求めているのだから」（1918, オリンピック研究所編集；『アンソロジー』（1933, pp.121-122より転載）。

1919年 クーベルタンの知性は首尾一貫している。「唯一確かなことは、何事も国民の同意がなければ決まらないということだ。大衆は今、自らの運命を手に行っている（……）。特に民衆大学（universités populaires）を通して有益な試みが達成できるのではないかと考え、遠からず実行することを提案する（……）。頭脳的側面だけではなく（……）、肉体的側面もある（……）。<<すべての人にすべてのスポーツを（Tous les sports pour tous）>>。先進的な自治体や主要な労働協会の支援と協力を得て組織するのだ。それを<<プロレタリア・オリンピック（olympisme prolétaire）>と呼ぶ人もいるが、私はレッテルを貼られることを恐れてはいない」（「ジレンマ（LE DILEMME）」トリビュー

ン・ド・ジュネーヴ (Tribune de GENEVE) 1919年12月8日付)。

1922年 1919年の民衆大学 (LES UNIVERSITES POPULAIRES) は1921年に労働者大学 (LES UNIVERSITES OUVRIERES) と名称変更された。クーベルタンは自分が新たな闘いに向かっていることを自覚していた。「友人たちは、私がオリンピックという闘いで、予想外の完全勝利に恵まれたにもかかわらず、それを総括して強化することに満足せず、社会的混乱の不穏な夜明けに怪しげな場所で、不完全編成の軍隊と共に新たな闘いを企んでいることに驚いているようだ。だが、これは思いつきの決断ではなく、長い時間をかけて準備された行動であり、このところの出来事が早急性と必要性を際立たせたに過ぎない (……) 私は労働者階級に大きな期待を寄せている。そこには莫大な力が眠っており、壮大な可能性を感じるのだ (……)。この直感から、労働者自身による完全運営の労働者大学 (*universités ouvrières*) 構想が生まれた」 (「オリンピックと労働者大学・二つの闘いの中で (*ENTRE DEUX BATAILLES. De l'Olympisme à l'université ouvrière*)」) (『週刊レビュー (LA REVUE DE LA SEMAINE)』1月20日)

1923年 クーベルタンはいつも通り、愚直に分析を続け、プロジェクトを具体化していった。「プロレタリアートが一般文化への自由な出入りを組織的に拒否されていたことを否定する者はいないだろう。残念なことだが、有産階級 (……) は、遅まきながら、労働者の生産性が向上することを条件に、しづしづ、多少なりとも高度な職業訓練を受けられるよう便宜を図るだけであった (……)。知識は、私たちの祖先が夜明けにランタンを手にして向かった広大な山並みに似ている。遠くから見ると、山並みの扇情的な横顔が見えるが、近付くと全体が見えなくなった。私たちはグループに分かれて、別々の谷間を登り始めた。(……) 戦火の中で道筋が別れ、実際の山頂は遠いことが明らかになった。(……) これは、新しい都市を築く能力ある市民の姿を表現しており、その精神は常に輝き、常に存在するだろう。それは、次の5つの基本的概念と呼ぶことのできるものである：我々では計り知れない、星の動きを司る宇宙と

いう天文学的概念、この惑星を支配する物理的、化学的、電気の法則を包括する地球的概念、60世紀にわたって蓄積された、我々自身がその目録を保持する労働の歴史的な概念、人間を動かす（……）肉体的概念、理想、正義、光、また彼方への渴望、常に、また今後も人間を苦しめ、人間を動物と区別する哲学的な概念、である」と述べている。（『肉体労働者の高等教育に関する覚書きおよび労働者大学の組織』（11頁）

(MEMOIRE CONCERNANT L'INSTRUCTION SUPERIEURE DES TRAVAILLEURS MANUELS et l'organisation des Universités ouvrières)

彼の高い見識、資産家たちに対する疑義表明は、次第に顕著となり注目されるようになった。「多くの人の幸福は一般道徳を高める。少数の贅沢は逆にそれを低下させる傾向がある（……）。人は「公共サービス」について語り、漠然としたテーマであったとしても多くの注目を集める。一つは「労働者のためのサービス」と言うべきであり、その意味するところは、作業場、工場、建築現場での強制訓練期間である。訓練期間の長さや形態は地域社会の必要に応じて変化するが、今日の兵役制度の原則同様、瞬く間に不変のものとなるだろう」（『ヨーロッパはどこへ向かうのか（in *OUVA L'EUROPE* ?）』より）。クーベルタンは最後まで戦い続けた。生前に発表された最後の論文（チューリッヒ スイス高等学校新聞（Schweizer Hochschulzeitung ZURICH））より、1936年12月）は「大学、スポーツ、社会的義務」ではなかったか。そこにこそスポーツとオリンピズムすべての役割があるのだ。「努力することやオイリュトミー（調和のとれたリズム）の習慣は自然に身につくものではなく、学習や訓練を必要とする。（……）これら美德は練習することで私たちの内に浸透し根付いていく。それこそが、組織的スポーツ活動の優れた点であり、スポーツに打ち込む人々に節度と過剰の両方を課すことになる」。（ローザンヌ公報「オリンピック書簡より」**1918年**5月22日付け）

クーベルタンが求めたオリンピズムは、単なる身体能力の高さを超えたものだった。それは、相反するものが微妙なバランスをとり、弛まぬ努力をもって個人の開花を目指すものだ。今後重要なのは、すべての人々が等しく享受できる可能性と、人と人と

の友愛であり、これこそが彼の思想を着実に発展させる上で最も重要なポイントである。

ピエール・ド・クーベルタンの構想は、その後最大の広がりを見せることになる。

「(……) 1914年6月。当時は「オリンピズム」の完成に祝杯を掲げるかのように思えました。しかし今日、私はまるで2度目の誕生に立ち会っているようです。今後は少人数ではもう何もできないでしょう。以前はそれで通せたことが今日はそうではない。(……) 望むべきは(……)、喜び、活力、平静、清らかさの源である身体運動を、現代産業が開発した幅広い形で最も謙虚な市民に提供すること。これこそが、私たちが今日1つ目の石を積もうとしている、統合的で民主的なオリンピズムなのです」(1919年4月、ローザンヌで開催されたオリンピックの25周年記念式典でのスピーチ)。このように、古式ギリシャの体育館は「都市の体育館」となり、自治体の支援を受けたこの施設が「未来の都市の基盤」の一つとして貢献していくことになる。この世のしがらみから解放されたクーベルタンは、人生の不確実性の中で不屈の精神をもって探求をあきらめず、常に前進し続ける思想家であった。1926年に世界教育連合(Union Pédagogique Universelle)が開催したウーシー国際会議(「起業家」参照)で採択された文章に、彼の思想が全面的に反映されているのは偶然ではないだろう。(『アンソロジー』(1933, p.185))

スポーツの権利と一般文化に参加する権利

「すべて個人にはスポーツを楽しむ権利があり、行政は、成人市民に対してその手段を無償で提供し、それを良い状態に管理する義務を負うと共に、特定の団体への参加を強いてはならない」

「余暇や十分な経済的余裕がないために上質で心豊かな生活への参加が困難な成人は、文化一般に触れることを行政から保証されるべきである。文化の全領域を駆け巡るというのではなく、実用的、あるいは職業的な先入観にこだわることなく、無償で文化の全体像を把握できるようにすべきである」

II – 問いかけの時？

広い視野と寛大さを持つこのユマニスト、世界市民となったこの愛国者、多数派の正当性を確信した貴族。わたしたちは彼の中に夢を見ていたのだろうか。

1937年9月2日以降、世界は変わった。クーベルタンや彼の作品に対する認識や分析も同様だ。最初は、ある種の決まり文句が肯定される。それが維持され伝えられていくことで、改革や発展が不可能になってしまう場合もある。もう一つの姿勢として、その人を忘れてしまう、あるいはその貢献の独創性や重要性を故意に否定する、ということがある。最悪の事態はこれからだった。賢明な改革者、リベラルな思想家という彼の純朴なイメージに疑問を呈する人々が登場したのだ。クーベルタンは今や、仮面を剥がされるべき最もブルジョア的な存在となってしまった。

このような非難や疑問を頭ごなしに否定するだけで良いのだろうか。それらを回避、あるいは無視することは、誠実さとは全く言えない。逆に、たとえ辛辣な問いかけであろうと十分に自覚し、その質問に対してどのような答えが返ってくるかを確認することが大切であろう。

個人崇拜や指揮官たちへの罵倒、組織的な言及など、20世紀の行き過ぎた行為がもたらした結果を熟知する私たちは、同類の対立を避けなければならない。

そもそも、クーベルタンを「何事にも成功した男」として描くことは誤りであり、偽りでもある。「預言者郷里に容れられず」という格言があるように、フランスのスポーツ団体のトップたちは、彼の方針に異議を唱え、嫉妬し、彼を排除しようとさえした。晩年の手書き原稿（イヴ＝ピエール・ブーロンニュ（Yves-Pierre BOULONGNE）著『よりよくクーベルタンを知るために（*POUR UNE MEILLEUR CONNAISSANCE DE COUBERTIN*）』著作目録 p.461 より引用）（IOCのアーカイヴに保存されてはいるが、ナヴァセル家に帰属する）で、クーベルタンはこう吐露する。「もし途中で裏切りや嫉妬、不誠実を事前に予測していたら勇気を失くしていたら。が、まさかここまでとは予測だにしていなかった」。

1894年以降、彼はオリンピック事業のためにますます多くの時間を割くようになる一方で、フランス競技スポーツ協会連盟（USFSA, L'Union des sociétés françaises de sports athlétiques）の事務局長を続行することにも同意している。が、1898年11月、組合は「公式な自治体や州への独占的支援を保留する」議案を可決。これは、1900年にパリで開催予定であった第2回オリンピックの準備をクーベルタンが委託していた民間のラ・ロシュフーコー（LA ROCHEFOUCAULD）委員会を暗に否定するものであった。1891年に会長に選出されたレオン・ド・ジャンゼ子爵（Léon de JANZE）、ジュール・マルカデ、そしてピエール・ド・クーベルタン本人からもすぐに辞表が送付されたが、この3名は1900年の『連盟年鑑』に名誉会員として掲載された。クーベルタンが1907年1月13日付の「オート」紙上で「ロンドンオリンピック大会にフランスが参加するため」の委員会結成を発表した際にも同様の動きがあった。フランスの公式スポーツ組織は、クーベルタンを在野の部外者として無視し、国民スポーツ委員会（Comité National des Sports）を設立。このCNSと（当時CNSの支部組織に過ぎなかった）フランスオリンピック委員会の共同会長であるジュスティニアン・クラリー（Justinien CLARY）伯爵がCNSへの忠誠を誓ったのは、1914年の大会と祭典の時であったが、それは10年後の1924年、第8回オリンピック競技大会でも同様だった。クーベルタンは当時ローザンヌで暮らしており、パリから離れたおかげで苛立つことは少なくなったが、次第に人々から忘れられてもいった。そのためか、1929年1月22日にエリゼ宮で行われたガストン・ドゥメルグ共和国大統領による彼の歓迎会の記録がほとんど残っていないことは驚きである。この時、アンリ・ド・バイエ・ラトゥール（Henri de BAILLET-LATOUR）は、クラリー伯爵を伴い、IOCの同僚たちが見事な文字で署名した美しいビジターズブック（芳名録）をオリンピック大会の復興者に贈っている。

彼の文章や記事をまとめた予約購読版『アンソロジー』が出版され、70歳を迎えたクーベルタンに、ギリシャ、スイス、エジプト、ポルトガル、ラトビアのオリンピック委員会や様々な団体、世界各地の首都から祝電が届いたのは自明のことだが、パリやフランスのオリンピック委員会からは何の音沙汰もなかった。— 祖国の人々の態度に彼が深く傷ついたことは想像に難くない —。

晩年に、「他人の無関心や冷たさに私は心を痛めた。が、恨みなどしない」と、公にするつもりなく綴っていた私的な日記の中で、さらりと彼は打ち明けている。

再度の確認、少なくとも見直してみるべき点は、クーベルタンがオリンピック復興成功以外に、その豊かな才能を生かして取り組んだ分野はあったのだろうか、ということだ。彼は、スポーツ団体のリーダーだけでなく、名のある教育者、あるいは著名な歴史家であるエスタブリッシュメントからも、多かれ少なかれ「アマチュア」、あるいはディレタント（訳註：「銜学者」「遊び半分の人」「好事家」などの意）と見なされていたのではないだろうか。

彼のシーシュポスのごとき労働（訳者註：シューシュポスは「徒労」を意味する「シーシュポスの岩」で知られるギリシャ神話の登場人物）や教育者としての際限ない無私の努力は、実際に影響を与え得たのだろうか。彼は、大学での正式な学位を持たず、「通常の」組織およびネットワークに組み込まれていなかったため、その立場に同意するか否かに関わらず、関連分野において授かるべき地位や立場を享受できなかった。その事実は認めざるを得ないだろう。

さらに、彼の死から半世紀近く経った1986年、「今日のピエール・ド・クーベルタンの真価（“L'ACTUALITE DE PIERRE DE COUBERTIN”）」をテーマとした国際「シンポジウム」が開催され、フェルナンド・ランドリー(Fernand LANDRY)が4つのデータベースを検索し、北米における「学術的研究、エッセイ、科学的研究」の対象としてクーベルタンと彼の教育思想がどのような位置を占めているかを調べた。が、そこには実質的に研究すべきものがほとんど存在していなかったという。

クーベルタンが活動を開始した当初、英国人のチャールズ・ハーバート (Charles HERBERT、アマチュア体育協会・協会事務局長)、クーシー・ラファン (COURCY-LAFFAN)、グレンフェル (GRENFELL) (後のデスポロー卿)、そしてアメリカ人のプリンストン大学教授ウィリアム・ミリガン・スローン William Milligan SLOANE (1896年にアテネで開催されたアメリカ陸上チームの大部分は彼の教え子たちで占められた)、セオドア・ルーズヴェルトたちの支援を得、友情を育んでもきた。しかし、それらに支えられて大西洋の反対側でフランスの評価を高めようと心血を注いだにもかかわらず、彼の好意は必ずしも報われなかった。

現代のスポーツ界がその恩義を認めるアングロサクソンの人々にしてみれば、世界中で永続的なイベントとなるチャンスをオリンピックに与えたのが、愛国（国粋）主義者であるフランス人であったことも些細な苛立ちの種となったのではないだろうか。その結果、クーベルタンは、“筋肉隆々の慈悲深い英国人たち”、小説『トム・ブラウンの学校生活（*TOM BROWN'S SCHOOLDAYS*）』（1853年、仏訳刊行は1875年）で、1828年から1842年までラグビー・カレッジの学長であったトマス・アーノルド（Thomas ARNOLD）のイメージを登場させたトマス・ヒューズ（Thomas HUGHES）やチャールズ・キングスレー司教座聖堂参事（Canon Charles KINGSLEY）に、恩を売っただけの横領者だのと呼ばれ、「大会復活に貢献した長い系譜の中で、最後ではあっても、最初の人物ではない」などと無慈悲な言葉を発したがる者まで現れた。さらには、絶え間ない地政学的な言語の覇権争いの中で、創始者の影を追い払おうとする動きがあり、現在、大会の開会式で使用される定公式表現からクーベルタンの名前は消されている。

しかし、党派的な争いはさておき、事実は誰の目にも明らかだ。クーベルタンの高い見識と聡明な勇気、忍耐力が近代オリンピックを軌道に乗せ、単なる存続に留まらない生命を与えた、と誰もが証言する。必要不可欠な科学的厳密さをもって、例えば歴史家のリチャード・マンデル（Richard MANDELL）著『スポーツ：文化史的考察（*SPORT-A CULTURAL HISTORY*）』（1984年）、社会学者、人類学者の優れた研究『オリンピックと近代：評伝ピエール・ド・クーベルタン（*THIS GREAT SYMBOL*）』（1981）の著者ジョン・マカloon（John MACALOON）らによる、論争や党派的な思惑にとらわれず、誇張されることの少ない正当な分析が行われている。

スポーツの世界に限って言えば、クーベルタンには常に一つの固定観念が付いて回る。人々は彼のことを人伝でしか知らないのだろうか。妥当性を検証しないまま既成の常套句を繰り返し、控訴することもないまま、偏狭で独断的な**アマチュアリズム**の横柄な弁護人として、彼に有罪判決を下すというのだろうか。

この容赦ない主張の理由はよく理解できる。海峡の対岸から刺激を受け、スポーツを富裕層の青年たちの育成手段にしたいと考えついたその貴族は、否定され、時代遅れ

と言われ、スケープゴートのイメージを与えられて、後世まで嘲笑を浴びる運命的概念の完璧な擬人化ではないだろうか。

それにもかかわらず、『近代オリンピックの哲学的基礎 (LES ASSISES PHILOSOPHIQUES DE L'OLYMPISME MODERNE)』の最終メッセージにアマチュアリズムについて何も触れられていないのはなぜか。それは、当初から彼の闘いが、何より偽りに対抗するものだったからである。彼は1866年からイギリスで使われていた「アマチュア」の言葉の定義とは早い段階で決別していた。「アマチュア」は、当時、「紳士」のみを対象にした定義で、スポーツで金銭を得る人々だけでなく労働者や職人、日雇い労働者も含めた人々に対しては排他的であった。クーベルタンは、確かにスポーツ自体が職業であるとは考えておらず、その点を彼の行動の本質的な軸にすることも決してなかった。1925年にプラハで行われた別離の挨拶では次のように語っている。「紳士の皆さん、もし私がかの有名なアマチュアリズムの問題に言及しなかったら、皆さんは驚かれることでしょうね。これは想像したほど困難なことではありませんでした(……)。今日、この問題はより複雑です。物価高騰が基本概念を変えてしまい、スポーツが金持ちの娯楽になることを世論が許さないからです(……)。スポーツは、金銭欲が社会を根底から腐らせてしまう恐れのある中で発展してきました。名誉と誠意ある規範に立ち返って良い手本となることが(……)スポーツ協会に委ねられています」。

その7年後に出版された『オリンピック回想録』の第11章は「アマチュアリズム」と題され、曖昧さの微塵もなく次のように始まる。「これである。つねにこれである。(……)わたしはこの問題に関して頭を悩ませたことは一度もない。(……)。現在、わたしは老齢に達し、間もなくお迎えも来ようという具合であるから、異端邪説を公にしてもなんら憚られることはないだろう。(……)出身階級の違いは、スポーツにおいては何の意味もない。時代はもはや、アスリートたちに対して旅費や宿泊費を自腹で負担することを求められなくなっている。アマチュア資格は、なにがしかのスポーツ団体の管理上の規則において判断されるべきものではない。(……)」。

(訳註：「」内は、新訳『オリンピック回想録』伊藤敬 訳文より抜粋)

そして、**1936年**9月の夕方。一人の記者(9月4日付「オート」)が質問した際、クーベルタンは激しい口調で次のように答えている。

「私はこれまで、オリンピック宣誓の偽善と呼ばれる不当な非難を甘んじて受け入れてきました。しかし、あの有名な誓いを読んでみてください。私はその誓いの、恵まれた誇り高い父親です。オリンピックスタジアムに入場するアスリートたちに絶対的なアマチュアリズムを要求している箇所がどこにあるのでしょうか？ それは不可能だと最初に認めたのは他ならぬこの私です。私が誓いに求めるものはただ一つ、「スポーツへの忠誠心」です」。1906年に初めてこの誓いを考案した時、彼にとって最も重要だったのは文言ではなく、その意味するところの精神であった。

スポーツの領域にとどまっていた批判に、さらに過激な物言いが加わった。現行のあらゆる分野の体制や制度が拒絶され、手つかずの部分はなかった。競技スポーツやオリンピックもその例外にもれず、クーベルタンはそのアイコンとして、「1968年5月の子どもたち」や、その論敵たちから悪しざまに言われ、その次の世代が批判のステレオタイプを引き継いでいる。要は既成体制の全否定なのである。

1981年、『オリンピック神話』(LE MYTHE OLYMPIQUE) (479頁)、クリスチャン・ブルゴワ (Christian BOURGOIS) 編集) で、クーベルタンとオリンピックに最大の砲弾を発したのはジャン-マリー・ブロム (Jean-Marie BROHM) である。彼は容赦なかった (特にpp.323-471)。「クーベルタンの作品は、細部に関して、まれな例外を除き満場一致で承認されている。このような一致した意見は、私には複数の点で疑わしく感じられる。クーベルタンに捧げられた満場一致の賛辞は混乱と不明瞭さである。彼の書いた文章や報道された発言は、誰が読んでも明らかに盲目的な反動主義者のものであるにも関わらず、彼を偉大なユマニストと称するのは思い違いも甚だしい。：エリート主義、性差別、<<啓蒙的>>人種差別、<<穏健的>>ファシズム、秩序、規律、社会的ヒエラルキーの崇拜、(……)、自己存在の証としての謝罪、古き良きフランスの伝統に基づく植民地主義、抑圧されたピューリタニズム、労働者に対する保守的な父権主義、文明の退廃に同化した革命的な視点に反する猛烈な保守主義、リヨーティや36年のナチスの大会を主催したカール・ディーム (Carl DIEM) との交流、ヒトラー氏への賞賛、栄光の称号が並んでいるではないか！」。この激しい攻撃文書はベルナール・ヤネ (Bernard YANEZ) のレビュー (『なんと身体 (Quel Corps)』 (1977年4月) より) に『ファシズムの二つの顔：クーベルタンとヒトラー (Deux visages du facisme : COUBERTIN ET HITLER)』と

いうタイトルで掲載された：笑い話のようだが、クーベルタンの支持者たちは憤慨し、心を痛めながらもこの激しい分析を一蹴した。そして、著者が出典を研究しクーベルタンを読んだという事実を考慮に入れようとしなかった。（1910年総会以降IOCメンバーとなったモーリス・ペスカトル（Maurice PESCATORE）1932年の著作『コンゴの狩りと旅（*Chasses et voyages au Congo*）』にクーベルタンが書いた序文など、それまで世に出ていなかった文章も発掘されている）。いずれにしても、この「クーベルタン」の特殊な解釈は、特に競技スポーツに反対する立場の人々がことごとく支持しているのだから、肩をすぼめて無視などせず、内容をよく吟味して明確な判断をすることが望ましいのではないだろうか。

先駆者としての役割を果たしたクーベルタンが、生育環境による感性が確立されて以降、忠実に守ってきた分野がある。それは、社会における女性の役割、特に競技スポーツにおける役割であり、時が経っても変わることのないものだった。「少年たちにとって、スポーツ競技はすべての結果とリスクを伴う重要なものです。女性の進出は何かしら怪物めいたものを運び込んでしまいます。アムステルダムでの経験は、女性のオリンピック参加に反対する私の考えを正当化してくれたのではないのでしょうか。これまでに集められた証言の大多数が、第9回オリンピック大会で女性が行ったショーが繰り返されることを快く思わないものです。もし、女性がボクシングやサッカーをしたければ、それは彼女たちの自由です。そういった競技に集まる観客は、スポーツを観戦しようとしているのではないのですから」（『スイス スポーツ（*Sport suisse*）のパンフレット』（1928年11月））。左派の分析を待つまでもなく、女性を花束やトロフィーを運ぶ優雅な役割に限定し、このか弱い存在を世間の下劣な反応にさらすことを恐れたクーベルタンは、一度だけ時代に逆行する立場を貫き、その立場を固守したことで自らを窮地に追い込み、弁解に終始することになった。「私は、女性の陸上競技は悪しきもので、そのような陸上競技はオリンピックのプログラムから除外されるべきだと以前から考えています。（……）オリンピックは、個人（成人男性）を特別に、厳粛に讃えるために復興されたのです」（「オリンピズム40年」のスピーチ（*Discours des QUARANTE ANNEES D'OLYMPISME*））（1934）

さて、クーベルタンの「植民地主義」的発想についてはどうか。「人種と国家の原則的平等」を擁護した彼は「自然の不平等」を主張し続けた、と、断言するのは間違っ

ているのだろうか。1900年、万国博覧会期間中に開催された植民地社会学に関する国際会議で、クーベルタンは次のようにコメントしている。「この会議は、革命によって無意味に広められ、多くの誤りと欠点を持つ人種平等と絶対的進歩に関する理論に一石を投じた」（『フランス年代記（*LA CHRONIQUE DE FRANCE*）』第2巻）。植民地時代の思想に彩られたこれらの表現は、良心的に見ても、1871年の大惨事から立ち直ろうとする第三共和国の下でフランスの復活手段を外国への拡大に求めた愛国者クーベルタンのものであり、まさに息を呑むような話である。しかし、それに対して彼自身が答えを出している。ここで強調しておきたいのは、彼の引用の日付の重要さである。1923年のローマ会議でヴィットーリオ・エマヌエーレ（Victor-Emmanuel）国王を前にして発表した「アフリカ競技大会」を、1925年のアルジェでも、1927年および1929年のアレキサンドリアでも実現できなかったことを、『オリンピック回想録』（p.188）の中で再び取り上げ次のように批判している。「これらの基底にはいわば本源的な抗争があった。それは原住民を解放しようとする趨勢に対抗しようとする植民地精神による闘争であり、内地参謀本部がその趨勢を重大な危機とみなしていたことである」（訳註：「」内は、新訳『オリンピック回想録』伊藤敬 訳文より抜粋）と、「消え失せた過去に属する」議論を用いている。これらの黒人アスリートたち、また、何があろうと組織化を確信しているこのスポーツ・アフリカに、クーベルタンはメダルとラテン語の標語「*Athletae proprium est se ipsum nocere, ducere et vincere*（競技者本来の特性は、自己を知り、自己を律し、自己を克服することである）」を残している。— 彼が「スポーツはすべての民族の特権である」（『オリンピック回想録』p.213）— と断言する時、それは一貫しており、人類の歩みに対する彼の理解にはもはや何の歪みもないことが理解できる。

クーベルタンは、1936年のベルリン・オリンピックを放棄せず、あの「奇妙な人物」ヒトラーを否定しなかった。彼は、「この大会の決意のスローガンである『*Wir Wollen bauen*（我々は建設したい）』に以前から反対」しており、オリンピアで点火された聖火を運ぶリレーを考案した「聡明で熱心な友人であるカール・ディーム（*Carl DIEM*）」には感謝していた。1936年9月4日付の『オート』誌のインタビューではオリンピック大会への思いをこう語っている。「ベルリンでは私たちが考えもつかなかった着想に感動したわけだが、それは私が常に求めている情熱的な刺激であった」。この言葉だけを拾って、クーベルタンをファシストやナチスと見なすことが

できるだろうか。彼の業績のすべては、完全な肉体と精神の状態の人間を鎖で縛って追い詰めるような哲学や、全体主義体制の支持者とするために捧げられたのだろうか。実際、ファシストとの同一視などは、出来の悪いカリカチュアであって、きわめて受け入れ難いものである。

根本的な疑問が残る。クーベルタンは、「最も大胆で最も重要なブルジョア思想家の1人」（「BROHM（ブロム）」p.458）だったのだろうか。彼が批判されたのは、その政治的思想が「社会の平和」を求めるものだったからである。このように結論づけるには、彼の目的とその達成までの長い努力の道のりを無視、あるいは否定しなければならない。**1887年**11月14日、クーベルタンはロンドンのフランス国民協会の会員を前に「プログラム：ル・プレー（UN PROGRAMME: LE PLAY）」と題した講演を行い、「不平等は単なる法則でなく事実なのです」と堂々と述べた。クーベルタンは、私たちのように自然発生的に誕生してはいない。彼の知的プロセスの出発点となる土壌は、オーギュスト・コント（Auguste COMTE）、アレクシス・ド・トクヴィル（Alexis de TOCQUEVILLE）、イポリット・テーヌ（Hippolyte TAINÉ）、フレデリック・ル・プレー（Frederic LE PLAY）、エミール・デュルケム（Emile DURCKHEIM）などに見られる。しかし、非難の対象となり、思考のこわばりを招く厳格な家父長主義から発して、彼の思想がどのような道を辿ることになるかが問題である。その証拠に、1914年に開催された復興20周年記念のスピーチでは、「スポーツは、一種の民主主義の化身のようにも見えます」と述べ、「スポーツの発展は、階級闘争の党派や利害関係を持つ支持者を刺激し（……）、社会の組織化の中で、自分たちが望む変化がより穏やかな方法でかなうよう期待する人々の利益に働くのです」という自らの主張を展開している（「スポーツと社会問題（*Le sport et la question sociale*）」、『オリンピック評論』（1913年夏））。この文章は、人類が時間をかけて築き上げてきた遺産を危険にさらすことになると考えた彼の革新的嫌悪を裏付ける。**1919年**、さらに**1923年**には次のように述べている。「昔の社会は不公平の上に成り立っていました。そうでなければ生き残っていたかどうか問題です（……）しかし、その不公平の根拠を否定すれば、明白なことを否定ことになるのです」（『批評と歴史のページ（*PAGES DE CRITIQUE ET D'HISTOIRE*）』p.7）、
「人々は、知性や文化に対して、肉体労働者が常に屈辱的状况に置かれているという古くからの偏見を克服しなければならない」（『ヨーロッパはどこへ向かうのか

(OU VA L'EUROPE?) 』

金持ちや資産家の利己主義を確信した彼は、議論の質を向上させた。徐々に元いた環境から離れて自らの足で歩くようになったクーベルタンが、寛大な心と精神を表していたことに疑いの余地はない。もはや彼を特権の擁護者側に位置付けることはできないのは明らかだ。

＊

＊

＊

クーベルタンとアングロサクソン世界

近代のオリンピックを創設したのがフランス人であることや、大会規定文書の解釈を巡って訴訟問題が生じた際の使用言語がフランス語であったことは、時に英語圏（アングロサクソン）の人々にとっては苛立ちの種かも知れない（p.79参照）。クーベルタンが英米の実例にどれほど影響を受け、素直に恩義を認めていたか、彼らは気づいていないに違いない。近いようで異なるこの文明に向かって、彼は物理的に、そして知的に旅を続けた。その主なものを次にご紹介しよう。

1883年 1875年、12歳の彼が初めてトマス・ヒューズ（Thomas HUGUES）の魅力的な小説『トム・ブラウンの学校生活（*Tom Brown's Schooldays*）』と、ラグビー・カレッジの謝罪文を読んだとすれば、少し後にイポリット・テーヌ（Hippolyte TAINÉ）の洞察力に富んだ『イギリスについてのノート（*Notes sur l'Angleterre*）』（1869）を読破したとしても不思議はない。英国オリンピック協会のメンバーであり、その教育活動を長年率いた人物、ドナルド・アンソニー（Donald ANTHONY）は、『心、体、魂（*MINDS, BODIES AND SOULS*）』（1995年）という非常に知的な小冊子で「英国オリンピック遺産ネットワークのすべて（*an A to Z of the British Olympic Heritage network*）」を作成、また、『クーベルタンと英国と英国人（*COUBERTIN, BRITAIN and the BRITISH*）』に関する非常に有用な年表も作成した。彼によると、クーベルタンは、1881年に最初の訪英を果たした可能性があるという。いずれにせよ、その2年後にル・アーヴルからウィンザー近くのボーモント大学にいた友人を訪ねたことが確認されている。英仏海峡を渡った20歳の若者は、最初から英国人に対して特に好意を持っていたわけではなかった。が、教育の中で自らの信条とするほど心打たれ、興味惹かれる現実に出会うことになる。この信条は、閉ざされたまま埃まみれになっていた自国の教育を刷新すべく、教育機関に導入することをクーベルタンに決心させた（『教育学と青少年（*LE PÉDAGOGUE ET LA JEUNESSE*）』参照）。

1888年 1886年以降、彼の取り組みや最初の記事には、海峡の向こう側で見たこと、スポーツが果たすべき重要性などが克明に記されている。しかし、彼の著書『英国の教育（カレッジと大学）（*L'ÉDUCATION EN ANGLETERRE (Collèges et Universités)*）』には、彼の考えが旅行記の形式でまとめられており、同時に、正確な旅程も掲載されている。彼のユーモアと分析的な頭脳と、イートン校をはじめとしたパブリックスクールはこのように関わりを持つことになった（当時ボート部のキャプテンであり、後にオックスフォードの代表的なボート選手となる若き日のアンフィル（AMPTHILL）ともイートン校で出会っている）。：ハロウ、ラグビー、ウェリントン、ウィンチェスター、マールボロフ、クーパーズヒル（エンジニアを養成するために設立）、ロンドンのウェストミンスターとクリスト病院。また、エッジバストン（バーミンガム）とオスクートのカトリック施設、ボーモント(1883年7月より)のイエズス会カレッジ、フォート-オウグストウス(スコットランド北部、ネス湖の近く)のストニーハーストなどである。大学も訪問した：オックスフォード大学(1884年8月、1886年11月、1887年6月)、ケンブリッジ大学(1886年5月～6月)、ダブリンのキングズ・カレッジ(1886年11月)を案内したのは考古学者のチャールズ・ウォルシュテイン(Charles WALDSTEIN)であった。そして、エディンバラ大学。：ロンドンのスラム街、ホワイトチャペルにあるトインビー・ホールは労働者階級のための施設で、彼に深い印象を与えた。同年、彼は特にヘンリーのレガッタとその編成方法に関心を寄せ、5年後にフランスチームの出場が認められた時には喜び勇んで参加した。

1889年 ご存知のように（『スポーツマン』参照）、フランスにおける最初の「英国式」スポーツの布教者たちに加わった彼は、自らの知識の土壌をさらに深く耕し、『フランスにおける英国教育（*L'Education Anglaise en France*）』と題した新しい研究集を出版している。大英帝国と北米の学校を対象とした通信による大規模な調査は、ウィリアム・ペニー・ブルックス博士（Doctor William Penny BROOKES）から詳細な回答書を得て、自らの分析を補強して、6月15日にパリの「国際会議

(Congrès International) 」の報告書にまとめられた（「起業家」参照）。これが2人の友情の始まりとなった。

9月。クーベルタンは、公教育大臣から1889年7月17日付で「アメリカとカナダの大学を訪問し、両国の若者が設立した競技団体の組織と機能を調査する」という任務を託され、再びアープルから出航した。彼の調査は、帰国後、新書『海の彼方の大学（UNIVERSITÉS TRANSATLANTIQUES）』（1890）として出版される。この秋から冬にかけての長い旅の中で、彼が訪れたのは……。プリンストン（友人のウィリアム・ミリガン・スローン教授と）、コロンビア、バークレー、ウェストポイント、ニューイングランドではハーバード、ウェリーズリーカレッジ（女子のみ）、ボストン、アマースト、グロトンのヤングメン・クリスチャン・アソシエーション、カナダではモントリオールのマックギル大学、ケベックのラヴァル大学、オタワ（英語とカトリックに従順）、トロントなど。"北から南へ"では、コーネル、アン・ハーバー（ミシガン州）、シカゴ、サンルイス、ルイジアナ州、ヴァージニア州、フロリダ州では、トゥーラン（ニューオリンズ）、ヴァージニア（シャーロットビル）、レキシントン、（カトリック）ワシントン大学、ジョージタウン、ジョン・ホプキンス（ボルチモア）、そしてコネチカット州のエールなどが挙げられる。また、フィラデルフィアからニューヨークを経て、ボストンのインスティテュート・オブ・テクノロジー（Institute of Technology）で開催された「物理学学会（Congress on Physical Education）」に参加するためにボストンに向かった。学会セッションでの彼の調査結論は次のようなものであった。：「ドイツ式」の精巧な体操の「システム」や、スウェーデン式の独創的なエクササイズでは、自由な民主主義の中で行われる若者のスポーツの実践や学習と同等な好結果は得られない。

1890年- 近代的で国際的なオリンピックの開催が具体的になり始めたこの重要な
1894年 時期、クーベルタンは、海峡や大西洋の向こう側を常に参考にしてい
 た。クーベルタンは1890年10月にマッチ・ウェンロックで、善良な医

師ブルックス (BROOKES) に温かく迎えられた (「オリンピック」参照) が、1895年には、ニューヨーク版「レビュー・オブ・レビュー」で彼への追悼の辞を捧げることとなってしまふ。**1892年4月18日**には、パリの「レヴァロワ (le terrain du Coursing de LEVALLOIS)」競技場で、ロスリン・パークF.C.のラグビー選手らがスタード・フランセーズチームに対して激しい試合を展開 (5トライを含む12点对0点) し「教訓」を与える、という出来事に貢献した。彼はフランスの様々なチームをイギリスに連れ帰ったが、当然ながら、最初の「国際オリンピック委員会」には、イギリスのアンプティル卿 (Lord AMPHILL) とチャールズ・ハーバート (Charles HERBERT)、アメリカのウィリアム・M・スローン (William M. SLOANE) のための席が確保された。

1893年末から1894年初めにかけての大西洋横断の新たな旅では、後者との関係がさらに深まった。この旅の様子は『アメリカとギリシャの旅 (SOUVENIRS D'AMÉRIQUE ET DE GRÈCE) 』 (1897, 183頁) の第1部で紹介されている。ピエール・ド・クーベルタンは1896年の旅にも言及し、開眼の心持ちで新世界のダイナミズムと寛大さに明らかな共感を示している。1893年10月9日、作家のポール・ブールジェ (Paul BOURGET) や "サム"・ポッツィ («Sam» POZZI) と一緒に、アスレチック・クラブの屋上からその「シカゴ万国博覧会」開幕を見届けた彼にとっては、南北戦争終結から20年、アメリカの決定的な統一を象徴するものになった。アメリカ西部は、ニューヨークからサンフランシスコまで「サザンパシフィック」のブルマンカーで5日間かけて渡り、コロラド (デンバー)、ルイジアナ、テキサスを経て、カリフォルニアに到着、モンレーについての記述も残している。また、途中にある大学にも注目している。スタンフォード大学、パロアルト、カリフォルニア大学、オークランド近郊。若きテッロ・ダペリー (Tello d'APERY) が勇気をもってニューヨークで立ち上げた「裸足の使節団 ("La Mission des Va-nu-pieds ")」のツアーを終える前の**1896年9月**、クーベルタンはプリンストン大学150周年記念行事に参加した時の印象について、「キャンパス」の美しさ、「同窓生」による母校への

支援、様々なスポーツのイベントなどと一緒に紹介している。ノートの最後には、1895年から、プリンストン、ニューオリンズ、サンフランシスコで、現代フランス政治に関する年次討論会のために3つの賞を創設したことも記している（下記参照）。

このような英語圏-アングロサクソン世界とのつながりは、英語の定期刊行物に掲載された数多くの記事や、フランス語から英訳された様々な著作物にも登場する。1897年にニューヨーク/ボストンで、次いで1898年にロンドンで出版された『第三共和政治下におけるフランスの発展 (THE EVOLUTION OF FRANCE UNDER THE THIRD REPUBLIC)』、『1814年以降のフランス (FRANCE SINCE 1814)』(1899, 281頁) は、1899年に出版された『フォートナイトリー・レビュー』をまとめたものである。

チェルテンハム校長のクーシー・ラファン牧師 (Reverend COURCY-LAFFAN) とは互いに尊敬し合う最高の関係で結ばれていた。ラファン牧師は、1897年のル・アーヴル会議に登場直後から、1904年のオリンピック大会本部のシカゴからセントルイスへの変更、1908年のロンドン大会と1932年のロサンゼルス大会開催の実現など、主導的な役割を果たし、その偉業はすべてオリンピックの歴史に刻まれている（「オリンピック」参照）。しかし、あまり知られていないのが、クーベルタンが1906年末まで取り組んだ、1900年を扱う『フランス年代記 (LA CHRONIQUE DE FRANCE)』である。第1巻の「序文」に注目してみたい（「歴史家」参照）。彼はここで極めて明瞭に、このプロジェクトを始めた理由を記している。「7年前、先に訪れていたアメリカの大学を訪問した際、私はフランスの思想が著しく低下していることに驚いた。人々は少しずつ我が国の偉業に興味を失い、著作を読まなくなり、私たちの知的退廃（……）の思考にすっかり慣れてしまっていた（……）。討論会ではフランス国内事情に関心を持たれることもない。私は、我が国に好奇心を抱いてもらえるような賞を設けることを考えついた」。メダルはフランス共和国のイメージで装飾され、トッケヴィル・

カルノ牧師 (PASTEUR.TOCQUEVILLE. CARNOT) の輝かしい名が刻まれている。この賞はハーバード大学、ジョンズ・ホプキンス大学、バークレー大学でも設立された。クーベルタンは、政治、社会、文学、経済など様々な側面から「フランスの思想や情勢の進展に関する信頼性の高い、【制約を受けず公平な】情報」を提供すべく年鑑に取りかかった。他国からも同様の需要があることを知ったクーベルタンは、国際的な学術界で「フランスについて語り、フランスの支持者を増やしたい」と考えていたが、程なくある問題に直面した。言語の問題である。「外国人を啓発することが主な目的」であるため、当初は英語での出版を試みたが、最終的には当時の彼にとって最も有用で「一般的に入手しやすい」と思われたフランス語を選んだ。「少なくとも一時的に、複数の言語で出版する手段がなかった」のだ。

その後、とりわけ第一次世界大戦後に、クーベルタンはメダル計画の資金調達に行き詰まる。1931年にはついにカリフォルニア大学バークレー校の学生向けのメダルを廃止することを決定。それでも彼のアメリカ精神に対する理解は鋭く前向きなものであった。

1898年4月18日にパリの自由政治科学学院 (Ecole de Sciences Politiques) で行った「アメリカの歴史哲学」の授業のように、クーベルタンが大西洋の向こう側で見たもの、懸命に伝えようとしたものは、英国の高校や英国精神の様々な側面に対する彼の認識を広げ、見識を深めた。彼は、スポーツ、特にオリンピズム教育の観点からこれらアングロサクソンの情報源を有効活用し続けた。

この四半世紀の間に、英語圏の研究者の中には、**ピーター・G・マッキントッシュ** (Peter C. McINTOSH) 、1963年出版「**精神と社会 (SPIRIT AND SOCIETY)**」 (pp.1, 90-93, 188. **C.A.Watts and CO**出版)など、**ピエール・ド・クーベルタン**のオリンピックに関する活躍を再評価しようとする研究者が増えてきた。同様に、**ジョン・ルーカス** (John LUCAS) (アメリカ) は、いわゆる「筋肉質の善人たち」と呼ばれる人々の先行性を強調した。一方、同じくアメリカ人デヴィッ

ド・C・ヤング (David C. YOUNG) は、1833年にギリシャのパナジオティス・サウストス (Panagiotis SOUTSOS) の詩から、エバンゲリオス・ザッパス (Evangelios ZAPPAS) が出資した具体的なプロジェクトの成果まで、英国を通じて発展してきた取り組みを示し、ブルックス博士の存在なくして「独創的な」アイデアを得ることのできなかつたクーベルタンに先行した。しかし、クーベルタンが世界で巡回する国際的なオリンピックを考案したことは万人が認めるところである。ブルックスは、彼に宛てた最後の手紙の中で、周期的なオリンピック大会について、毎回ギリシャで開催するという自らのアイデアよりも好ましいと判断し、このアイデアに賛辞を送っている。

ケベック州ラヴァル大学のフェルナンド・ランドリー (Fernand LANDRY) は、クーベルタンとオリンピック・ムーブメントをテーマにした北米の高等教育機関の現状を把握しようとした。1981年、シカゴで出版されたジョン J. マカールン (John J. MacALOON) の著書『**オリンピックと近代：評伝クーベルタン (Pierre de COUBERTIN and the Origins of the Modern Olympic Games)**』((1981) シカゴ大学出版局, 359頁) で、クーベルタンの性格と功績に関して暫定的な評価を作成した。ドナルド・アンソニー (Donald ANTHONY) による分析は、その意義と面白さをこう表現している：「ピエール・ド・クーベルタンに関する英語で書かれた最も重要な文書である。この伝記的研究は、徹底した知的示唆に富んだリサーチに基づき、若者の文化的背景、教育、海を渡って国際主義に触れたこと、トマス・アーノルド (ラグビー) やウィリアム・ペニー・ブルックス (マッチ・ウェンロック) の影響などが記録されている。オリンピズムと競技大会復興の夢の実現、クーベルタンの根本的な哲学、その目的と目標を人類学的に分析している。この文章を最初から最後まで読み通す者は、総合教育としてのオリンピズムを深く理解することだろう」。

名言ベスト3

いくつものアイデア... 多少の差こそあれ、成果を上げた多大な取り組み... 結論の見えない幾多の戦い....

彼は一体何者であったのだろう。道を照らそうとするかのように、いくつかのキーフレーズが彼自身の言葉の中から浮かんでくる。

「人生はシンプルだ、なぜなら闘いはシンプルだから。優れた闘争家は後退する、闘いを放棄することはない。抗いきれず身を委ねたとしても、あきらめはしない（… …）。人生には連帯が必要だ。なぜなら闘争には連帯が必要だから（… …）。人生は美しい、なぜなら闘いが美しいのだから（… …） 真実、光、正義を追求する魂の闘い」（『ある王党派の物語』（*LE ROMAN D'UN RALLIE*）（1902年版）pp.321-322より）

「努力は至上の喜び。成功は目的ではなく、より高い目標のための手段である。個人は人類との関係においてのみ価値がある（… …）」（『コスモポリス』（*COSMOPOLIS*）第5巻より）（1897年3月?）『アンソロジー』（1933）. p161に転載）

「遠くを見つめ、率直に語り、毅然と行動しよう」“*Voir loin, parler franc agir ferme*”. ピエール・ド・クーベルタンはこの6つの言葉を、自身の著作に貼る「EX-LIBRIS」の装飾挿画の文字に選んだ。

ご存知の通り、これら著書のほとんどは、1944年5月19日（金）と20日（土）に行われたローザンヌ・ブック・ギルドのオークションで取り返しのつかない顛末を迎えた。浮き沈みの激しいこの世の暮らしの中での、重要で嘲笑的なエピソードの一つである。

クーベルタンには孤独の時間も多かった。

生前でも手に入れることが容易くなかったクーベルタンの著作は、彼の没後には書店からほとんど姿を消し、また、図書館の静寂の中に沈んでいった。その取り組みの中で唯一「近代オリンピック競技大会」だけが浮かび上がり生き残ったわけだが、それ

を単なる競技やパフォーマンスを競うだけのものと考え人々にはあまり理解されなかった。

けれど、そんなことはもうどうでも良い。この小柄な男性の知性と道徳が逆に歴史の一部となったのだから。間違いなくスポーツの歴史の、そして、思想と人間の条件をより良くするための果てしない闘いの歴史の一部に。

時流に逆らうことがあっても、むしろ流れがあるからこそ自分の道の探求を信じる彼の思想は無駄なのだろうか。その答えは、1920年にアントワープで初めて採用されたピエール・ド・クーベルタンの公式オリンピック閉会式の原文の言葉にある。「時代を超えて、より熱心で、より勇敢で、より純粋な人類のために。どうかそのようになりますように！」

*

*

*

知識としてのクーベルタン

クーベルタンの著書で必ず読むべき作品は何であろう。

作品に関する知識を深め、常にそれを更新することを任務としている組織はどこか。

A – クーベルタンの著作を通して

クーベルタンを知るためには、彼の著書に直接触れることが一番だ。が、入手不可能となってしまった作品に一体どのようにたどり着けるといふのだろう。実は、1986年以、状況は降好転し始めている。どの程度改善されているのかを見ていこう。

図書館で、あるいは、気まぐれな運が味方してくれたら、最初に見つかるのは次の3冊だろう。1冊目と2冊目は自伝的な洞察に富み、3冊目はクーベルタンが取り組んだ様々なテーマに光を当てている。

『21年間のキャンペーン (1887-1908)』 (*UNE CAMPAGNE DE VINGT-ET-UN ANS*) (1909). Librairie de l'Education Physique. 220 頁

『オリンピック回想録』 (*MEMOIRES OLYMPIQUES*) (1932). Bureau International de Pédagogie Sportive. 219 頁

『アンソロジー』 (*ANTHOLOGIE*) (1933). Paul Roubaud 出版. 184 頁

フランスでは、本書刊行前の四半世紀の間に再版されたのは全部で2冊のみ！なのである。

『スポーツ教育学』 (*PEDAGOGIE SPORTIVE*) (1972). VRIN 社. 157 頁

1934年の"新版"の復刻版でジョルジュ・ルウ (Georges ROUX) が序文を執筆。

『スポーツ心理学試論』 (*ESSAIS DE PSYCHOLOGIE SPORTIVE*)

ジェローム・ミヨン社 (Jérôme MILLON) (1992). 200頁

1906年から『レビュー・オリンピック』に掲載された記事がパイヨ（PAYOT）出版から出版されたのは、1913年のローザンヌ大会の時であった。記事の選択とレイアウト、序文は、勤勉でつましい、クーベルタンの若き協力者の一人、ロジェ・デパニア（Roger DEPAGNIAT）による。1913年3月の署名付きの序文は、現在の版では、歴史家のジャン＝ピエール・リウ（Jean-Pierre RIOUX）によるものと置き換えられている：「（……）私はクーベルタン氏の生き活きとして物怖じすることのない逆説が好きなのだ」。

長い間、クーベルタンの著作を探し出すことは砂漠の中で井戸を探し当てるようなものだった。特に、1886年から1937年にかけて、世界中の何十もの出版物に掲載された短文や論文、インタビュー記事などを見つけ出すのには特に困難を呈した。

ドイツに目を向けてみよう。ケルンのドイツ体育大学（Deutsche Sporthochschule）のカール・ディーム研究所（CARL-DIEM-INSTITUT）が1964年に設立され、2年後の1966年に最初の出版物、『**オリンピックの理想**』（*L'IDEE OLYMPIQUE*）を世に出した。これは1892年11月25日から1936年までのクーベルタンのエッセイやスピーチを、ドイツ語、英語、フランス語の3言語で編集（149頁）したもので、いくつかの誤植は認められるにしても、フランス人はライン川の向こう側に感謝しなければならない。47もの文章が再び「読める」ようになったのだから。

リゼロット・ディーム夫人による序文のついたこの作品には、隠された意図がなかったとは言い難い。その直感は、数カ月後にまったく同じタイトルの2冊目のパンフレット『カール・ディーム、「オリンピックの理想」（*CARL DIEM: L'IDEE OLYMPIQUE*）が出版されたことで裏付けられた……。何はともあれ、この時期に「クーベルタン」の名が人々の目に触れたことは確実に意義深いことであった。

フランス人が、クーベルタンの故国において、膨大な彼の著作の決定版となる著作集の編纂を企てる研究者も、それを企画する出版社も現れなかったのを残念に思うのも当然である。国が異なるとはいえ、この研究所で丹念に再構成された文章を基に、研究の確固とした核が形作られていることに対して、私は謙虚な気持ちで感謝を表したい。また、この研究所からは国際オリンピック委員会の指揮のもと、ファン・アント

ニオ・サマランチ会長の後押しに支えられて、1986年に大規模な著作集を出版するという壮大なプロジェクトが実現している。編集チームの功績でもあるが、特に、オットー・シャンツ (Otto SCHANTZ) の補佐を得た編集コーディネーター兼研究ディレクターであるノルベルト・ミュラー (Norbert MÜLLER) の働きが大きく貢献した。若々しい情熱をもって臨んだフランス人のジョルジュ・リウ (Georges RIOUX) 教授は「教育顧問」の役割を果たし、「ピエール・ド・クーベルタン解説家 (“Pierre de COUBERTIN éducateur”) 」の肩書きで第1巻の序文を執筆した。

三巻本選集 (*TEXTES CHOISIS*)

第I巻	登場	_____	P666
第II巻	オリンピック	_____	P760
第III巻	実践スポーツ	_____	P836

これらの選集は、総索引とテーマ別索引が付随された学問的信頼性の高い参照資料で、読者は大量のテキストを自由に閲覧できる。「知的な」分類や順序付けの原則がやや主観的であることや、各セクションの参照が当初の予想より多少煩雑となっているが、それはほとんど問題にならない。しかし、どんなシステムにも議論の余地はある。この最高質のツールにひとつだけ懸念があるとすれば、掲載された約 2000 ページが、クーベルタンの膨大な著作の約 7 分の 1 に過ぎないということだ。あとのものはどうなってしまうのだろう。

B – 著作目録 (BIBLIOGRAPHIES)

クーベルタン生存中に作成された唯一の書誌 (アンソロジー) が、『著述、演説、講演一覧表』 (*REPERTOIRE DES ECRITS, DISCOURS ET CONFERENCES*) である。この14ページの書誌は『アンソロジー』の各部分がまとめられたのと同じ時期の1933年に、ポール・ルーボー (Paul ROUBAUD) により出版された。

その後のものは、カール・ディーム研究所が1966年に出版した前述の『オリンピッ

ク思想』 (*L'IDEE OLYMPIQUE*) の出版まで待たなければならない。この作品は、8ページにわたり、手書き書簡を含む226件の年代別書誌情報が掲載されている。

2年後、国際オリンピック委員会は、前作に加えて52の文献を追加した。『ピエール・ド・クーベルタン男爵著作目録』 (*BIBLIOGRAPHIE DES OEUVRES DU BARON PIERRE DE COUBERTIN*) (1968). CIO. 278番

スタード・フランセの元指導者で、文庫「クセジュ (『Que sais-je?』)」に掲載された『スポーツの歴史』 (*History of Sport*) の著者であるベルナル・ジレ (Bernard GILLET) は、控え目で謙虚な研究者である。625部限定の謄写版自費出版で知る人ぞ知る存在となってしまうが、個人的な研究を続けて『ピエール・ド・クーベルタン著作目録』 (*BIBLIOGRAPHIE DES OEUVRES DE PIERRE DE COUBERTIN*) (1971) を作成した。

イヴ＝ピエール・ブーロンニュ (Yves-Pierre BOULONGNE) は、ノルマンディーのカーン大学 (下記参照) に提出した論文の中で、自らの調査により、「未発表文章発掘」 (*TEXTES INEDITS DECOUVERTS*) (pp.395-396) と「著作目録」 (*CATALOGUE DES OEUVRES*) (pp.397-439) を完成させた。(「ピエール・ド・クーベルタン 人生と教育学著作」 (*LA VIE ET L'OUVRE PEDAGOGIQUE DE PIERRE DE COUBERTIN*) (1975). Editions LEMEAC (オタワ)より)

ノーベルト・ミュラーの思い入れとオットー・シャンツの援助により、『三巻本選集 (*Textes choisis*)』 (上記参照) 出版を準備するにあたって、決定的な前進を見ることになった。彼らのおかげで、クーベルタンの著作の「約 95%をカバーする」解題付きの目録を手にする事ができたのだ：**ピエール・ド・クーベルタン『目録』 (*BIBLIOGRAPHIE*). 国際ピエール・ド・クーベルタン委員会 (1991, 175 頁)**

このように、10年間の研究と検証を経て、ほぼ網羅的なフレームワークが確立されている。今後さらなる驚きの発見があるとしても、それは現在明らかにされていることへの補足要素に過ぎないと考えて良い。

C -クーベルタンの業績と関連作品

英語の研究についてはすでに述べたとおりである（「クーベルタンとアングロサクソン世界」参照）。ここではフランス語で書かれた作品を紹介していきたい。

クーベルタンに関する作品は、生前に1冊、死後1980年までに3冊の本が出版されただけで、この事実は、彼が長い間自国で無理解、無関心にさらされていた事実を象徴しているようだ。しかし、次の短い解説をお読みになれば、この4作品の興味深さがお分かりいただけるであろう。

『フランスの活力を擁護する者』 (**UN PARTISAN D'ENERGIE FRANCAISE. PIERRE DE COUBERTIN**) エルネスト・セリエール著 (Ernest SEILLIERE) (1917) Henri DIDIER. 160頁. この研究論文は、道徳・政治科学アカデミー会員のセリエール男爵によるもので、クーベルタンに関連する初めての著作である。この研究の視点と限界が第一次世界大戦という極めて特殊な文脈の中に位置づけられていることを、タイトル自体が如実に物語っている。

それから40年。クーベルタンの作品が書店から消え、わずかな資料でさえ手に入らない参考文献の砂漠を若い世代が彷徨っていたその頃、ようやく、2人の作家によるクーベルタン伝記が登場した。『ムッシュー・ド・クーベルタン』 (**MONSIEUR DE COUBERTIN**) アンドレ・セネ (André SENAY) ・ロベール・エルヴェ著 (Robert HERVET) (1956) S.E.S. PARIS. 191頁. エドゥアール・エリオ (Edouard HERRIOT) による短い序文があり、要点が簡潔に説明されている他、詳細な一覧表や書誌情報も掲載されている。この研究は、当時の文献の空白を埋めるものではあったが、細部の誤りはさて置き、ほとんどの引用出典が提示されていないという点でやや不満が残った。

『ピエール・ド・クーベルタン：オリンピックという叙事詩』 (**PIERRE DE COUBERTIN L'EPOPEE OLYMPIQUE**) マリー=テレーズ・エケム著 (Marie-Thérèse EYQUEM) (1966) CALMANN-LEVY. 300頁. 本格的な伝記がついに現れた！ この大作は、クーベルタンの魅力を引き出し復活させ、人物とその存在に対し世間が持っていたと思われる狭い認識を一変させた。この好著は、青少年・スポーツ

省長官から公的機関によるクーベルタン生誕100周年記念式典の準備を託された人物によるもので、式典の1年後に上梓を見た。著者は、彼の人生や環境、時代を見事に再現しただけでなく、多くの証言者と直接会って未発見の資料を発掘した。また、当時誰も言及しなかった同時代の出版物から、フランスのスポーツ運動の指導者たちが、男爵や彼の周辺の複数の委員会が持つ権威に対して敵意を募らせていくことを示す記事をも引き出している。一方で、マリー=テレーズ・エケムは、いくつかの目的のために意図的に作成されたある文章と正確な引用とを混在させている。研究者はこの著書の質の高さを認めながらも、最も興味深い引用部分の多くに付く「未発表の原稿」という注釈に消化不良を起こした。最終的には、議論の余地のない研究というよりは、むしろ聖人伝に近い作品と言えよう。

『ピエール・ド・クーベルタンの生涯と教育学の業績』 (LA VIE ET L'OEUVRE pédagogique DE PIERRE DE COUBERTIN) イヴ・ピエール・ブーロンニュ著 (Yves-Pierre BOULONGNE) (1975). LEMEAC (オタワ). 484頁.

イヴ=ピエール・ブーロンニュは、第21回オリンピック夏季大会がモントリオールで開催される前年に、カーンでの努力の結果である国家学位論文の出版社をカナダで見つける。この著書は多くの理由で注目に値する。第一に、その堅固な構造が、2つの主要な部分にわたって正確な参照を伴う引用に支えられているという点。サン・マルゲリート・シュール・メールにルーツを持つブーロンニュは「ノルマンディー」という切り口で、クーベルタンが1914年の第一次世界大戦開始前に数回にわたってミルヴィルに滞在していたことを巧みに暗示する。また、『コー地方のレビュー』などの未知の出版物を発掘し、全体を通して科学的な注釈と付録文書を備えているのも特徴である。この充実した内容を持つ本の貢献は多岐にわたるが、何より優れているのは、著者がクーベルタンの思想が生み出した知的背景を明らかにした上で、どの角度から読んでも中心テーマである「ピエール・ド・クーベルタンの教育的使命」という大きな軸に立ち返っている点である。

歳月は過ぎ、1986年。この年は極めて重要な年であった。10月、IOC総会でバルセロナとアルベールヴィルが第25回オリンピックの夏季・冬季大会の会場に決定したと同時に、上述の『三巻本選集』が世に出たのだ。この3巻のボックスセットには『**ピエール・ド・クーベルタン 写真で見るその人生**』 (PIERRE DE COUBERTIN SA

VIE PAR L'IMAGE) 』 (ジョフロワ・ド・ナヴァセル著 (Geoffroy de NAVACELLE) 1986, IOC, 96頁) というタイトルのパンフレットが付いている。マリー・ド・マドレ (Marie de MADRE、クーベルタンの姉) の二人の孫の一人、ジョフロワ・ド・ナヴァセルが忍耐強く、センス良くまとめた写真集だ。彼はまた、ポール・ド・クーベルタンが1930年に売却を余儀なくされたミルヴィルの城と土地を買い戻した。この小冊子にはそれまで一般には公開されていなかった多くの写真が掲載されている。

一方、3月18日から20日にかけて、国際オリンピック委員会の支援を受けた国際ピエール・ド・クーベルタン委員会のもと、約50名の講演者や専門家が集まり、初のクーベルタン国際シンポジウムがローザンヌ大学で開催された。クーベルタンの死後49年の歳月が流れていた。その数カ月後には、クーベルタンの科学的複合体の構築を担当したマインツ大学の ノルベルト・ミュラー (Norbert MULLER) 教授の尽力と敏速な働きで、シンポジウムの議事録が出版されている：『**ピエール・ド・クーベルタンの現代性**』 (*L'ACTUALITE DE PIERRE DE COUBERTIN*) (1986). (編集長：ノルベルト・ミュラー (Norbert MULLER), CIPC/IOC, 313頁) : 教育学、哲学、社会学、オリンピック・ムーブメント、政治学、美学：フランス語および英語での16の講義とその解説は、クーベルタンの思想が世界中でどのように受け止められているかを、その「ブラックホール」を通して最も有益な光で照らし出してくれる。

また、1986年にナヴァセルが「厳選文書」のレイアウト修正を依頼した人物、**ルイ・カレバ (Louis CALLEBAT)** が出版した伝記『**ピエール・ド・クーベルタン**』 (*Pierre de COUBERTIN*) 1988, FAYARD, 273頁) にも注目したい。カレバはクーベルタンの著作を大いに活用し、既知のデータを用いて基本的に8つの章に分けて紹介している。クーベルタンの若かりし頃を彷彿とさせる非常に詳細な記述、例えば、第一バチカン公会議が開催された1869年のローマの思い出や、「第一バチカン公会議」「第二バチカン公会議」の記述などは注目に値する。アルベール・ソレル (Albert SOREL)、アナトール・ルロワ・ボウリュ、ポール・ルロワ・ボウリュ (Anatole et Paul LEROY-BEAULIEU) ら、自由政治科学学院の「知的達人」に関する記述も含む。

クリスチャン・ジリエロン (Christian GILLIERON) が「**ピエール・ド・クーベ**

ルタンの時代のローザンヌとオリンピックムーブメントの関係」 (LES RELATIONS DE LAUSANNE ET DU MOUVEMENT OLYMPIQUE A L'EPOQUE DE PIERRE DE COUBERTIN) 1894-1939, 221頁) と題し、1992年3月にローザンヌ大学芸術学部で発表した学位論文が1993年に出版。何よりローザンヌ市やIOCの公文書を丹念に扱ったおかげで、この論文は、細心の注意が払われた正確な歴史研究のモデルとなっている。クーベルタンの長期的で広範囲なプロジェクトや、直接的な行動および戦略との狭間に存在する、人生の困難に直面した人の明らかな矛盾（人生の困難に直面する人なら誰でもそうである）、そして、晩年の20年間のあまり知られていない経済的状況にも着目し、特に、国際オリンピック委員会の会長職から退いた後の姿などを紹介している。未来の研究者たちが、先人たちのさらなる上を目指していくための道を拓いてくれる作品である。

パトリック・ショレ (Patrice CHOLEY) の作品、『ピエール・ド・クーベルタン 第2回十字軍』 (Pierre de COUBERTIN La deuxième croisade) 1996, 国際オリンピック委員会コレクション「歴史と事実」 (Histoire et faits), 256頁) ローザンヌ・国際オリンピック委員会の協力者であるサヴォワ出身のこの研究者の真剣な取り組みは、未活用の情報源にアクセスできる、という点で興味深い。著者は、「折衷的教育学」の構築において、「社会的問題が(……) 主要な問題であった」ことを当初(1890年) から示しており、特に1915年以降の晩年と、スイスへの移住に焦点を当てている。国際労働局の積極的な支援を得ようとしたクーベルタンの奮闘や、アルベール・トマ (Albert THOMAS) (1932年没) との関係については非常に興味深い。資料として、クーベルタンが1934年2月28日と3月1日に行った「オリンピズム」に関する2つの講義を白黒で示した、ポール・ヴァレリー (Paul VALERY) 指揮によるニース大学地中海総合研究所のプログラムが付随されている。ジリエロン (GILLIERON) の分析同様、本書でも、勇気と色褪せない希望で彩られた生涯の中の暗黒の時代に新たな光が当てられている。

読者の皆さんは、ご紹介したフランス語作品の総数が10にも満たず、著者の数も同様であることにお気づきだろう。もし私が『真実のピエール・ド・クーベルタン』 (LE VRAI PIERRE DE COUBERTIN) で自らに課した限界以上の、様々な小冊子や記事などを含めていたら、この数はもっと多くなっていただろう。オリンピックに捧げられ

た作品については言うまでもない。

この点については次のように言及するに留めたい。

- 3人のスイス人、2作品の著者**ルイ・メイラン** (Louis MEYLAN) 『ピエール・ド・クーベルタンの総合的ユマニズム』 (*L'Humanisme intégral de Pierre de COUBERTIN*) (1941). および『ピエール・ド・クーベルタン、教育者、そして社会学者』 (*Pierre de COUBERTIN pédagogue et sociologue*) (1944)、忠実な**フランシス=マリウス・メッセルリ** (Francis-Marius MESSERLI) と**オットー・マイエル** (Otto MAYER)
- 1961年以降、オリンピックで開催されている総会に参加した国際オリンピックアカデミーの数多くの講演者たち
- 1963年10月28日、国際体育・スポーツ評議会 (CIEPS) がパリで開催した国際評議会で、クーベルタン生誕100年を記念してユネスコ事務総長**ルネ・マユ** (René MAHEU) が行ったスピーチは、その指導的理念を見事に拡大させ話題となった。
(『ユネスコの書簡』 (*LE COURRIER DE L'UNESCO*) (1964). 第1号所収)
- 私自身の著書として、特に次の作品を挙げておく。

ジャン・デュリー著 『**オリimpiズムと教育**』 (*OLYMPISME ET EDUCATION*)

モスクワ世界スポーツ科学会議 (Congrès mondial des Sciences du Sport). (1974年11月28日). (「体育とスポーツ. 第135号」 (Education Physique et Sport. n° 135. 1975年9-10月より抜粋) (20頁およびメモ)

同著者 『**ピエール・ド・クーベルタンの闘い**』 (*LES BATAILLES DE PIERRE DE COUBERTIN*) (1981). (ピエール・アルノー (Pierre ARNAUD) 監修「躍動の中の身体」 (LE CORPS EN MOUVEMENT). 第8章より. PRIVAT)

同著者 『**生きているピエール・ド・クーベルタン**』 (*PIERRE DE COUBERTIN, VIVANT*) (1989). (1989年2月10日、ソルボンヌ大学で「*TEXTES CHOISIS*」の公開プレゼンテーションが行われた。フランス・クーベルタン委員会編集)

同著者 『**オリimpiズムの誕生**』 (*NAISSANCE DE L'OLYMPISME*) (1992). (□ナ

ルド・ユブシエル (Ronald HUBSCHER) , J.デュリー (J. DURRY) , ベルナー・ジュー (Bernard JEU) 、共著『歴史は動いている』 (*L'HISTOIRE EN MOUVEMENTS*) アルマン・コラン社刊1992 第6章より。

- 第16回冬季オリンピック・アルベールヴィル大会およびサヴォア大会の前夜、**フランス・クーベルタン委員会**の7人のメンバー (イヴ-ピエール・ブーロンニュ (Yves-Pierre BOULONGNE) 、ジャン-フランソワ・ブリッソン (Jean-François BRISSON) 、ジャン・デュリー (J. DURRY) 、ジャック・マルシャン (Jacques MARCHAND) 、ジョフロワ・ド・ナヴァセル (Geoffroy de NAVACELLE) 、ジャン・ポラック (Jean PAULHAC) 、ジャン・ロドンフュゼル (Jean RODENFUSER)) は、各自14枚の原稿用紙に署名し、ネルソン・パイユ (Nelson PAILLOU) の序文を添えて、『**よりよく知ろう ピエール・ド・クーベルタン**』 (*MIEUX CONNAITRE PIERRE DE COUBERTIN*) という一冊の記録にまとめた。

D - クーベルタン周辺

長い間孤軍奮闘してきたクーベルタンの功績を称えるべく、様々な団体が設立され発展してきた。その中でも異論なく特出する団体が2つある。

フランス・ピエール・ド・クーベルタン委員会

COMITE FRANCAIS PIERRE DE COUBERTIN

1950年8月12日、アルフレッド・ロジエル (Alfred ROSIER) 、ジャン・フランソワ・ブリッソン (Jean-François BRISSON) 、ピエール・ロスティエリ (Pierre ROSTINI) の3名が「ピエール・ド・クーベルタン委員会」を発足させた。当初はポール・シャイレー＝ベール (Paul CHAILLEY-BERT) 教授が委員長を務め、その後、アンリ・ブールドウ・ド・フォントネー (Henri BOURDEAU de FONTENAY) 、ルイ・ボンタン (Louis BONTEMPS) 、ヴィルフリート・バウムガルトナー (Wilfrid BAUMGARTNER) 、再びルイ・ボンタン、アルフレッド・ロジエル、ピエール・コ

ント・オッフエンバック（Pierre COMTE-OFFENBACH）と引き継がれ、彼らの任期中に委員会は「ピエール・ド・クーベルタン・フランス“ Comité Pierre de COUBERTIN France”」と名乗っていた。

1990年11月30日のピエール・コント・オッフエンバックの逝去後、3人の創設者の一人であり、フランスの大学スポーツの創始者の一人でもある**ピエール・ロステイーニ（Pierre ROSTINI）**を中心とした意見がまとまり、1991年6月17日、全会一致で22名の正会員からなる理事会の会長に選出された。

フランス・ピエール・ド・クーベルタン委員会（Le COMITE FRANCAIS PIERRE DE COUBERTIN）の目的は、クーベルタンのすべての作品を公にし、その理念を明らかにして広め、スポーツや身体的・野外的活動の発展を奨励し、クーベルタンが定義した理念に沿って、関連する考察と提案をしていくことである。

フランス委員会は、その教義上の立場やさまざまな出版物、小冊子を通じてクーベルタンの業績と理念の継続に重要な役割を果たし、現在もその努力を続けている。

所在地：MAISON DU SPORT FRANÇAIS

1 Avenue Pierre de COUBERTIN,

75640 PARIS - CEDEX 13 - FRANCE

TEL：(16) 1.40.78.28.47 FAX：(16) 1.40.78.28.86

国際ピエール・ド・クーベルタン委員会

COMITE INTERNATIONAL PIERRE DE COUBERTIN

クーベルタンの活動は本質的に普遍である。その使命に世界的な広がりを持たせ、彼の思想の源流から現代の問題への答えを提供することを願って、1978年、ローザンヌにおいて、スイス人とフランス人の著名人が「国際委員会」を設立した。

委員長は、1924年のオリンピック800m走銀メダリストで外科医としても活躍したポール・マルタン（Paul MARTIN）（スイス）が務めた後、クーベルタンの姪の息子、ジェフロワ・ド・ナヴァセル（フランス）が着任。その後任には、スペイン・オ

オリンピック・アカデミー 会長コンラド・ドウランテス (Conrado DURANTEZ) 氏 (スペイン) が就任した。

この委員会の主な目的は、ピエール・ド・クーベルタンの「総合的ユマニズム」を研究を周知、普及させることであり、オリンピック精神を広め、クーベルタンの知的遺産を深めることを目的とした国内および国際的な組織と協力することである。なお、名誉会長ファン・アントニオ・サマランチ (Juan-Antonio SAMARANCH) 率いる国際オリンピック委員会と密接につながる。

出版物 (複数の小冊子) やイニシアティブ (選択テキストの出版への協力、シンポジウムの開催、書誌情報の準備等) を通じて活動を行い、効果を発揮している。

国際オリンピック委員会 Le COMITE INTERNATIONAL OLYMPIQUE

国際オリンピック委員会は、ピエール・ド・クーベルタンが生前に世に送り出したアーカイブの真の管理者であり、その生みの親に関するオリジナル文書の中心的存在である。

所在地 Château de VIDY, 1007 LAUSANNE, Switzerland

TEL : (+41) 21 625 3271 FAX : (+41) 21 621 6216

オリンピック博物館 MUSEE OLYMPIQUE 1 Quai d'OUCHY

近代オリンピック大会が発表され、国際オリンピック委員会設立99周年目の1993年6月23日に開館したミュージアム。ギャラリーにはクーベルタンの遺品が展示保存されており、オリンピック・ムーブメント創始者にふさわしい敬意を表している。

所在地 Case Postale 1001 LAUSANNE, Switzerland

TEL: (+41) 21 621 6511 Fax: (+41) 21 621 6512

その重要性が未だ評価されないままの記録や文書が、主にクーベルタン家の子孫たちの手元にあるはずである。

ローザンヌ以外では、ケルン (ドイツ) のスポーツ大学 (SPORTHOCHSCHULE) が

多くの資料を収集している。

祖国への思いを抱きながら世界市民となった彼の生まれ育った地では、青少年・スポーツ省スポーツ振興課の組織「**国立スポーツ博物館**」が、その役割を担っている。

(訳註：国立スポーツ博物館は2013年に閉館し、2014年にリヴィエラで再開館された)

※

※

※

ピエール・ド・クーベルタンと嘉納治五郎

この度「真実のピエール・ド・クーベルタン」の日本語版が、国際ピエール・ド・クーベルタン委員会と日本ピエール・ド・クーベルタン委員会との共同プロジェクトによって出版されることになった。既にフランス語、英語、中国語、ポルトガル語、スペイン語版が世に出ているが、この日本語版では新たに、クーベルタンと嘉納治五郎という、お互いに異なった道を歩みながら、本質的に見事な一致にたどり着いた2人の絆と交流について触れないわけにはいかないだろう。

まず、強い印象を受けるのは、2人が同時代を生きたということである。嘉納は1860年生まれ、1938年没、クーベルタンは1863年生まれ、1937年に没している。ただ、ほぼ同時代を生きたとはいえ、両者にはそれぞれに相違するところもある。

彼らは1889年には出会うことができたかも知れないが、わずかなところでその機を逸している。この年、フランス革命100周年を記念する万国博覧会が開催された。それに合わせてエッフェル塔が昂然と建設されたパリに、嘉納は9月から10月にかけて滞在している。文部省からの委託による教育方法研究のためのロシアを含む初の長期滞欧旅行の一環で、帰国するのは1891年始めのことである。一方、クーベルタンもまた、1891年9月21日に文部大臣の命を受けて、北米の教育方法研究のために旅立つことになるが、それに先立つ6月に開催された国際的規模の「教育における身体運動普及のための会議 (Congrès pour la propagation des Exercices Physiques dans l'Éducation)」の中心人物として、その事務局長も務めている。ここにおいて2人の歩みは正に交錯しているのだ。

1889年、28歳の嘉納は既に官職に就いており、そのキャリアの輪郭は非常にはっきりしている。明治始めの1868年に御影（神戸）から上京した嘉納は、1877年に東京帝国大学に入学し、1881年に文学士号を取得（政治学および理財学専攻）した。— クーベルタンも同年、文学のバカロレア（1880年）に続いて科学のバカロレアを取得し地を固めている — さらに、嘉納は1882年初頭、審美学・道義学を学んで同

大学文学部哲学選科を卒業。1886年に学習院の教頭に就任し、その5年後に文部省に迎えられ、1891年から1893年まで文部省参事官を務めている。とりわけ1893年に就任した高等師範学校長職は、1920年に官を辞すまでのポストである。この経歴から見ても彼の職業人生は由緒正しいものであった。

それに対して、ピエール・ド・クーベルタンは、生涯にわたって在野であり続け、公権力や国家機関に疑念を抱き、可能な限りその影響をはねつけた。彼の強みでもあり弱みでもあるこの「余白」的な立場は、嘉納の立場とは明らかに好対照をなしている。

とはいえ、1つの目的が2人を結びつける。心血を注ぎ、偉業を成し遂げたその一大プロジェクトと、それぞれが永遠に同一視されていくのだ。嘉納は自分の虚弱さを自覚していた。熱心な読書家である彼はあらゆる方面に興味を抱き、幼少時代から英語を学び、翻訳者になり得るほどの実力を備えていた。同様に、スポーツ（体操、水泳）の技術も身につけていた彼は、さらにその先を目指す。21歳の時点で既に、技術のみならず精神的にも総合的レベルに達していた嘉納は、講道館（その道を講ずるところ）柔道（柔=しなやかさ、道=方法・手段）を開設する。当初、道場は20㎡の間に12畳。そこで最初の門弟9名を育成した。嘉納の柔術形の価値は次第に周知されるようになり、自らも励んだ。1899年、陸軍省と関係性を持つ武徳会（武道の奨励、武徳の育成、教育、顕彰の向上を目的として設立された公的組織）の「柔術試合審判規定」制定委員長に就任した嘉納は、会を極端な軍事的伝統から遠ざけ、やがて、技や形の制定、段位、厳格な道徳規律、品位ある身なりや作法、柔道スタイルなど、広域にわたる発案および考案に取り組んでいく。

嘉納から遅れること10年。1892年11月、29歳のクーベルタンは近代オリンピックの冒険に身を投じた。その成功は、猜疑心や無理解、嘲弄、反発、妬みや嫉みなどのあらゆる壁を乗り越えて勝ち得たものであった。彼が弛まぬエネルギーと実質的な組織センス、高い見識を発揮して、誕生したてのムーブメントを永続させる基盤を築いたことはよく知られている。特に、よりどころとなったのが国際オリンピック委員

会である。委員たちは選挙ではなく現会員による指名で決まり、任務も無期限であるため、どのようなスポーツ団体や政治権力からも圧力を受ける恐れがなかった。

2つの軌跡が重なるのはここからである。2005年8月にストラスブール大学でアンドレ・ロッシュ教授（André RAUCH）指導のもと和田浩一が発表した修士論文『日本におけるオリンピック・ムーブメントの起源（原題：L'origine du mouvement olympique au Japon）』では、嘉納がオリンピックの舞台に登場するまでの過程が丁寧に描かれている。ここで『オリンピック評論（Revue Olympique）』が初めて月刊化された1906年1月に目を向けてみよう。その中でクーベルタンは、巻頭の時評欄の一つに『Jiu-Jitsuについて』（日本語の「柔術」をフランス風に綴ったもの）という文章を寄せ、「完成させ、体系化し、命名したのは日本人である。今後も日本のものであり続けるだろう」と確信を持って述べている。ただ、ここではまだ嘉納のことを取り上げていない。1908年のロンドン大会の後、オリンピック・ムーブメントの浸透をアジアに広げようと考えたクーベルタンは、友人である初代駐東京フランス大使（1907-1913）のオーギュスト・ジェラル（Auguste GÉRARD）に相談を持ちかける。ジェラルは本野一郎（在サンクトペテルブルグ日本大使）の口添えで1月16日に嘉納を迎えた後、外務大臣に相談したところ文部大臣の同意をも得られたのだった！ ジェラルは1909年1月19日付のピエール・ド・クーベルタンに宛てた手紙にこう記している。

「（中略）あなたから依頼された調査は一筋縄では行きませんでした」。そして、「東京高等師範学校の校長であり、講道館創設者として著名な嘉納（治五郎）氏を推薦します」と。

1909年5月、ベルリンで開催されたIOC総会の初日、クーベルタン推薦のもと満場一致で48歳の嘉納の委員就任が承認され、6月15日付で関係者に伝えられた。IOCのアーカイヴに保管されている9月14日付の嘉納の英文の返信には「心からの喜びをもって」謝意が表され、『オリンピック評論』誌と著書『21年間のキャンペーン』の受領が記されている。

嘉納が64番目の、そして、アジア人初のIOC委員となった当時、— 107人目の委員、中国人の王正延より13年も遡る — オリンピック文化がほとんど存在していなかった日本で、嘉納は変革のために動き出す。和田浩一による詳細な分析によれば、「嘉納はクーベルタンの要請を受けて1911年に日本オリンピック委員会を設立したが」、それは「大日本体育協会」のことであり、この協会が1912年のストックホルム・オリンピック大会で日本を代表することになった。嘉納は当協会の名誉会長となる1921年まで初代会長を務めた。

1912年7月2日、嘉納はストックホルムでピエール・ド・クーベルタンと初めて出会い、彼らの対話はほぼ2時間に及んだ。12月4日にはパリでも面談している。

1909年から1938年までの29年間、嘉納治五郎は、当時のヨーロッパ訪問には長い船旅を余儀なくされたにもかかわらず、26回のIOC年次総会のうち9回（世界大戦中は1度も開催されなかった）に参加し、欠席は17回。彼はとりわけ、1924年のパリ大会を除いてすべての夏季大会の入場行進で日本代表団の先頭に立ち、その存在感を発揮した。嘉納は、パリ行きを断念せざるを得ない理由を貴族院の会期と重なってしまうためとし（1922年に選出されたことから彼の公人としての重要な立場が伺える）、この第8回オリンピック大会に合わせて、1924年2月3日付けのタイプで打たれた（自筆署名入りの）長い手紙の中で遺憾の念を表している。

クーベルタンの嘉納への評価は揺るぎないものだった。例えば、1913年にマニラで初開催された極東選手権競技大会は、実際には日本、中国、フィリピンのみでの参加であったが、1934年までにマニラ、シンガポール、東京、大阪のいずれかの都市で10回行われている。この大会について、クーベルタンは嘉納に全面的な信を置き、また大会の組織においても、嘉納は重要な役割を果たしている。フランスとアジアは遠く、この時代の連絡はもっぱら海上で行われていたにもかかわらず、両者の書簡交換が継続されていたことは間違いない。しかし、クーベルタンがヨーロッパで最も頻繁に会っていたブロネ（BLONAY）、バイエ・ラトゥール（BAILLET-LATOURE）、エドストローム（EDSTRÖM）、グート＝ヤルコフスキー（GUTH-JARKOVSKY）とのやり取りとは異なり、嘉納との書簡の痕跡はほとんど残されていない。ローザンヌのIOC歴史文書センターの嘉納ファイルには、クーベルタンが受け取って保管していた

貴重な手紙の原本が残っている。しかし、クーベルタンから嘉納へ宛てた手紙は一体どうなってしまったのだろうか。謎は残る。意想外にしてまことに遺憾であり、残念かつ惜しまれるのは、講道館の豊富なアーカイヴが今日に至るまで沈黙を保っていることだ。いつかの日か幸運な日本人研究者がこの秘宝を見出し、ついには新しい光が射すことを願うばかりである。

1920年以降、先に述べた職業上の重責から解放された嘉納治五郎は、オリンピック・ムーブメントをなおざりにすることなく、自らの時間とエネルギーのほとんどを、自身がその顕現である柔道の普及活動に捧げた。彼はあらゆる角度から考察し、そこに精神性を吹き込み続けた。1930年に初めて開催された日本選手権が競技の進化を祝福するものであると彼が認めるとすれば、追求すべき「究極」の目標は「勝利」ではなく自己鍛錬、肉体よりも自らの可能性と精神的・道徳的な内面探求であろう。彼は、自身が創始した柔道の発展のために努力を惜しまず、19年、20年の間に女子部門をも開設した。この点で、女性のスポーツへの積極的な参加について常に消極的であったクーベルタンとは対立する立場に立っている。

彼はその活動に制限を設けることなく、布教者としての使命に忠実に模範を示し、自ら出向いては口頭で説き、川石酒造之助のような弟子をフランスに派遣するなどして活動の範囲を拡げていった。1933年に5回目のヨーロッパ旅行をし、翌年には再びパリを訪れている。ティエリー・フレモー(Thierry FREMAUX)の新刊『柔道家 (JUDOKA)』(STOCK社2021)は、カンヌ映画祭の総代表の手による大変面白い自伝的な作品であるが、彼の波乱に充ちた物語の中に、嘉納の生涯が重要な柱を成すものとして現われている。

1936年、嘉納はアメリカを経由して、第11回オリンピック夏季大会と国際オリンピック委員会総会が開催される、異様なまでに豪奢で鬱陶しくさえあるベルリンへと向かう。ロサンゼルス大会での日本選手の活躍を受けて、次回1940年のオリンピック開催地に東京が立候補するという大義名分を掲げた嘉納であったが、世界的には1933年に国際連盟を脱退した日本は厳しい立場にあった。それでも、7月31日にアドロンホテルで行われた東京とヘルシンキの対抗投票では、36票対27票(非公式

集計) と明らかに有利な結果となり、日本のオリンピックへの推進が決定的なものとなった。

嘉納治五郎は栄誉に包まれていた。1934年に講道館誕生50周年が祝われ、政府関係者臨席の中、旭日大綬章を受章する。— なぜ1932年ではないのかは不明 —。1922年以降、スイスのローザンヌおよびジュネーヴに正式に居を構え、1937年6月22日にローザンヌ市から市民栄誉賞を授与されるなど、様々な栄誉を(1927年、1932年、1934年に)受けたものの、非常に孤立し、経済的困難な状況の中で生涯を終えたクーベルタンとは一線を画している。

1937年7月7日、日本は中国に宣戦布告する。夏の東京、冬の札幌という1940年の大会が問題視されたのは、特に王正延博士の要請によるものだった。嘉納治五郎は1938年3月13日から18日まで、カイロ―ルクソール間のナイル川の船上で行われた、いわゆるカイロ総会に参加していた。77歳を超える彼にとって8回目のヨーロッパ旅行である。嘉納は、組織委員会を代表して「日本が撤退する理由はない」と宣言。1936年総会における開催都市決定結果を請け負った。

この旅で、嘉納はピエール・ド・クーベルタンに最後の表敬をすることになる。IOC役員の一員として、彼はカイロからアテネへ、そこからオリンピアに向かった。クーベルタン自らの希望で、その心臓をオリンピア遺跡近くにある白い大理石製の記念碑の下に納める式典に参列するためである。大理石の柱には、1927年4月17日、クーベルタンが参列した近代オリンピック再興記念式典の際に創始者を称え、その名前が刻まれていた。その後、パリに向けて出発し、アメリカ(ニューヨーク、シカゴ、シアトル、バンクーバー)を周った嘉納は、横浜へ向けて帰港途中の船内で病に倒れる。1934年来、腎臓結石を患っていたのだ。1938年5月4日早朝、太平洋上で逝去。肺炎、あるいは腸疾患であったと伝えられる。1938年(昭和13年)5月9日に埋葬。没後に勲一等旭日大綬章を追贈されている。

不幸なことに、第二次世界大戦が目前に迫っていた。1916年のベルリン大会と同様、1940年オリンピック大会の中止も決定。東京が1938年7月16日に撤退を表

明していたのだ。しかし、それは再出発の始まりに過ぎなかった。東京は1964年にアジアで初めての開催都市となり、柔道も競技プログラムに採用された。そして今「第32回オリンピック競技大会」が、2021年7月23日に延期されることになった。この機会に、この2人の男性の関連性を詳しく探っていくことは期待されており、また当然の成り行きでもあった。2021年5月24日、ネルソン・トッド (Nelson TODT) (ブラジル・ピエール・ド・クーベルタン委員会会長) が主宰する「ラテンアメリカ・クーベルタン研究センター (Centro Latinoamericano de Estudios Coubertinianos)」で、ダニエル・デ・ラ・クエバ (Daniel de la CUEVA) の指導のもと、グアテマラの若い研究者、ペドロ・ダニロ・ポンシアノ・ヌニェス (Pedro Danilo PONCIANO NUÑEZ) が『ピエール・ド・クーベルタンと嘉納治五郎』をテーマにしたビデオ会議を行った。『東西を結ぶオリンピックの架け橋 (El puente olímpico entre oriente y occidente) 』では、2人の創始者の間に一致する点を明らかにし、そのルーツ、知的好奇心、共通する貢献を強調している。

ベルリンでの投票前から数週間にわたり、クーベルタンは何度も東京の立候補に期待を寄せ、IOCの決定に満足していることを表明していた。1937年9月2日、74歳で急逝したクーベルタンが生前に綴った最後の文章が、同年12月10日の会報 (第8号) 「1940年第12回オリンピック東京大会ニュース (*Nouvelles des Olympiques XII^e Olympiade, Tokyo 1940*)」に掲載されたことは私にとって大変示唆的である。その中で彼は、「日本の友人たち【へ】最高の敬意と祈りを」と述べている。「日本が第12回オリンピックを東京で開催するという使命は、これまで誰にも託され得なかった最も重要なものです。それは、オリンピック聖火を全世界に伝え、アジア全体をオリンピズムと密接に結びつけるだけでなく、ヨーロッパの古代文明の中でも極めて貴重なヘレニズム文明と、アジアが生み出した最も洗練された文化や芸術とを結びつけることでもあるのですから。数千年の歴史を持つ、世界的な関心事である和睦に何らかの形で貢献できたことは、私にとってこの上ない喜びです」 (1937年7月29日 ジュネーヴにて)

このように、お互いを認め合った2人のユマニストは最後まで対話を絶やすことはなかった。世界中の道場の壁では、口ひげを蓄え、慈悲深くちゃめっ気ある眼差しの

嘉納治五郎が見守っている。その輝きはピエール・ド・クーベルタンのフランス風の立派な口ひげの陰に、そして瞳の中にも備わる。彼らを結びつけるキーワードは「教育」。両者とも真の教育者であり、オリンピックにしても柔道にしても、彼らにとってのスポーツはあくまで道であり手段であって、決して目的ではない。最も重要なもの、それは精神なのだ。

「すべてのスポーツをすべての人に」… 恵まれた環境で育った彼らは2人とも、分かち合うことを願い、刺激を受け、似通ったヴィジョンを持って行動した。

1932年、北カリフォルニア大学で行われた講義で嘉納は述べている。「柔道は感動と美を生じさせる」と。一方、「美的感覚」を重要視したクーベルタンも1914年、『週刊レビュー (Revue Hebdomadaire)』誌に寄稿し、スポーツは芸術に「動きの詩」を授け得る、と記している。

2人の創始者

類似する性格の理想。同一の創造する力

ピエール・ド・クーベルタン - 嘉納治五郎

ジャン・デュリー

2021年6月1日、パリにて

(敬称略)

著者と本書について

ジャン・デュリー氏は実に多くの顔を持つ作家です。世界的なスポーツ史家として著名であるだけでなく、フランス国立スポーツ博物館の創設者にして国際オリンピック史家協会「功労賞」受賞者、さらにピエール・ド・クーベルタンに関する最も著名な研究者の1人でもあります。

2003年には、「クーベルタン直筆の書簡・文書（1889-1915年）」に関するデュリー氏による緻密な研究が、国際オリンピック委員会の後援を受けて出版されました。

また、デュリー氏はフランス・ピエール・ド・クーベルタン委員会の名誉会長であり、30年以上にわたって国際ピエール・ド・クーベルタン委員会の副会長を務めています。

本書は、1994年に国際オリンピック委員会創立100周年を記念して『LE VRAI PIERRE DE COUBERTIN』と題しフランス語で出版。当時のIOC会長ファン・アントニオ・サマランチ氏の序文が添えられました。現在、次のようにいくつかの翻訳版が世に出されています。

- 英語版（1996年）：アトランタオリンピックを記念して「*PIERRE DE COUBERTIN THE VISIONARY*」（日本語タイトル『先覚者ピエール・ド・クーベルタン』）出版
- 中国語版（2008年）：北京オリンピックを記念して出版
- ポルトガル語版（2016年）：リオデジャネイロオリンピックを記念して出版
- スペイン版（2018年）：ブエノスアイレスで開催された夏季ユースオリンピックを記念して、トーマス・バッハ現IOC会長が序文を寄稿
- 日本語版（2021年）：東京2020オリンピック開催を記念して制作

おわりに

東京 2020 オリンピック競技大会の開催を期に、国際ピエール・ド・クーベルタン委員会（CIPC）の支援、日本ピエール・ド・クーベルタン委員会（CJPC）の協力により、原本が日本語に翻訳、公開される運びとなりました。翻訳者のシュルモリ国岡なつみ（Natsumi Surmely-Kunioka）氏はスイス在住で、1998 年長野オリンピック冬季大会の際には IOC 公式通訳として IOC と日本との橋渡しを行なった経歴をもっています。

この日本語版には、原本にはない書き下ろし原稿「ピエール・ド・クーベルタンと嘉納治五郎」が最終章に含まれました。嘉納治五郎は柔道の創始者であり、日本とアジアにおける最初の IOC 委員で、日本をオリンピックへの参加に導いた人物です。本文中の記述にあるように、クーベルタンと嘉納は同時代を生き、互いに影響を与えたと伝えられています。

本書がより多くの人々に読まれ、近代オリンピックを創出したピエール・ド・クーベルタンという時代の先覚者についての理解がさらに深まることを願います。

最後に、日本語版制作の実現に向けて惜しみない協力をしていただいた CIPC 会長ステファン・ヴァッソング（Stephan Wassong）氏と同事務局長エルヴィラ・ラミーニ（Elvira Ramini）氏に心から感謝いたします。

2021 年 7 月吉日

日本ピエール・ド・クーベルタン委員会 プロジェクトメンバー

（伊藤 敬、大野益弘、建石真公子、田原淳子、來田享子、和田恵子、和田浩一）

メンバーを代表して 田原淳子

原版 制作/印刷

アッププロダクションズ

6, passage doisy - 75017 paris

1997年1月

日本語版制作

日本ピエール・ド・クーベルタン委員会

2021年7月